

---

# 紺碧の海 金色の砂漠

御堂志生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紺碧の海 金色の砂漠

### 【NZコード】

N65400

### 【作者名】

御堂志生

### 【あらすじ】

～琥珀色の誘惑＆アジアン・プリンスのコラボレーション～  
公務員の父を持つ月瀬舞の前に、いきなり現れた王子様がシーク・ミシユアル。婚約者を名乗る彼は、舞を砂漠の国クアルン王国に連れ去り、花嫁にした。色々あつたものの2人は恋に落ち、舞は弱冠20歳で王妃となつた。日本での挙式・披露宴も終え、2人はアズリア最東端の国、アズワルド王国をハネムーンの地に選ぶ。アズワルドもクアルンと同じ産油国。国王たちは面識があり、なにやら思惑もあるらしく……。2組のロイヤルカップルが送る、海

と砂漠のロマンス！（サイトで先行連載中の作品です）

## (1) 恋のパラダイス（前書き）

本作は「琥珀色の誘惑」「アジアン・プリンス」のコラボ番外編となります。

複雑なストーリーではありませんので、こちらだけでもご覧いただけだと思いますが… 設定や人物描写等、端折つていてる部分はありますのでご了解下さい。

人物や国名・団体・施設などの名称は、全て架空のものです。実在のものとは一切関係ございません。

## (1) 恋のパラダイス

透き通るような青い海、どこまでも続く白い砂浜、写真で見ただけの樂園<sup>パラダイス</sup>が眼下に広がる。

「アル！ 見て見てつ。海がある、海が！ 凄いよ。ビーチがつて人が泳いでるつ！」

舞はおよそ一国の王妃とは思えぬ脳天氣で、はしゃいだ声を上げた。

「舞、海に囲まれた島国で育つたのであるつ、何がそんなに嬉しいのだ」

ミシユアル国王は専用席に腰掛けたまま、隣の席で窓に張り付く新妻を不思議そうな面持ちで見ていた。

確かに日本は島国だ。海に面していない県のほうが少ない。多くの子供が親に連れられ、一度は海水浴を体験するだろう。だが、舞にはその経験がなかつた。海と言えば潮干狩りが精々で、可愛い水着を着て海の家でヤキソバを食べたり、ビーチで男の子にナンパされたり……。

「……したかつたのか？」

舞が嬉々として語る？憧れのビーチサイド物語？をミシユアル国王は不機嫌そうな表情で聞いていた。

「まあ、水着とか自信なかつたから、特には……。でも、アズウォルドのバカنسなんて夢だつたなあ～」

一人が向かっているのは、東京から飛行機で五時間、日本のお隣

にあるアズウォルド王国だつた。

珊瑚礁の海に囲まれた十一個の島々からなる国。十八世紀に王国として独立して以来、アズル王室が統治している。日本とは基本的に仲が良くて、王族はもちろんのこと国民の半数以上に日本人の血が流れているという。

カトリック国だが独自の国教会を作つていて、異教徒……とくに日本人観光客のためにウェディング専用教会まである。一年前に結婚した現国王夫妻にちなんで、ビー・チウェディングが大人気らしい。日本のテレビ番組で特集していたくらいだ。

（青い瞳のプリンスなんて、ホント白馬にピッタリよね……ゼッタイに言えないけど）

アズウォルド王国大使館発行のパンフレットを見ながら舞はため息を吐く。

現在のレイ国王は三十一歳でミシューアル国王より四歳年上だ。逞しいワイルド系のミシューアル国王に比べ、写真のレイ国王は頬や顎、肩のラインもすつきりしていて小柄に見える。

日本の皇族の方々を前にした時、舞は敬意が先に立ちひたすら緊張するだけだった。しかし隣国のプリンス・プリンセスとなると、どうしてもミーハー気分が前に出てしまう。万に一つも「きやー力ツコいい！」なんて言おうものなら、夫婦喧嘩は必須だろ？

「浮かれるのは結構だが、機外に出る時はアバヤ着用を忘れるな」「えーっ！？ 南国でもアバヤなの？ 暑さの質が違うんじゃない？」

驚く舞にミシューアル国王は自然のように言った。

「南国だろうが北極だろうが、我がクアルンの王妃がアバヤなしで人前に出るものではない。いずれ変えて行くにしても、今は駄目だ。私たちの間に男子が生まれ、お前が妃としての役目を果たした後に

なる

何気なしに言つた言葉なのだろうが、舞にすれば力チンとくる。「じゃあ、男の子を産めなかつたら、わたしは役目を果たしたことにならないわけ?」

「私の子を産むのが不満か?」

「そんなこと言つてないでしょつ!」

「では問題ない。近い将来お前は母親となり、子供たちの中には後継者となる男子がいるだろう」

ミシユアル国王の言つ理屈は正しい。舞は夫を愛しているし、子供だつてたくさん欲しい。彼が望むなら、男の子だつて生んであげたいと思つ。

問題は言い方なのだ。

舞は不愉快そうな顔をして黙り込み、座席に深く腰掛けた。すると、ミシユアル国王も何事か察したのだろう。アームレストの上に置かれた舞の手に自分の手を重ね、ギュッと握り締めた。

「また私は言い方を誤つたらしいな。……息子は欲しいが、娘であつても変わらず愛するだろう。もし仮に、私たちにアツラーの恵みがなくとも、妻はお前だけだ。誓いは生涯変わらぬ。安心いたせ」

舞の心からアズルブルーの海が消え去り、琥珀色一色に輝いた。重ねた手の上にさらに舞が手を置こうとした時、ミシユアル国王が手首を掴んだ。そのまま軽く引き寄せ、くちづける。何度キスしても、そのたびに胸がドキドキする。

「ア、アル……待つて、あの」

「何を待つのだ? 着陸まで、私に逆らうことは許さぬ。王命だ」

唇を重ねるキスから、もつと深く舌先を絡めるキスへと進みかけ

たその時 。

『陛下っ！ なんたることです、嘆かわしい。クアルン国王たるものが人目も憚らず接吻など』

『つるさいぞ、ダーウード。君は国外、クアルンの法により裁かれることはない』

『しかし、国王ともあらつものが』

『判つた。下がれ』

七十歳近いと思われる側近、ダーウードは泣々下がつた。

彼は前国王の側近を務めていた。前国王は『若い側近らが手本とするように』との心遣いで、ダーウードをミシコアル国王の側近につけたのだ。父親の心遣いを無碍にも出来ず、ミシコアル国王は『ありがたく』受け入れたのである。

日本滞在中に途中から加わったダーウード・ビン・アッドゥーハーはとにかく仕来りにつるさい。

舞が少しでもアバヤを忘れてホテルの廊下に出たものなら、

『王妃たるもののがつ！』

と、皿を剥いて怒鳴る。

舞にすれば、厄介な奴がついてきたな、というのが本音だ。今回、ターヒルはシャムスとの結婚式を終え、クアルンに残つたままだし、ヤイーシュはまだ日本に仕事があるとかで東京に残つた。

お年寄りは大事にしそひ、と教育された舞である。お爺さんと呼ぶような年齢のダーウードに文句は言い難い。というより、彼は頑なに外国語を否定し、アラビア語しか話さない。そのため、今の舞のアラビア語スキルでは話にならないのである。

立派な白い髪をたくわえたダーウードには、ミシコアル国王も苦手意識を持っているようだ。命令にこつもの威圧感がなく、どこか

弱腰である。

舞は再び窓から下を見ようとするが……。

アーモレストの影でミシユアル国王が舞の手を握った。五本の指をしつかりと絡め、ちょっと? イケナイ「ト?」をしている気分になる。

「……お楽しみは着いてからだ」

キラッと光った瞳の輝きに、ベーチサイドでの色々を想像して頬が緩みそうになる舞だった。

## (1) 恋のパラダイス（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

サイトでは前半部分（紺碧の海編）まで終了しています。

先が気になる方はぜひ、サイトまでお越し下さいませ（^ ^）／

## (2) 舞のプレイボーイ

アツ・サラーム アライクム

アラビア語の挨拶が大きな横断幕に書かれて、空港ロビーに掲げられていた。

クアルンとアズウォルドの国旗がそこかしこに下がり、ロープの向こうでは国民たちが小さめの国旗を振っている。その中には舞のことを意識してか、日本の国旗もあった。

出迎えにはなんと国王夫妻が空港まで来てくれたのだ。

青い瞳が印象的なレイ国王は、見るからに優しそうで落ち着いた大人の男性である。ミシユアル国王の髪が焦茶でビター風味のチョコレート色なら、レイ国王の風に靡く柔らかそうな髪は甘いミルクチョコレートの色をしていた。

パンフレットで見るより背も高いし体格もいい。だが、彼の前に立ち握手を交わすミシユアル国王と見比べると……。

(やつぱりアルのほうがカッコいい)

舞はニカブに隠れて口元を綻ばせた。

すると、背後から女官がスッと歩み寄り『アーライシャ様、陛下のお呼びです』。舞はハツとして顔をあげ、ミシユアル国王の傍まで行くのだった。

『妃のアーライシャである。一週間の滞在に許可を下してくれたレイ国王に対して、感謝を述べたいと言っている』

(えつ？ そ、そんなこと言つた？)

何だかよく判らないが、感謝を述べないといけないらしい。  
舞はバクバクする心臓を宥めつつ、レイ国王の前で手を合わせて  
一言だけ口にする。

『ありがとうございます』

他に言い様がないし、正確なアラビア語で話せるか自信がない。  
聞き取りはだいぶ出来るようになつたが、話すのはまだまだ危険だ。  
書くとなると……頭が痛くなつた。

『ようこそ、アズウォルドへ。私が国王のレイ・ジョセフ・ウイリ  
アム・アズルです。彼女は私の妻でクリスティーナ。お一人の滞在  
が両国にとつて実り大きいものであることを願っています』

それは驚くほど綺麗なアラビア語だった。

青い瞳と言えばヤイーシュがそうだが、レイ国王はまた違つたブ  
ルーである。柔らかい物腰と口調で、おそらく彼に嫌悪感を感じる  
人間などいのではなかろうか。

そう言えば……舞が高校生の頃、隣国のプレイボイ王子？ アジ  
アン・プリンス？ の異名をチラホラと耳にした。日本人婚約者が若  
いのをいいことに、世界中にガールフレンドがいるとかどうとか。

(アルと違つて絶対に片手じゃ足りなさそう……)

舞はそんな感想を抱きつつ、『あ、ありがとうございます』。馬  
鹿の一つ覚えのように、同じ言葉を繰り返しただけだ。

「はじめまして。アラビア語は話せませんが、日本語は話せます。  
私の日本語はおかしくないですか？』

なんとクリスティーナは舞に日本語で声を掛けてくれた！  
アメリカ人の彼女はたぶん英語だろ？、と思つていたので一瞬返答に詰まつ……。

「いえっ！ とんでもありません。ひとつでも綺麗な日本語で……」

思わず舞も日本語で返事をしてしまい、ハッと口元を押さえる。  
ミシユアル国王は少し頭を抱える素振りをし、ダーウードは舞を睨みつけていた。

（ま、まよい……王室外交でアラビア語以外を喋つちやつた）

どうやって取り繕つたらいいのか必死で考えるが、舞の頭の中は真っ白だ。両国のスタッフもこいついう王妃プリンセスの扱いには慣れてないらしく、みんな黙り込んでいる。

そこをフォローしてくれたのはレイ国王だった。

「それは良かった。妻のために日本語で返事をしてくれて、私からも礼を言います」

今度は流れるような日本語である。このレイ国王は一体何ヶ国語が話せるのだろう。

舞がボーッと見つめていると、ミシユアル国王がつかつかと歩み寄り、

「確かに、あなた方の日本語はとても美しい。アーリシャ、アズウオルド滞在中は日本語の発言を許可する」

レイ国王に向ける妻の熱い視線を遮るように立ち、そう宣言した。

「あ……りがと/ori ga to やれこまゆ」

結局、日本語でも同じ言葉しか口に出来ない舞であった。

～\*～\*～\*～\*～

首都トレーディングがあるアズウォルド本島は、日本の岩手県と同じくらいの面積があります。

大使館のパンフレットに書いてあった文章を頭の中で思い浮かべる。

空港は海上にあり、王室専用船で本島まで渡るのだといつ。船の付けられた桟橋まで歩いて行くと、乗船口の横に英語と日本語で注意書きがあった。

?許可された時間帯以外の飛び込みを禁止します。特に船舶の着岸時にはスクリューに巻き込まれる危険があります。係員の制止に従わなかつた者は、逮捕されますので、注意下さい?

「あの、クリスティーナ様……」この看板は何ですか?」

こんな所で飛び込む人間などいるはずがない。にも関わらず?許可された時間帯以外?ということは、そういう時間帯がある、ということになる。

舞の質問にクリスティーナは陶器のように纖細な肌を薄つすらと赤らめた。

キラキラ光る金髪ブロンドが肩から背中に波打つていて。緑の強いヘーゼルの瞳はまさに人形のようだ。身長は舞より少し低いくらいだが、腰回りが細く、実に女性的な体型をしている。

「ええ、その実は陛下が……飛び込まれたの。それでね、真似をす

る方が出でてしまつて……」

「は？ レイ国王陛下が……飛び込まれた？」

それは舞にとつて、聞いてビックリの新情報だった。

一年前、誤つてフェリーの甲板から落ちたクリスティーナを助けようと、なんとレイ国王自ら海に飛び込んだのだといつ。見かけと違つて、いざとなつたらかなり無茶をするプリンスだ。しかも、彼女を救つてそのまま海中でプロポーズ！ 衆人環視の中、ラブシーンまで演じたというから驚きだ。

（いいなあ……なんてロマンティック！）

と、思つたのは舞だけではなかつた。

しばらくして、若いカップルが国王夫妻の真似をする、というケースが相次いだ。それもなぜか、桟橋から男性が海に飛び込みプロポーズ。OKだつたら女性も後を追つて飛び込み、キスするというもの。危険だからと制止しても、それを振り切つて飛び込むのが愛情の深さ、なんていう噂も出て、外国人観光客にまでブームが広がつたという。

「元はと言えば私たちに責任のあることですし。でも、怪我人が出てしまつて……」

飛び込んだ男性がカナヅチで溺れかけたというから洒落にならない。

「命には別状なかつたのだけど、被害者が出でからでは遅い、と陛下が違反者の逮捕を命じられたのです。その代わり……」

レイ国王は国民の前で迂闊な行動を謝罪し、今後は厳しい対応を取ると宣言した。

テレビの特集で見た覚えがないのは、そのせいかも知れない。

但し、丸つきり禁止にするのではなく、毎月一回エントリーを受け付けた上で？プロポーズタイム？を設けたのだ。そこでめでたく婚約が成立すると、国籍問わず国内の好きなビーチでハネムーンを過ごせる宿泊券がプレゼント！ といふのだから、なんて太っ腹な国王だろ？

「国力に比べて国民数が少ないから、結婚・出産を奨励するいきつかけになりました」

そう言つてクリスティーナはミシユアル国王と話す夫の横顔をチラリと見た。ヘーゼルの瞳が少し翳り、舞は少しだけ違和感を覚えたのだった。

(3) 恋の病にかかつたら／R（前書き）

性描写があります、R15でお願いします。

### (3) 恋の病にかかつたら／R

「三回、十秒以上続けてレイを見ていたな」

王宮正殿の最上階にある国賓室に通され、一人きりになつた途端、ミシューアル国王がぶちぶちと言い始めた。

「だつて……ほら、海のように深い青色の瞳なんて珍しかつたんだもの」

舞は必死で考えながら答える。レイ陛下つて優そうで大人の男性つて感じよねえ、なんて言おうものなら……考えたくない。

「ねえねえ、コレつて地下水なんだって！　凄いよねえ、部屋の中で噴水なんて。しかも、ここ四階だよ」

舞は話を変えるべく、部屋の中央にある噴水に近寄つた。地下水をポンプで汲み上げ、循環させて建物全体を冷却させてい るらしい。階下には廊下の中央に小川が流れているとか……。他の場所は駄目だが、この噴水の水は飲んでも構わない、案内してくれた王宮の女官長が二コ二コしながら説明してくれた。

そつと手を水の中に差し入れる。地下水というだけ結構冷たい。舞は両手で掬い、口につけた。

「美味しい！　なんとかのおいしい水みたい！」

ミシューアル国王もこれ以上文句を言つても無駄と思つたのか、

「ほう、だつたら私も飲ませて貰おうか」

そんなことを言いつつ舞の手に口を付けてきた。そんなにたくさん掬える訳はないので、ほとんど残つてはいない。水滴を舌先で舐め取ると「少しそうっぽいな」などと呟く。

「あ、当たり前でしょ。そんなの自分で……」

いつの間に着替えたのか、スース姿からいつもの白いトーブとグ

トラ姿に変わっていた。舞はヒジャブは取ったもののアバヤは身につけたままだ。彼はこれから公務で外に出る。でも舞はお留守番であつた。

さつさとアバヤも脱いでしまおう、舞がそう思つた時だった。

グッと腰を掴まれ覆い被さるようにキスされる。それはかなり激しく情熱的なキスだつた。舞がレイ国王に見惚れていたことを、まだ怒つてゐるらしい。嫉妬全開で舞に息をする暇も与えない。しかも……どうやらキスだけで済みそうな気配ではなかつた。

「ね、アル……今から公務でしょ？ 時間ないんじやない？」

「二十分ある」

「外は……明るいし……あ、ん」

唇が離れた瞬間、ミシユアル国王は舞の手を噴水近くの円形テーブルにつかせた。彼は背後に立つと舞のアバヤをたくし上げ、太腿の内側をなぞる。舞が声を上げたのはこの時だ。

「舞、ショートパンツは穿くなと言つたであらう」

少しムツとした声でミシユアル国王は言つ。ズボンの類を嫌がる彼のため、舞はスカートを穿くことが多くなつた。でも、到着後はすぐに独りになるだらうからと思い、アバヤを身につける時に着替えたのだ。まさか、二十分空いただけでこんなことを始めるとは思はない。

ボタンとファスナーを外され、ストンと足元に麻のショートパンツが落ちた。

「さやつー。」

直後にミシユアル国王の指が下着の中に潜り込む。

せめてベッドに行こうよ！ 人が来たらどうするの？ そんな言葉が頭に浮かぶが……。柔らかく湿った部分に大きな「ゴシゴシ」した指が往復するたび、舞の意識が飛びそうになる。

噴水の水音が室内に響き、舞の小さな悲鳴はそれにかき消された。

その瞬間、ずらされた下着の隙間からショートパンツの上にパタパタと甘い水滴がこぼれ落ちる。

立つたままイカされて、舞はグッタリとテーブルにもたれ掛かっていた。

（もうだめ……やだ、アルのばかぁ）

「舞、あと十五分を切った。私もイカせて貰うぞ」

背中にぐつと重みが掛かり、持ち上げられたアバヤヒートープの裾が一人の間でくしゃくしゃになる。

あと何分だろう。舞がそう思った直後、ミシユアル国王の動きが止まつた。

／＊＼＊／＊＼＊＼

（十三分……その気になれば早く出来るものだな）

舞を寝室のベッドまで運び、着衣を整えただけで護衛官と側近が迎えに来た。そのため、舞には声を掛ける時間もなかつた。

（夫の前で嬉しそうに他の男を見るからだ！）

急き立てて体を開かせ、とりあえず彼自身は満足したもの……。立つたまま背後から、など初めてのことだった。舞は声もなくグツタリしていた。たつた一度の強引な行為で舞が夫婦の営みを拒絶するようにでもなれば、彼にすれば大打撃だ。

（やつぱり抑えるべきだったか……いや、しかし……）

ミシユアルの隣でコホンと小さな咳払いが聞こえた。

彼はハツとして顔を上げる。すると、特別会議場に集められた？ アズウォルド海底油田事業？ に関する約三十名の人間が、ジツと彼を見つめていた。その中には、この国に大使館を置く石油輸出国機構の加盟国大使もいる。

アズウォルドはオペックの加盟候補国だ。アズウォルド側はそれを望んでいたが、加盟国の中には新規の加盟を認めたがらない国も少なくない。彼らは皆、アズウォルドに脅威を抱き、主導権を握られるのを恐れていた。

そしてクアルンは、石油の埋蔵量・採掘量ともに世界一であった。当然、オペックの加盟国においてリーダー的地位にある。

レイが旧知の仲であるミシユアルを自国に招いた理由の一つはそれだ。

トレードワインドのビジネスタウンにある国際コンベンションセンター。彼らは今、そことの会議場にいた。

（しまつた……私としたことが）

彼は横柄な態度を崩さぬまま、レイと同じように咳払いをする。

そして、もう一度説明を求めたのだった。

『珍しいことだ。シーク・ミシュアルが女性に呆けるとは』  
『コンベンションセンター内の特別室に入り、国王同士の語らい』  
『いつことで入払いがされた。』  
すると、途端にレイが笑いながら年下の旧友を揶揄する。

『失礼な言い草だな。私は呆けてなどおらん!』

レイは含み笑いをしながら、『コーヒー』ポットからカップに黒い液体を注ぎ込む。

『どうやらこの国のコーヒーはセルフサービスらしい。国王に至るまで自分で注ぐというのだから、徹底していると言つべきか。』

『給仕くらいつけてはどうだ? とても国王の仕事とは思えんな』  
『余計なことは思いつつ、ついつい口に出てしまつ。』

一方、レイは変わらない笑顔で、不遜な友人の前に『コーヒー』カップを置いた。

『大した仕事ではないさ。妻と一緒に料理をすることもある。君には考えられないだろうが、この国では普通のことだ』

その言葉に、ミシュアルは金色の髪をした美しい王妃の姿を思い出した。

確かに、華やかで人目を惹く女性には違いない。だが残念なことに、ミシュアルの記憶の中には十年前の記事が残っていた。それも、彼女の夫以外が目にするべきでない写真と共に……。

## (4) 失われた眞実

アズウォルド王妃クリスティーナは、十六歳の時、独りの男に拉致監禁されたのである。

レイプはされなかつたものの、全裸の写真を撮られ……最悪なことにそれがインターネットで世界中に広まつてしまつた。当然だが彼女に罪はない。だがクアルンの基準で言えば、彼女の純潔は疑われ花嫁となる資格はない、と判断されるだらう。

その女性をわざわざ妃にしたレイの心理は、ミシュアルには理解し難いものであつた。

『我が国ではありえぬことだな。王も王妃も厨房には立たん

舞は何やらじりじりしゃしゃしているようだが、気付かぬ振りをするのが精一杯だ。年寄りに見つかると『王妃たるもの』と言い出すに決まつていた。

「それはともかく、シーク・ミシュアル。ムスリムの戒律でティナを良く思つていなければ知つてゐるが、彼女は我が国の王妃だ。相応の敬意を払つてくれ。エアポートの時のように、無視することは私が認めない」

不意に英語に戻すと、彼は厳しい口調でミシュアルに警告を発した。

空港ではクリスティーナから英語で挨拶を受けた。だが、彼女をよく思つていらないミシュアルは、そのまま言葉を返さなかつた。通訳がオロオロしていたことも知つてゐる。舞は気付かなかつたようだが、他のクアルン側の人間は当然のこととして受け止めていたよ

うだ。

『婚約者を裏切る行為は君らしくない。それに……見たものを見なかつたことに対するのは、非常に難しい』

それは十年前の件を仄めかした返事だった。

ミシユアルとて王の立場で譲るべきことは心得ている。だが、最初から容認するのは彼のムスリムとしての感情が許さなかつた。

言つたはづだ。婚約は最初から形式だけだつた、と。日本との問題は円満に解決している。他国の君主が口を挟む問題ではない。そ

『努力しろ。君なら出来るよ』

口元は微笑みを浮かべているが、アズル・ブルーの瞳が彼を睨んでいた。

今回のアズウォルド滞在はレイから声を掛けられたものだ。しかし、こちらにとつても渡りに船であつたことは事実である。最悪の場合、今後、様々な頼みごとをしなければならない身となることも

ミシユアルは薄いアメリカンコーヒーに顔を顰めつつ、『ナアム』  
わかったと答えた。

「えっと……」この度はお招きいただき、光栄に存じ上げます」

王宮内では堅苦しくなるから、と王宮の後方にあるセラドン宮殿に舞は招かれていた。

招いてくれたのはクリスティーナ王妃。そこは小高い山の中腹辺りに位置していた。名前を聞いた時、「怪獣の名前?」と思つた舞だが……。よくよく聞くと、建物全体が灰色を帯びた青色、上品な青磁色<sup>セラドン</sup>に見えることから宮殿の名前になつたそつだ。青磁と言われた途端、もの凄く高価な建物に見える、と素直な感想を抱く舞だった。

「お疲れのところ、と思いましたが、到着早々おひとりは寂しいのではないかと思つて……」

明るい陽射しに満たされたリビングに通され、舞はソファに腰掛けた。

すると、入ってきたメイドがガラステーブルにコースターを敷き、その上に大きなグラスを乗せた。グラスにはたくさんの氷と薄茶色の液体が入っている。「ムギチャでござります」と言われ、舞は感激する。

「恐れ入ります。お心遣い、たいへんありがとうございました……もううす? 感謝たてまつり……アレ?」

（駄目だ……日本語も危ういなんて、わたしつてば本氣で馬鹿なんじゃないの?）

プリンセスと名のつく女性と親しく語らうなんて、普通ではありえない事態だ。しかも、日本人特有のコンプレックスがあるのが、金髪<sup>ブロンド</sup>にはなぜか萎縮してしまう。舞はクアルン王宮以上の緊張を感じていた。

そもそも目上といえば、親戚の叔父さん叔母さんであつたり、先

生と呼ばれる人たちであつたり、精々その程度だろう。舞が本気で落ち込み始めた時、クリスティーナが口を開いた。

「そんなに堅くならないで。普通にお話しましょう? それとも、イスラムの教義で駄目なのかしら?」

「あ、いえ、そんなことは。あの……普通でも失礼じゃないですか?」

舞が恐る恐る尋ねると、

「気にしないで、私も結婚するまではただの図書館司書だったのよ」

クリスティーナはにっこりと微笑む。

「クリスティーナ様にそう言って頂けると助かります」

「ティナと呼んで下さい。私もマイって呼ぶわ。構わない? シーク・ミシユアルのお許しを頂かないと駄目なのかしら?」

クアルン国内ではないし、二人とも王妃なのだから敬称なしでも文句は言われないだろう。

舞はそう答えたが、ティナは少し悲しそうな目をした。

「でも、ミシユアル陛下は私をお認めじゃないようだから……」

舞がティナの事件を聞いたのはこの時が初めてだつた。

事件が起つた時、舞は十歳くらいだ。しかも海外の事件、表向きはティナの父親が握りつぶした事件なので、舞の耳に入るはずがない。

「そんなの! ティナのせいじゃないでしょ? アルが認める認めないつものじゃ」

しかし、あの純潔至上主義の頑固者である。

イスラムの教義とクアルンの法律から言えば、犯人は確實に首を

刎ねられるだりつ。同時に、女性の名譽も地に落ちる。

クアルンの法律では同意の下でなくとも、処女を奪われたらその相手と結婚することになるのだ。

男が父親を説き伏せ、夜這いを掛けたら……女性側がどれだけ抵抗しても妻にならざるを得ない。悔しくてもそれが現実であった。純潔を失えば花嫁衣裳を着る資格もなくなる。まともな独身男性には求婚してもらえず、寡婦のよつた扱いで、人知れず父親の決めた相手の家に送り届けられるといつ。

こればかりは女性側といつより、男性側の意識を変えなければどうにもならない。

意中の女性であつても、親の田を盗んで男性と付き合つていたことが明らかになつた場合、多くの男性は求婚を取り消すのだという。体の関係はない、と言つても同じらしい。疑わしい行動を取つただけ? ふしだら? 呼ばわりだ。

それでも愛を貫いたラシード王子のよつた男性は? クアルンの奇跡?とも言えよう。

ミシユアル国王の場合、舞なら赦す、と口にしたが、……こだわりを捨てたと宣言した訳じゃない。

もちろん初めて愛した男性の妻となり、しかも舞の純潔を狂喜乱舞するほど喜んでくれた。舞にしても「アルに捧げて良かつた」と思わない訳がない。

その反面、「そこまで氣にする?」といつ氣持ちもあつた。複雑な乙女心である。

「レイ陛下は……その、何て?」

「何も。ネット上の画像を全て回収するなんて不可能だから……。

ただ、世界中のマスコミが一度と取り上げないようになってしまった。でも、何もなかつたと言つても、証拠がある訳じゃないでしょう？ 私だけならいいんだけど……陛下のことが笑われるのが一番辛いんです

ティナは正面の席から舞の横に座り直した。そして、舞の両手をしっかりと握り……。

「あ……あの？」

「あなたにこの話をしたのは、どうかミシユアル陛下に私の気持ちを伝えて頂きたくて。我が国はオペックの加入を希望しています。もし、その話し合いで私の存在が邪魔になるというなら、一度とミシユアル陛下の前には出ません。ですから、どうか……」

ヘーゼルの瞳が涙で揺らめき、それを見た瞬間、舞の胸も熱くなつた。

## (5) トラブルの達人

安請け合いするつもりはなかつた。

舞にしても、あのミシユアル国王の考えを変えさせるなんて、簡単には出来ないと判つてゐる。でも、ティナは相当悩んでゐるようになつた。彼女の思い詰めた表情を見つめると、一応話してみます、と舞は答えたのだった。

それにじつくり考えてみれば、ソレとコレは別のような気がする。

（自分の花嫁を選ぶわけじゃないんだもん……さすがのアルも一緒にしないんじゃないかなあ）

舞が明るく言つと、「でも、ニアポートではお声も掛けて頂けなかつたから」ティナは俯き、悲しそうに微笑む。

心の中で持ち上げたミシユアル国王の評価が、あつと/or間に底まで落ちた。

（ホント、唐変木でわからずやなんだからつー）

思えばさつきの行為も身勝手すぎるー

レイ国王に視線を向けたといつだけで、ヤキモチを妬いていきなり襲い掛かつてくるなんて……。そりやちよつとはドキドキしたけれど、でも到着早々あんな真似をする必要などなかつたと思つ。どうせなら夜になつてからゆつくりと……いや、そういう問題ではなぐ。

彼にとつては正しいことをしているつもりなのかも知れない。でも、その言動によつて傷つく人間もいるのだ。宗教が違うから、国王だから、で許されるのは何かがおかしい。

舞が正義感に燃え始めた時、？ムギチヤ？を出してくれた女性とは別のメイドがやつて來た。見た目は日本人のようで、舞より若く思える。彼女は緊張した面持ちでトレイを抱え、温かいカフェオレをテーブルに置いた。

「マイの好きな飲み物だと聞きました。間違つてなかつたかしら？」

「あ、はい！ 実は甘い物大好きなんです」

「私も好きよ。チョコレートも大好き。でも太りやすい体質だから、注意しないと……マイはどう？」

決して太つているとは思えないティナだが、一の腕辺りを気にしながら笑う。

「わたしの場合、元々が細くはないので……」

肉付きというより、舞は骨格がしつかりしていた。無論、付くべき所にはしつかり付いているが、ちょっとしたことで太るという体质ではない。全体的にフワフワしていて女性らしい印象のティナのほうが、脂肪が付きやすいのかも知れない。

二人はトレードウインド市の美味しいケーキ屋さんや、色んな島で取れるフルーツの話に花が咲き、舞は久しぶりにたくさん話した気がした。

シャムスとも日本語で話せるが、うつかりムスリムとは違う考え方を口にしようものなら……最近では遠慮なしに説教されてしまう。義理の姉妹とはいえ、ライラには決して気を許すことは出来ず。日本では桃子と会えたが、会話には聞き耳を立てられ複雑な心境だった。それに政府や国の対応に裏表が見える分、故郷とはいえ寛げる滞在ではなかつたのだ。

ティナとは身分の差もなく、彼女も結婚前はアメリカの一市民だつたという。それに、アズワルドに漂う空気はとても自由で、女官や護衛官、一般国民たちからも悪意や敵意が感じられなかつた。

セラドン宮殿を後にすると、舞は思っていたことを尋ねてみる。

はじめに通された王宮の国賓室もこのセラドン宮殿でも、舞が見かけるのは女性ばかりだ。王宮敷地内を車で移動する際の運転手も、

玄関前に立つ警官も全て女性。

「これって、わたしの為ですかね？　お気遣い頂いて……本当に嬉しいです」

舞はティナに感謝を伝えた。

すると、ティナはクスッと笑い、「手配したのはこりびりんですけど

……

アラビア風の歓待は遠慮する。正妃の過ごしやすい環境を整えてやつて欲しい。その代わり、我が国の侍従や女官はほととぎ司行しない。そちらの国風に従う。

ミシユアル国王がレイ国王に直接話を通したのだといづ。

帰つたら文句を言つてやるうつと思つていた舞だが、ちょっと拗ねるだけにしておこう、と思い直す。ベッドの上で、「ティナのこと無視するなら、アルとは一緒に寝ない！」とか言えば彼はどうするだろうか。行きとは逆に、かなり浮かれた様子で王宮正殿に戻る舞であった。

～\*～\*～\*～\*～

「王妃様と良い時間をお過ごしなられたようで、私も安心致しました」

王宮の女官長を務め、国賓のお世話係として最高責任者になるの

がこのスザンナ・アライであった。舞の母と同じ年代であろうが、ふくよかな体型で南国を思わせる肌と髪の色をしていた。

「本日のご夕食は、こちらでミシューアル陛下とお一人で取られると聞いております。明日の晩餐会は、妃殿下はご欠席と伺っておりますが……」

スザンナは申し訳なさそうに言つ。

でもそれは彼女のせいでも、アズウォルドのせいでもなかつた。ミシューアル国王が言つたように、現状では舞がドレスアップして晩餐会に出席するなどありえないのだ。

舞が王子を産み、王族全体から正妃として認められない限り……。

（だつたら産んでやるうじやないの！ 一人一人なんてケチなこと言わずに。五人くらいドーンと！ もういって言つくらい、王宮をアルのミーチュアで一杯にしてやるんだからつ）

男の子がいいと言つなら、たくさん王子を儲けた上で、子供は性別に関わらず国の宝だ、と宣言してやるう。舞はそう考へていた。方向性はともかく、前向きなのが彼女の長所である。

その時、夕食用のテーブルをセッティングしていたメイドが噴水近くにいた舞に歩み寄り、声を掛けた。その顔は見覚えがある。セラドン宮殿でカフェオレを運んできてくれた若い女性だつた。

「アーリシャ様！ 私の父は日本人で、私も中学まで日本の学校……聖麗女学院に通つておりました。ご存じないと思われますが、アーリシャ様の一年後輩でミナホ・カリノと申します」

「本当に？ 全然覚えてないわ。ごめんなさいね」

「いえ、とんでもございません。ただ、妃殿下に直接お祝いを申し

上げたくて……」結婚おめでとうございます

純真そうな十代の少女が胸の前で両手を組み、ウルウルした眼差しで舞を見上げている。何となく「せばゆい」感じで舞が照れていると、

「それと今朝のニュースで知りました。ラシード王子殿下のお妃様がご懐妊とか……おめでとうございます！」

「え……つと、あの」

「次はアーリシャ様ですね。アーリシャ様は日本の誇りです。ぜひ頑張つて下さい。おめでたいご報告を心待ちしております！」

ラシード王子の妃とはライラのことだらつ。

砂漠の結婚式から一ヶ月以上が経っている。もし初夜で授かれれば、妊娠が判明しても遅くはない時期だった。舞の場合、終わつたばかりで可能性は皆無だ。ハネムーン中だし、焦る気持ちは全くなかつたが……。

でも、まさかこんなに早く、ライラが妊娠するなんて思つてもみなかつた。

「ミス・カリノ！ あなたは仕事もせず何といつことを……。すぐ下がりなさい！」

呆然と立ち尽くす舞の耳にスザンナの叱責が聞こえた。それはこの国独特的の英語で、舞にも何となく判る内容だ。アメリカやイギリスの英語に比べ、日本人の耳でも聞き分け易い英語の発音であった。

「あ、スザンナ、そんなに怒らないで。わたしは別に」

舞は日本語で声を掛ける。

するとスザンナもパッと日本語に切り替え、

「いえ。王宮でご懐妊を話題にするなど……新人に徹底できなか

つた私の失態です。本当に申し訳ございません  
体を二つに折るほど深く頭を下げるのだ。  
ライラの件はビックリだが、このスザンナの反応にも驚く舞であ  
つた。

## (6) プリンセスの愁い

「え？ レイ陛下とティナって上手くいってないの？」

ミシユアル国王が戻り、用意されたティナーを終えるなり舞は尋ねた。その答えが予想外のものだつたため、舞は思わず声を上げてしまう。

聞きたいことはたくさんあった。

しかし、とりあえずライラの妊娠と女官長スザンナの反応だろう。彼は満足気なアラビアコーヒーを啜りつつ舞の質問に答えてくれた。「ライラの件は黙つていて悪かった。だが、本来こんなに早い時期に発表などありえないのだ。お前に伝えるのはハネムーンが終わってからで充分だと思っていた」

その件はいい。ちょっと負けたような気はしたけれど、基本的にはおめでたいことだ。妊娠初期は流産の確率も高く、安定期に入つてから発表する、というのは芸能人でもよく聞く話だと思う。それがなんでこんなに早く発表になつたのか……。舞も不思議だが特に彼女が悩むほどのことでもなかつた。

気になつたのは、

「女官長の反応は当然だろうな。国王夫婦は結婚丸二年を過ぎた。特に予防策を取らない場合、一年以内に八割、二年以内に九割の夫婦が妊娠する。彼らは残りの一割ということだ」

ミシユアル国王は何の感情も見せず淡々と語つた。

アズル王室は「じく最近、庶子と女性に王位継承権が認められた。それで一気に王族が増えたが、基本的には女系だといつ。王子の子供は王子・<sup>プリンス</sup>王女・<sup>プリンセス</sup>となり次世代まで王族の身分が確定している。だが

王女の子供は、男子は？ サー？ 女子は？ レティ？ の名前を貰い、以降は王族の身分から外れるのだ。

そして問題は、今のアズル王室にいる三人の王子は全員が庶子、ということだった。アサギ島で静養中の前国王は継承権がないので除くとして……。ひとりは七十歳と高齢のリューク王子、ひとりはレイ国王の一つ年下で異母弟のソーヤ王子、最後のひとりもレイ国王の異母弟で十三歳のアーロン王子である。

このアーロン王子が、今のアズル王室の後継者問題を複雑にしていた。

現在、王位継承権一位はソーヤ王子、二位がアーロン王子だ。しかし、皇太子の地位は空席のままであった。それにはもちろん理由がある。

何とアーロン王子の実母が息子の親権を求めて、レイ国王相手にアメリカで裁判を起こしているのだ。しかも、その実母がリューク王子の娘というのだから……王室にとつたら一大スキヤンダルだろう。

とはいって、新婚の国王夫妻に子供が生まれたら、王子も王女も関係ない、文句なく継承権一位になる。そうなれば後継者問題は自動的に決着する、と国民の誰もが思っていた。

「それがずっと持ち越されてるんだ……だから、スザンナもピリピリしてたのね」

舞は得心がいったように頷いた。

「レイは気にするような男ではない。だが、周囲はそう思わないだろ？ 特に妃の過去に問題があるとなれば……」

口にした瞬間、ミシユアル国王は眉を顰めた。明らかに『しまった』という表情だ。

「ティナの過去に何も問題なんてないでしょ？ ここはクアルンじゃないし、アルの王妃にするわけでもないんだから。外交問題に

発展したらどうするのよ！ 冷静に対応してよねっ」

ミシユアル国王は降参のポーズを取りながら、舞を手招きする。片膝を立てソファにどっかと座り、自分の脚の間に舞を座らせた。「それはお前の言つ通りだ。レイにも注意された。私も自分の立場は心得ている。クリスティーナには礼儀正しく接することを約束する」

全面的に同意され、舞にしたら肩すかしだ。

（なんか不気味なんだけど……何か企んでないよね？）

「これは私の意見ではないことを承知で聞いてくれ。アズウォルドやアメリカのマスコミを中心に、こんな噂が出ているのは確かだ。

王妃の不妊は、過去の性体験や墮胎が理由ではないか、と「舞は瞬時に頭に血が昇つた。

「何それっ！ 本気で言つてるの？」

「私ではない。断じて私の意見ではない！ そう言つた二コアンスの記事を見たと言つただけだ」

「じゃあ、レイは？ そんなヨタ話を信じて夫婦仲が上手くいってないの！？」

思わず、他国の国王を呼び捨てにしてしまった。ミシユアル国王のことは言えない。女官や警備兵の耳に入つたら大問題だ。クアルン王妃としての良識は『他国のことには踏み込んではいけない』と警告を発していた。だが、ティナの姿を思い出すと舞の怒りは納まらない。

アズウォルドがオペックに正式加盟できるように、とティナは泣くように頼んできた。自分の存在がミシユアル国王の機嫌を損ねるようなら、彼の前には出ないとまで言つたのだ。あんなに美人なのに偉そうでもなく、本当のお姉さんになつて欲しいくらいである。今日一日で舞は完璧にティナの味方だつた。

「落ち着け。レイは妃を大切に扱っている。だが、王族にとつて後継者の問題は避けては通れない道なのだ。レイはすぐ下のソーヤに王位を譲つてもいいと思っているようだが、国民感情と言つものもある」

ソーヤ王子の母親は日本人で、なんとアズウォルド国民からメチヤクチャ嫌われているのだという。それを判つていてソーヤ王子もいまだに独身。彼はレイ国王の結婚当初、国王夫妻に後継者が出来るまで結婚しない、と宣言したとか。ソーヤ王子に悪気はなく、まさか一年経つても授からないとは思わなかつたのだろうとミシユアル国王は説明してくれた。

そして、不妊を一番気にしているのはティナで、ちょっととしたことでも過敏に反応するのだという。レイ国王をはじめ王宮の皆がティナに気遣い、結果、夫婦の間がギクシャクしてしまい……。

（うーーーん）

誰が悪いとも言えず、舞は胸の中で唸つた。

一人とも真面目そうで良いパパとママになりそうなのに……どうして神様つて公平じゃないんだろう。成り行きで結婚したラシード王子たちには結婚一ヶ月で子供が授かるし。ラシード王子はまだ二十一歳の大学生だ。ライラを愛する根性だけは認めるが、どんな父親になるのか想像も出来ない。

「舞、クリスティーナを気遣うのはいいが、必要以上に考えぬことだ。私たちにもすぐに授かる。今宵も精一杯努力しようではないか」舞の沈黙をどう捉えたのか、彼はもうスイッチが入つてしまつたらしい。

背後からゆづくりと抱き締め、舞の首筋に唇を這わせる。

「アラビアコーヒーの匂いがする……」

「いい加減好きになつてはくれぬか。それとも、この状態で私に歯を磨いて来いと呟つのか？」

（それはちょっと可哀想かも……）

何と言つても、舞のお尻の下でジャンビーアがウズウズしているのが判る。

「昼間みたいなのはイヤ。ゆつくりキスも出来なかつたし、終わつた後すぐに一人にされるのつて悲しい。なんだか……愛人になつた気がした」

舞は気を取り直して、少し拗ねたよつた甘えた声を出した。

「私はお前に痛い思いをさせたか？」

「痛くはなかつたけど、ちょっと怖かった」

「……済まぬ」

ミシュアル国王は謝罪と共に、舞をギュッと抱き締めた。

（こんなに素直になられたひ……もつ怒れないじゃない）

舞は後ろを振り返り、彼の唇にキスした。

アラビアコーヒーの強い香りがしたけど、それほど嫌じゃない。

「ねえアル、国賓室のベッドで、もの凄く広くて気持ちいいのよ。試してみたくない？」

舞は出来る限り色っぽく笑つて見せた。それが魅惑的な微笑みか

どうかはともかく、ミシュアル国王には効果テキメンだつたらしい。

「もちろんだ！ 早速試そう！」 そう言つと舞を抱きかかえ、ベッドルームに直行したのだった。

(7) 恋は蜜の果～R（前書き）

性描写があります、R15でお願いします。

## (7) 恋は蜜の味／R

わざか一十分の早業とは違い、最上級のスプリング・マットレスを一時間たつふりと堪能して、舞は全裸のまま横たわっていた。肌に触れるシーツもサラサラで心地好い。寝返りを打つと少しだけひんやりしていて汗が出ないのだ。

「舞、それほど氣に入つたなら、ダリヤの王間にても同じベッドと寝具一式を揃えよう」

ミシュアル国王は腰に白い布を巻いただけの姿で、冷蔵庫からミネラルウォーターを一本取り出した。一本を開けて飲みながら、もう一本を舞に渡してくれる。

本来、これは傍に控えた女官か妃の仕事だという。国王自ら飲み物を取りに行き、しかも妃に給仕するなどありえない事態だ。はじめは文句を口にしていたミシュアル国王だが、「もうダメ……動けない」舞がそう言つて甘えると、いそいそと飲み物を取つてくられるようになつた。

とはいって、

「これでは、私もレイと変わらんな  
などとブツブツ言つてゐる。

舞は上掛けで前を隠しながら、ゆっくりと体を起こしミネラルウォーターを受け取つた。瓶は開封してあり、?クアルン王国検査済?とアラビア語で印刷されたシールがベタリと貼つてある。それを剥がしながら、

「え? そんなこと出来るの? すつじく高じんじや……」  
そこまで言い掛けて、舞はハツとした。

案の定、ミシユアル国王はこめかみを引き巻らせながら瓶をサイドテーブルに置き、舞の前に座り込んだ。

「それはどういう意味だ？ 確かに今のアズウォルド王国は豊かだが、国力は我がクアルンにはまだまだ及ばぬ！ 私はこれを凌ぐべツドを宮殿に入れてみせるぞ！」

（そ、そんなベツド一つで張り合わなくとも……）

拳を握り締め宣言するミシユアル国王を、舞は呆気に取られて見つめていた。

すると、彼女が飲もうとしたミネラルウォーターの瓶を、ミシユアル国王はいきなり取り上げたのだ。

「ちよ……アルってば。判ってるよ。アルのほうが凄いって。ただ……わたしの為に無駄遣いしなくてもいいのにって思つただけで」「妻の願いを叶えるのは、夫の義務であり喜びだ」

「じゃあ、喉が渴いたから水が飲みたいって願いを邪魔しないで」舞が少し口を尖らしてそう言つと、ミシユアル国王はニヤリと笑つた。

（な、なに？ わたし、なんか変なこと言つた？）

「よからう。お前の願いを叶えてやる！」

言つなり、ミシユアル国王は舞から取り上げたミネラルウォーターを口に含んだ。そのまま舞を抱き寄せ、口移しで飲ませようとする。

口づけられた拍子に舞は上掛けから手を離してしまった。冷たいはずの水は少し生温くなつていて、喉越しは微妙かも知れない。だが、端からこぼれ落ちた液体が顎を伝い、舞の露わになつた胸に滴る。

り落ち……。

「おっと。せつかく飲ましてやっているのだぞ。いりますない」  
舌先でチロチロと啄ばむように、胸の先端を舐め始めた。

「やん！ アル、もう……今、終わつたばかりでしょ。ちょっと休ませて。第一、アルだつて」

そう簡単に回復してないはず と思ったのは甘かつた。  
彼のジャンビーアは腰布を払い落とし、シヤツヤと光りながらいつでも出陣可能な状態になつている。

「ん？ 私がなんだ？」

（もう、アルつてば、絶倫なんだからっ！）

舞が身が持たないと叫びそうになつた時、彼の指が上掛けに隠れた彼女の下半身に滑り込んだ。

「ヒヤン！ や……アル、まだダメえ」

そこは先ほどの快感からまだ熱が完全に引いていない。充分に潤い、わずかな刺激で簡単に波を呼び込んでしまうのだ。

「駄目ではなかろう？ 柔らかく解れていて、私の指が一本も楽に吸い込まれる。内部も深く広がり、指ではないものを待つかのようだ」

そんなことを言いながら、指を入れてクルクル回し始めた。

ミシユアル国王は結婚前、王宮内の後宮に忍び込んで来た時

『新婚の三ヶ月、昼も夜も私はお前を離さない』

なんてことを口にした。舞は彼の情熱に胸が高鳴つたが……まさかあの時、これが本気だとは思つてもみなかつた。

舞が女性の都合でダメな時以外は、それこそ昼も夜も、場合によつては朝もある。

それが一ヶ月も続くと……。経験ゼロの舞も、自信満々の割に経験片手のミシユアル国王も、夫婦の行為に精神的余裕が出来始める。

「アル……やあん、アル、もうダメ」

舞の聲音に艶めいた色がつき始める。それを機敏の察したのだろう。彼は指の動きをピタリと止め、

「それほどまでに嫌なら、ここで止めにしよ!」

止める気なんか全くないくせに、舞を苛めるのだ。

以前の舞なら、「いいわよ。もう一度としない」となり、意地を張つて突つぱねただろう。だが、ソコはソレ、新婚とはいえ夫婦である。ミシュアル国王が舞のツボを心得ているなら、彼女も夫の弱点は知つていた。

『陛下　お願いでござります。びつや、わたくしに一夜のお情を

……』

ミシュアル国王の胸に縋りつき、少しだけ上田遣いでわざやく。アラビア語の?おねだり?は効果できめんで、琥珀色の瞳が一瞬で煌いた。

『よからぬ。さあ、脚を開き私を受け入れよ

『ああ……恥ずかしゅうござります』

なんて言いつつ、王のハーレムに入れられた異国の姫君になりきつてみる。

『どうだ?　一度と私から離れぬと誓つなら、最高の悦びを』  
やるやく

『……はい……誓います。陛下のお傍かひ離れま……あつ』

ふいにミシュアル国王の動きが速まり……。

「ハーレム! こまお終いだ!　舞、私を愛していると言ふ!」

「……愛してる……大好きよ、アル」

「私もだ。お前を愛している。お前だけだ」

二人はこの時？最高の悦び？を同時に迎えたのだった。

～\*～\*～\*～\*～

早々に電気の消えた国賓室を王宮二階の窓から見上げつつ、国王レイ・ジョセフ・ウイリアム・アズルは大きなため息を吐いた。

（祈りの間は用意したが……あの様子ならサラートは絨毯一枚で充分だな）

専用の絨毯で時間がくれば祈りを捧げるミシユアルの姿をレイは思い浮かべる。

初めて彼に会ったのは約十年前、アメリカのワシントンだった。レイは当時二十二歳、スキップでハーバード大学を卒業し、東京大学大学院に籍を置いていた。公的には摂政皇太子であり、実権は国王と変わりない。

一方、ミシユアルは十八歳の大学生。王位継承順位三位の彼がクアルンの国王になることはない、と思われていた。それどころか、彼は伯父の国王に疎まれており、クアルン王族内で微妙な立場だと知る。アメリカ政府もそれを察し、公賓のミシユアル王子より非公式に訪れていたレイ皇太子との会見を優先させたくらいだ。

レイも当初、ミシユアルに対する態度を決めかねていた。オペックに加盟を希望するならクアルンとの友好関係は非常に重要な。ミシユアルと交遊を深めることで、クアルン国王の反感を買つたのでは摂政として失格だらう。

しかも二人はまるで性格が違つた。

当時のレイは国内外の重圧に苦しめられており、自分を律することにかなり苦労していた。あの頃のレイにとって、日本人婚約者の存在は重荷にほかならず、可能な限り目を背けていたのだ。そんなレイにミシユアルは自慢気に言った。

『奇遇だな。私の婚約者も日本人だ。十年後、彼女を妻に迎える日を今から楽しみにしている』

## (8) 愛への道のり

それはアラビア語だった。

レイは一度も会ったことのない婚約者を平然と受け入れるミシュー  
アルが不思議でならない。彼は通訳を制すると、直接、アラビア語  
で尋ねる。

そしてその答えは、予想以上に判り易いものだった。

『私は五年前に彼女を娶るとアッラーに誓った。妻を持つことは男  
の義務であり名誉だ。あなたは違うのか?』

国策としてカトリックを受け入れたアズウォルド王国。レイも洗  
礼を受けたカトリック教徒だ。しかし、レイの中に神はいなかつた。  
国難は自力で乗り越えねばならない。誰もがレイに縋り、期待の眼  
差しを向ける。まるで彼自身がアズウォルドの神であるかのように。  
レイはその期待に応える為に、幼い少女との婚約を受け入れた。だ  
がそれは、大国の重圧に対する屈服であり、屈辱に等しい。  
珍しく、彼の胸に黒い塊が蠢いた。

目の前にいるのは、世界最大の原油大国を笠に着た気楽な身分の  
プリンス・シーク。アメリカ政府から蔑ろにされても、国家的には  
さしたる問題がない程度の……。

『私は次期国王として国民を飢えさせるわけにはいかない。婚約や  
結婚に個人的感情も名誉も必要ないんだ。王位から遠い君には判ら  
ないことかも知れないな』

レイは自分の言葉に驚いていた。

すぐに謝罪を思い浮かべるが……ミシュアルは超然たる態度で言

い返してきたのだ。

『国民を飢えさせぬなど、王たる者の義務だ！ 立場に変わりなく、試練はある。プリンス・リージェント攝政皇太子、その称号をもつて行うことが名誉と思えぬなら、とつとと辞めてしまえ！』

ミシュアルの叱声に、双方の側近が氣色ばんだ。レイの背後に控えていたサトウ補佐官も青褪めている。一方、ミシュアルの側近は若い者が多く、よほど彼に忠誠を誓っているのか一歩も引かない構えだ。

（四歳も年下の人間に説教をされるとは……）

レイは軽く頭を振り、『君の言う通りだ。失言だった。忘れてくれ』そう言つてミシュアルに手を差し出した。

王国を背負つて四年、澱みかけたレイの心に王族の誇りを呼び覚ましてくれたのは、砂漠の勇者であった。

だが一年後、この一件があつたからこそ、レイはミシュアルに賭けたのである。

開けていた窓とカーテンを閉めながら、レイは八年前のことを思い出していた。

ミシュアルは当時の王太子殺害容疑を掛けられ、砂漠で逃亡生活を余儀なくされた。アラビア諸国をはじめ、彼の母親の母国・日本も国王側につく。アズワルドにもそれとなく日本から打診がきたが、レイはそれを保留にした。そして個人資産で密かに彼を支援したのである。

それにより、ミシユアルは軍関係者を味方につけ空軍に入隊、国王の刺客を振り切ることに成功。彼がどこかレイに恩義を感じる素振りなのは、この時のことだつた。

とはいへ、レイもミシユアルに対する友情や感傷だけで動いた訳ではない。

順当に国益が上がり始めたアズウォルドにとって、軍備補強が最優先の課題となりつつあつた。専守防衛が基本とはいへ、守る力があることを対外的に示す必要がある。後に、クアルン海・空軍をアズウォルド近海に招き、大々的に合同演習を行つた。支払つた代価以上の効果を得たと信じている。

（今回も、あの男ならきっと……）

デスクに置かれた資料に目を落とし、レイは胸の中で呟く。  
直後　　コンコンコン、と小さなノックが彼の耳に聞こえた。

「誰だ？」  
深夜〇時近く、王宮内の国王執務室を訪れる人間など決まつてい  
る。だがあえて、レイは誰何すいかした。

「私です。入つてもいいかしら？」  
予想通りティナであつた。

「ああ、どうぞ」

ため息を隠し、レイは妻を招き入れた。

腰まであるブロンドを揺らし、ティナは二年前と変わらぬ天使の  
ような笑顔を見せる。涼しげな光沢を放つシルクのナイトガウンを  
羽織り、素足にサンダルというラフなスタイルだ。ガウンの下はお  
そらく、スリップタイプのネグリジェ一枚だろつ。

「お仕事中じゃめんなさい。忙しいのは判ってるの……でも」

レイは早口で話し始めるティナに微笑みかけ、指先で口を閉じる  
ようなジェスチャーを見せ、手招きした。

ティナは黙つてレイの傍に駆け寄る。

窓枠に腰掛けたまま、彼はティナを抱き寄せ、優しく口づけた。  
しだいに強く唇を押し付け合う。そして唇が離れた瞬間、彼女の髪  
に顔を埋めた。太陽の香りがレイの鼻腔をくすぐる。

「あの……明日からの公務ですけど、もし私がお邪魔なら」

「シーク・ミシユアルにはちゃんと話しておいた。我が国の王妃を  
粗略に扱つような真似は、私がさせない。公務は予定通りだ」

レイの言葉にティナはふわっと微笑む。

ティナが喜んでくれるなら、それ以上のことはない。だが、問題  
はこの先だつた。

「ねえ、レイ、もうすぐ口付けが変わるわ。そろそろ休んだほうが  
いいんじゃないかしら?」

彼はスッとティナから離れた。デスクの書類を手に取りつつ、  
「ああ、悪い。どうしても目を通しておかなければならぬ書類な  
んだ。会議は明日もあるからね」

出来る限り平静を装つた。

「レイ……そう言つて何日寝室に戻つていいいか、判つてる?」  
「判つてはいるよ。だが今は、本当に忙しいんだ」

レイは再びティナに髪に触れ、

「頼むよ、ティナ。私を困らせないでくれ。新婚夫婦に当たられて  
いるのは私も同じなんだ」

彼女のヘーゼルの瞳を覗き込み、軽くキスした。

いつもなら、これで引き下がるはずだつた。しかし……。

「今夜だけ、お願ひ、今夜だけ……私と一緒に休んで欲しいの。もちろん、その……眠るだけじゃなくて」

ティナは少し頬を赤らめつつ、身振り手振りで気持ちを伝えようとする。

無論、それは気付かないほどレイは鈍い男ではない。

「一番……赤ちゃんが出来やすい日なの。だから……夫婦なんだもの、協力してくれるでしょ?」

ティナの瞳は涙で潤んでいる。キスで「まかせない」と悟り、レイはティナに向き合つた。

「ティナ、君の気持ちは判つていいつもりだ。でも、少し子供のことは忘れないか? そんな決死の覚悟で挑むものじゃ……」

「私に魅力を感じなくなつたのならそう言つて!」

レイの言葉を遮るように彼女は叫んだ。

「ほり、またすぐそんなことを言つ。違つと言つてんだろ?」

「丸一年を過ぎたのよ。焦つて当然だわ。本當なら、ちゃんとした検査だつて受けたいのに。あなたが必要なつて言つから……」

「いいかい、ティナ。検査はしない。特別な治療も必要ない。時期がくれば授かるだろうし、万に一つ、私たちに後継者がいなくても、ソーヤもアーロンもいる。子供がいなくても幸福なカップルは」

「私が欲しいの! レイ、あなたの子供が欲しいのよ。特別な手段で授かるなら、どんなことでもしたいわ。でも、私に出来るのはタ

イミングを計るくらいなの！ チャンスは月に一度なのに……。あなたはこの一ヶ月、私を抱こうともしないじゃない！」

いつもは黙つて聞いている。だがこの日ばかりは、ミシューアルたちの様子にレイ自身も煽られていたのだ。

「クリスティーナ、悪いが……今の君に？種付け？をする気にはならない」

レイの言葉にティナは一言も返さず、執務室を出て行った。

## (9) 罪なハネムーン

王宮関係は古い建物の多いクアルンに比べ、アズウォルドは新しく感じる。

それもそのはず、テロ以前のこの国は貧困に喘ぎ、王宮とはいえる漏りのするような場所もあつたという。レイ国王が摂政となつて実権を握り、この国は急成長を果たした。テロで半壊した王宮を全て撤去し、完全西洋風の王宮正殿と南国の名残がある王廬とに建て替えたのだ。

そして今、舞が立っている場所は 王宮正殿の一階にある？騎士の間？。

クアルン王国国王夫妻を歓迎して催された、晩餐会の会場であった。

昼過ぎ、いきなりミシュアル国王は公務から戻つて来て、「舞、今日の晩餐会にお前も出席することになつた。急なことでドレスを作る時間がない。すまぬがこれを着て出でてくれ」

ミシュアル国王の側近が差し出したのは、舞がクアルンで初めて着たドレス ダイヤモンドが散りばめられたシャンパンゴールドのイブニングドレスであった。

舞にすれば、いつの間に？ どうして持つてきたんだろう？ と不思議でならない。だがそれは、両親にドレス姿を見せたいのではないか、といつミシュアル国王の心遣いだつたらしい。結局、日本では着る機会がなかつたのだが。

舞はバーックである。

クアルン流の午餐会や晚餐会、もつと簡単に食事会とか茶話会なんかはだいぶ飲み込めてきた。だが、イブニングドレスを着た西洋風の晚餐会など……。

（）いうが、何をうしてからこのやうになつたか！

せんじやくはいせんじやく

結婚前とは違い、ドレスアップするのはどうでも楽しい。特に、ミシユアル国王が絶賛するので、彼の為に着飾りたいと思う。いつもなら相談するシャムスもない。だがこの場合、シャムスも「どう致しましょ」言い出す氣もする。いつそ、ティナに相談してきてもいいだろか、と舞が尋ねようとした時、ミシユアル国王の憮然たる様子に気が付いた。

「ねえアル、どうしたの？ 私が晩餐会に出るのが不満？」  
「だつた  
ら辞退するけど」

「そうではない。正妃たるお前に、同じドレスを一度着せるなど……。新しいドレスを用意しておるべきだつた」

深亥そハ正口に申すが何がそんなんは問題なのが云々

けじやない」

クアルンから同行している女官二名は、元々王太子の宮殿に居た女官だ。誰も舞がこのドレスを着たところなど見ていないのだから、気にする必要はないと思つ。

「一度は一度だ。正妃の晩餐のドレスも新調できないなど……外部に漏れては私の恥だ」

他のドレスは日本で着たウェディングドレスとパーティードレスがあるが、それよりましたと判断したらしい。

舞は、結局自分の恥なのね、だつたら出ない！ と叫びそうにならぬのをグッと我慢した。

ミシューアル国王の首に手を回し、ニッコリ笑つて尋ねる。

「「「うわー」」」言わないの。どうして出られるようになつたのか、晚餐会で何をしたらしいのか、ちゃんと教えてよ。ね、アル」

軽く彼の頬に口づけると、一人を取り巻く空気がガラリと変わった。舞は色々教えて貰つままでに、一時間ほど別の授業を受ける羽田になつたのである。

天井一面に騎士の絵が描かれていた。騎馬隊の一団や、その向こうには剣を抜いて戦う、合戦シーンもある。重そうなシャンデリアが六基も吊られ、大広間にセツティングされたテーブルには、ほとんどの招待客が着席していた。

舞はそんな会場の様子を、衝立の隙間からコツソリ眺めてため息をつく。

（日本では出られなかつたもんねえ……こんなの初めて）

だが、レイ国王とミシューアル国王が並んで入場した瞬間、全員が一斉に立ち上がる。

舞も慌てて姿勢を正し、ティナと一緒に彼らの後ろを静々と歩くのだった。

会場を見渡し、「クク」と息を飲む。事前に聞いてはいたが、こうして田の当たりにすると壯觀だ。晚餐会のフロアには着飾った招待客が約百一十名ほど……その全てが女性であった。

思い思いのドレスの波が？騎士の間？を席卷する。後宮の集まりも華やかではあるが、ここはそれ以上に豪華絢爛といつ形容がピッタリに思えた。

「クアルン国王夫妻を歓迎するのに、妃殿下が出席出来ないシステムはおかしい。可能な方向でクアルン大使と検討するように」レイ国王はそんな指示を出していた。だが結局、一行が到着するまで結論は出なかつたらしい。

クアルンのルールで言えば、家族で王宮を訪ねた場合、妻と娘を相手の後宮に預けることになつていて。信頼の証ともいえるが、それが成り立つのは相手の後宮も男子禁制であるがゆえ、だ。

柔軟だと言われるレイ国王は、それならば、と晚餐会を男子禁制にした。

今夜このフロアの中に入れるのは、両国王以外は全員が女性！招待客から配膳スタッフ、王宮樂団の奏者、警備にも女性警察官を配備し、完璧であった。

順番に国歌の演奏が終わり、両国王が着席すると他の全員も椅子に腰を下ろす。

こういった晚餐会の場合、国王が中央に並んで座り、相手国の王妃がその隣に座る。というのが慣例だ。しかし今回は違つた。上座が設けられ、そこに国王が並んで着席。その一段下の中央に王妃たちの席を設け、後は通常の席次順となつていて。

舞がレイ国王の隣にならないよう、配慮したテーブル配置であった。

「舞踏会がないのが残念ね。マイはとてもダンスが上手そうなのに、ティナが微笑みながら恐ろしい話題を投げかける。

「と、とんでもありません。なくてホッとしてます」

「そんな謙遜しないで」

謙譲の美德は舞も持っているつもりだが、こればかりは百パーセント本心であった。

「そんなことより、わたしのせいで踊れなくなつてしまつて。ティナも楽しみにしてたんじゃありませんか？ レイ陛下とのダンス見てみたかったなあ……なんて」

ちよつと冗談めかして言つたのだが、どうやらティナの耳には届いてないらしい。

じつと見ていると、？白トリュフを散らした舌平田のソテー？も？牛フィレ肉のステーキ？も？ブロッコリーのクリームスープ？すら半分も口にしてはいなかつた。

「あの……ティナ？ 具合でも悪いの？」

小さな声で話しかけるが、ティナは顔を真つ直ぐ前に向けたまま、虚ろな瞳をしていた。

「ティナ？ ティーナ？」

「あ……ごめんなさい。お食事は口に合つつかしら？ えつと……今日のメインは何だつたかしら？」

メインのステーキを食べた後でそんなことを口にしている。

「えつと、多分、次は？ チョコレートマースのバニラアイス添え？ だつたんじやないかなーと」

「あ、ああ、そうね。メインはもう頂いたわね」

そう言つて口元だけ微笑むと、今度は視線を下に向け、ジッと水の入ったグラスを見つめるティナであった。

／＊＼＊／＊＼＊＼

『昨日は妃が世話になつたと聞いた。非常に喜んでいた。クリステイーナ王妃に礼を言ひ』

ミシュアルはとりあえず礼儀正しく声を掛けた。

しばし返事を待つが、レイは一段下の席に舞と並んで座る、アズル・ブルーのイブニングドレスに身を包んだティナを凝視している。それに気付いたミシュアルは、わざとらしく咳払いしつつ……。

『昼間の会議もまともに聞いていなかつたな。君が女に呆けるとは珍しいことだ』

ハツとして横を見るレイに向かって、してやつたりの笑みを浮かべる。

レイは水の入ったグラスを取り一口飲みながら、彼らしくない不機嫌な声で答えた。

『疲れが溜つている。その上、寝不足なんだ』

『結構なことだ。しかし、言い訳は君らしくない』

夜の寝不足といえば何を指すか……言わずもがなであろう。ミシュアルは自分の基準で答えを返す。

『シーク・ミシュアル、新婚の君と一緒にするんじゃない』

『妻を持つ男が夜に行つべきことは一つだ。結婚年数など関係ない。夫の義務だ』

その何気ない言葉に、レイの表情は凍りつく。

しかし、心の機微を察するのは、ミシュアルにとつて苦手なことの一つだったのである。

## (10) 孤独な一人

晩餐会はそのまま舞踏会になるのが通常だが、まさか、国王夫妻だけ踊り続ける訳にもいかない。その為、食事が終わると会はお開きとなつた。

その代わり、国王たちは続きの間で、締め出しを食らつた男性招待客との謁見が控えているという。

舞とティナは？貴婦人の間？に案内され、王族女性との歓談が予定されていた。

「クアルン王国の王妃様がわたくしと同じ日本人だなんて、光榮でござりますわ」

「オーホツホツホ！ と高笑いをしているのが前国王の生母、レギイ・チカコだと紹介された。彼女は綺麗な日本語を話しつづけ……というより、日本人なのだから当然かも知れない。

「王弟殿下のお妃様が『ご懐妊とか、おめでとう』といいます。やはり後継者を産むことは、王家に嫁いだ者の義務ですものね。お若い妃殿下なら、『ご懐妊もすぐですわ！』

ティナに向けたあからさまな嫌味に、舞はカチンときた。

おそらく、横で見てもムツとした顔をしたのだろう。ティナは慌てたような口ぶりで、

「お祝いは結構ですが、プライベートに関するお話はお止めください」

「あら、おめでたいお話ですもの。クリスティーナ様、あなたにござ

懷妊の兆しがないからといって、あまり周囲に気を遣わせるのはどうかしら?」

チカコはティナの言葉など鼻で笑う様子だ。

その時、

「王后陛下に失礼ですよ。言葉を慎みなさい」

厳しい口調で言つたのはレイ国王の叔母にあたるルシール王女であつた。髪と瞳の色はブラウンだが、全体的なイメージは西洋風の女性であつた。

このアズウォルドは混血が多く、現在も国際結婚が多い為、様々な印象の人たちで溢れている。

ちなみにこの歓談に出席しているのは、レディ・チカコの娘マリナ王女と、リューク王子の妻リハンナ妃、その娘のローザ王女、ミシガン王女、そしてルシール王女の娘レディ・アンナの七名であつた。

ティナが二十六歳、ミシガン王女とレディ・アンナが三十代、他們全員四十歳は超えている。よつするに、この中で断トツに舞は若いことになる。

チカコはそんなルシール王女にも文句を言い始めた。

「あら、ルシール様のお嬢様、アンナ様にもお二人目とか。おめでたいお話ですのに、どうして話題になさいませんの? あれほど子供好きでお優しい陛下でしたのに、最近では臣下の子供を王宮に呼ぶこともなくなつたとか……」

言葉に詰まるルシール王女に代わつて、隣に座つた黒髪の女性レディ・アンナが声を上げた。

「そんなことはありません! 陛下はつい先日も、息子ブライアンの誕生日にアジュール島までお越し下さいました。クリスティーナ

様と一緒に選んだといつお祝いを持つて」

「まあまあ、王妃様はご一緒にさいませんでしたの？ アジュール島はお一人でよく行かれでましたのに？」

「わざとらしい嫌味に舞の怒りはメラメラと燃え上がる。加減がすぐれませんでしたの。それだけです」

「お加減が？ では、いよいよおめでたかしら？」

『王妃つたつて繁殖牝馬じゃないんだからね！ そんなボコボコ産めるわけないじゃない！』

舞は思い切つてアラビア語で怒鳴った。

一斉に？貴婦人の間？は静まり返り、全員がポカンと舞を見ていた。

一応、通訳の女性は舞の横に待機している。しかし彼女は青褪めていた。どう訳していいものか、困っているらしい。

（そ、それもそうか……訳されたらヤバイかも）

「全てがアッラーの思し召しです。申し訳ありませんが、イスラムではそういう話題は禁じられております。これ以上続くよつなら、わたしは退出しなければなりませんが」

舞が挑戦的な笑顔を作つてそう言つと、さすがのチカラも黙り込んだのだった。

「アーライシャ殿下。さきほどのイスラムの辯はお見事でしたね」

予定されていた歓談の時間が過ぎ、舞は王宮の庭でミシコアル国

王の帰りを待つていた。この国はいたる所に緑と水が溢れている。日本も豊かだが、それ以上だ。満点の星を見上げつつ、マイナスイオンを胸いっぱいに吸い込んで、舞は庭の噴水を見ていた。

そんな彼女に話しかけたのが、レディ・アンナであった。身長は舞と遜色ない。真っ黒の髪を肩まで切り揃え、額の中央で綺麗に分けていた。母親のルシール王女にはあまり似ておらず、東洋人ぽい顔立ちをしている。

「えつと……レディ・アンナでしたね。まさかとは思いますが……

アラビア語は

「少しだけ」

「そう言ひとくスッと笑つた。どうやらハッタリに気付かれたらしい。

舞は思わず愛想笑いを浮かべつつ、

「あんまりしつこいので、つい。……レディ・チカコはティナが嫌いなんでしょうか？」

美人の割にアンナの表情が人懐こい印象だったので、舞も親しげに尋ねてみる。

「レイに子供が出来なければ、次の国王は彼女の息子ソーヤになるの。だから、気になつて探りを入れてるんじゃないから。ソーヤは妙に意地を張つて、結婚しようとしてないし」

それはそれで余計にプレッシャーなんじゃないかな。舞がポロリと口にする。

「そうなの！ ティナが一生懸命になり過ぎるから、少しは考えてくれたらいいんだけど……」

アンナは従弟のレイ国王はもちろん、ティナとも仲が良かつたと

いう。

彼女の夫はレイ国王の専属護衛官——ツク・サトウ。ツクの父は国王の首席補佐官、母はレイ国王の乳母だった関係から、国王夫妻とは家族同様の付き合いをしてきた。

アンナはこれまで、ずっとティナの相談に乗っていた。しかし、四ヶ月前にレイ国王の元婚約者が第二子を出産。その後からティナは一層神経質になってしまった。そんなティナに、アンナは第二子の妊娠は告げることが出来ず……。

レイ国王も同様で、一人でアジユール島を訪れることにしたらしい。しかし直後に、事実がティナの耳に入ってしまったのだ。

「色々揉めたみたいね……。レイは何も言わないけど」

それ以降、ティナはアンナを避けるようになつた。

彼女の話を聞き「なるようにしかならない気がする」と思つのは、まだ切羽詰つていられないせいだらうか？ 舞はそんなことを自分に問い合わせてみる。

「アーリシャ殿下。新婚さんはいえ、同じ一般人から王妃になられたあなたの言葉なら、ティナも耳を貸しそうな気がするの。あんまりレイを追い込まないよう、ティナに言つてあげて欲しいのよ」「お、追い込む？」

「そう、レイは表に出さないから判り難いんだけど……。フレッシュヤーを感じてるのは彼も同じだから。レイにはティナしかいないの。それを彼女に思い出して欲しくて」

「どことなく頑張っているティナとは違い、アンナは全く自然に王宮の似合つ女性だった。

「 アーイシャ。ここに居たのか」

舞が返事を迷つて居ると、背後からミシュアル国王の声が聞こえた。

アンナは一歩下がると、さりに右足を引き、腰を落とす。

「アンナ・クリスティーヌ・サトウと申します。御目に掛かれまして、光栄に存じ上<sup>アッ</sup>げます」

「ああ、レイ国王の従姉殿か。頭を上げるがよい。……子がいるようだな。何ヶ月だ?」

「五ヶ月目に入りました」

「丈夫な子を産むように そなたにアツラ<sup>アツラーフ・ヤハミーキ</sup>のご加護を」

アンナは『感謝申<sup>シヨクラン</sup>し上<sup>アッ</sup>げます』アラビア語で答へ、舞に小さく田配せして下がつていった。

舞はさつき言わたことを思い返し、ボンヤリと彼女の後姿を見つめる。

「どうした? 何か言わたのか?」

何を勘違いしたのかミシュアル国王の声が険しくなつた。

舞は慌ててアンナの言葉を伝える。特に誰の悪口でもないし、レイ国王とミシュアル国王は仲が良さそうだ。ひょっとしたら何か力になつてくれるかも知れない。

そう思つた舞に彼が言つた言葉は 。

## (1-1) 愛と怒りの女神

アジアール島・アジア国際図書館オープニング記念式典と書かれた横断幕の前にティナと舞は並んで立っていた。舞はもちろんフル装備だ。大勢のマスコミがカメラを構えて並び、テレビ局も来ているという。そんな中で舞が素顔を出せるはずがない。

この図書館は司書であるティナが設立に携わったものだった。元々、彼女がこの国に招かれた理由が「新しい図書館の設立にかけて」というもの。単なる建前だが、それは言えない。この国にはすでに蔵書一千万冊を誇る国立図書館があつた。それと区別する為に、アジア各国の本に限つた専門的な図書館を設立したのである。アジアの中でも、東アジアに関する全てがここに揃っている。そんなことを教育省の女性大臣が、ティナと舞の横で来賓やマスコミに向かつて話していた。

それを訳してくれる女性に視線を向けつつ、とも聞いていますとばかり舞は頷くが……。

（アルの馬鹿っ！ 何よ、冷たいことばっかり言って。勝手にしたらしいじゃない！）

頭の中にはミシュアル国王に対する文句ばかり浮かんでくるのだった。

／＊＼＊＼＊＼＊＼

「彼らの問題は彼らが解決する。お前は余計なことをしてはならぬ」

スッパリ言い切ると彼は舞に背を向けた。

確かに、ミシユアル国王の言つ通りだらう。他人がどういうできる問題じやないのは、舞も承知している。

だが、悩みは言葉にしたり、誰かに聞いて貰うだけでも心が軽くなるものだ。アメリカの一市民だったティナがアズウォルドの王室に嫁ぎ、たつた一人の味方であるレイ国王との仲が気まずくなれば……。

舞にはとても他人事なんて思えない。

それこそ、明日は我が身？である。

「国内の内戦だつて、解決する為に国連とか他国が介入することもあるじやない！ 色々言われて、本当にティナは辛そうなの。それだけでも伝えてくれたつていいでしょ？」「

舞の言葉に、ミシユアル国王は大袈裟なほどため息を吐く。

「レイはそれに気付かぬほど愚かな男ではない。クリスティーナは夫の指示に従わぬ、問題を大きくしているに過ぎぬ。王妃の自覚を持つよう、伝えるがよい」

それには舞も力チンときた。

「なんでそうなるのよつ！？ ジヤ、私に子供が産まれなかつたら、アルも同じように言つんだ！」

「……他人の苦しみを我が事のように思つのは、お前の長所であり、欠点もある。舞、間違つても他国で面倒は起つさぬよつ。よいな！」

「！」

何が一番頭にくるかと言えば……。

新妻<sup>まい</sup>のお願いを素氣無く跳ね返しておきながら、ベッドの中では

しつかり手を伸ばしてくるのだ。

( 一体、どういう神経してんのよつー。 )

ソレはソレ、「コレはコレ、にも程がある！  
舞が無視すると、今朝は一言も話さず公務に出て行つた。  
それだけじゃない。

『今朝の陛下は随分『氣分を害されている』様子。閨室けいしつで陛下のお心を損ねるなど、妃にあるまじき失態。ラシード殿下はクアルン女性を娶り、アッラーの『ご加護をいただいて早々にお子に恵まれました。この分ですと、『』帰国と同時に第一夫人を娶つていただくことになりそうですな』

側近ダーウードは、自慢の髪を撫でながら舞に言つ。  
そのふんぞり返つた態度は、王子を産むまでは正妃として認めるもんか！ といふことらしい。

しかも、少し距離が離れていたとはいえ、ミシユアル国王の耳にも入つたはずなのだ。なのに、彼は何もフォローしてくれなかつた。それに気付いたとき、舞の怒りは沸点に達したのである。

／＊＼＊＼＊＼

「……妃殿下。アーカイシャ妃殿下。テープカットで『』ぞひます、

女性通訳の言葉に舞はハツとする。

慌てて笑顔を作り、手にしたハサミでティナと同時に田の前に張られた紅白のリボンをカットした。後から、笑つても誰にも見えな

いことに気がつく舞だった。

「そんな……シーク・ミシユアルの仰る通りだわ。私たちのせいでも夫婦喧嘩なんて駄目よ。今夜はちゃんと謝つて、仲良くしてちょうだい。ね、マイ」

男つて本当に無神経。なんでちょっと気遣ってくれることができないの。馬鹿みたいにプライドとか面子ばかり気にして！

医療施設を視察した後、アジュール島内にある離宮・瑠璃宮殿に二人は入った。

舞は彼女を元気付けようとするとあまり、ついつい悪態が口に出来る。すると、逆にティナの方が心配して、舞を宥め始めたのだった。

「あなたの気持ちは嬉しいわ。でも、王妃としての役目を果たしていない私が悪いのだから……」

ティナは一般人だったとはいって、舞のような庶民ではない。ニューヨークの五番街に大邸宅を持つ、富豪の娘なのだ。だが家族仲は、というと……。結婚から一年、ティナが実家に戻ったのは国賓としてアメリカを訪れた一度だけだった。

もし舞なら最悪の場合、月瀬の両親の元に逃げ帰つても追い返されることはないだろう……多分。

だが、ティナには帰る場所がない、という。

「去年、帰つた時も……お前は子供の一人も産めないのかつて、父に叱られたわ。焦つては駄目だというレイの言葉もよく判るの。でも、周囲が私のせいだつていう目で見るのに、何もせずに居られないのよ」

「検査とか、受けたんですか？」

舞は慎重に尋ねる。

ティナもそれに気付いたのか、舞に向かって柔らかく微笑み、首を振った。

「いいえ。レイが必要ない、って」

ティナはまだ二十六歳。焦るような年齢ではない。事情があるにせよ、ないにせよ、健康に問題がないなら特別な検査は不要だ。生殖能力の有無は愛情の重さに比例しないのだから……。

「そういうて検査を受けさせてはくれないの。確かに、私に問題があつても離婚は出来ないのだから、意味がないと言えばそうだけど」

カトリックのアズウォルドは離婚できないのが建前だ。もちろん、ズルイ手段はいくらでも使える。でもレイ国王はそういうタイプではなかつた。側室を持つような国民感情を逆撫でする？不貞行為？もしない人だとティナは言つ。

それを考えれば、クアルンの方が楽といえば楽なのだ。離婚も出来るし、ミシユアル国王がその気になれば、あと三人もお妃を娶れる。

（フン、だ。クアルンの由緒正しいお嬢様を何人でも娶ればいいじゃない！）

舞だつて不安なのだ。まだまだこれから、と思つていたところにライラの妊娠が知らされた。

もし、ライラが王子を産んだら……。

そして舞に何年経つても子供が出来なければ……。

間違ひなく、ライラを妻にしておけば良かつたのに、と言われる

だろう。ミシユアル国王に「そんなことはない」と言つて欲しかつた。それを「面倒は起こすな。王妃の自覚を持て」なんてあんまりだ。

二人の王妃が揃つて意氣消沈している所に、離宮の女官がやつて來た。昼間の式典の様子がテレビで放送されている、と伝えにきたらしい。ティナの指示でテレビが付けられ、チャンネルが合わされた。舞とティナが新しい図書館の中を見て回つたり、他の施設を訪れたシーンなどが次々と流れる。

直後、スタジオにカメラが戻り、「不仲説が囁かれる国王」夫妻ですが……」などと司会者が言い始めたのだ。

「もういいわね。切りましょうか」

そう言つてティナがリモコンに手を伸ばした時、

『ハリウッドでは女優のローラ・ウイリアムズさんが妊娠五ヶ月と発表されましたが……。結婚はしない、父親の名前も公表しないとのこと。レイ陛下はクリスティーナ様とのご結婚直前まで、ローラさんと交際されており、ちょうど今年の一月にローラさんがアズウォルドを訪れたことから』

## (1-2) 危険なゲーム

「 では、車が一台消えているんだな」  
ミシュアルはレイと王室専用船に乗り、アジュール島に向かつていた。

全長二十五メートル、全幅十メートル、二百トンにも満たない船だ。しかし、国内の島々を巡る分には充分だという。  
レイが携帯電話で話しているのは、どうやら王妃の護衛官らしい。

（護衛官を煙に巻いて出奔とは……全く、妃にビリコツ教育をしているのだ）

それもこれも、レイがクリスティーナに甘いからだ、と心の中で舌打ちする。いくらアジュール島が安全で、しかも舞の為に不慣れな女性護衛官を多用しているからと言つても……。

「いや 向かつた先は判つている。君たちはそのままアーリシャ妃の警護に回つて……何つ！？ テイナはアーリシャ妃を伴つて宮殿を出ただと！」

その台詞に、ミシュアルは口に含んだ?シャルバート?を吹き出した。彼のために作られた、ナツメヤシの実や乾したブドウの入った甘いドリンクだ。

ミシュアルはわなわなと手を震わせ、レイに向かつて怒鳴る。

「伴つて、とはどういう意味だ！ お前の妃がアーリシャを連れ出したのか？」

「ミシュアル、少し黙つてくれ」

レイは電話口を押さえ、ミシユアルに命令した。

再び電話の相手と会話を始めるが、

「黙れとは失礼であろうーー我が正妃に何かあれば、お前の妃と言えどもただでは済まさぬぞ！」

直後、紺碧の瞳が冷ややかな視線を怒声の主に向ける。

「では、宮殿の監視カメラで確認したんだな。使用者の車を運転していたのは、アーカイシヤ妃である、と

「……！」

（どうしてお前が出奔する！　私が何をしたというのだっー…？）

吹き付ける潮風に眉を顰めるミシユアルであった。

レイがあの情報を知ったのは、舞たちが観ていたテレビ番組の放送直前のこと。

「困ったことになった……」

国務省報道室から緊急連絡と聞いたが、その報告を受けた直後、レイが青褪めてミシユアルの前に座り込んだ。そのままテーブルに置かれたコーヒーカップを手に取り、一気に飲み干す。

「……」

ミシユアルは、レイの動搖に驚いていた。

なぜなら、レイが飲んだのはミシユアルのカップで、入っていたのはクセのあるアラビアコーヒーだ。緑茶を好み、コーヒーもアメリカンにするというレイである。何事が起こったのか、ミシユアルも自然と緊張を高めた。

「ハリウッドのある女優が、未婚の母になるというんだ」

「……それがどうした？」

懸念される国際問題は山のようにある。火種は合衆国にも日本に

も、そしてイスラム諸国にもあった。それが、いきなりハリウッド女優の話に飛び……ミシユアルにはサッパリ判らない。

「私は結婚前、ことさら派手な女性関係を演出していた」

それにはミシユアルも心当たりがある。やれパーティだ、バカンスだと言い、その都度レイは様々な女性を同行していた。世界中のマスコミに？プレイボーイ・プリンス？と書き立てさせたと言つてもいい。眞偽の程はミシユアルも知らない。重要なのは、彼が国王として信頼に足る人物か否か、ということだけだ。

そして、ミシユアルはレイを信用していた。

「その時にエスコートした女性の独りが、このミズ・ローラ・ワイリアムズだ」

レイは雑誌を一冊、ミシユアルに差し出した。表紙に金髪碧眼の女性が下着同然の姿で載っている。肢体をくねらせ、男を誘惑する売春婦そのものだ。このような雑誌をクアルンに持ち込もうものなら、即刻逮捕されるだろう。

ただ、ミシユアルとて男である。度を越したダイエットで針金のようになつた裸体に比べれば、ローラの健康的で豊かなバストとヒップは観賞用には悪くない。

「そして彼女は四ヶ月前に、この国を訪れている」

「言い訳も説明也要らん。君の子供なら認めて養育費を払え。この女が偽りを口にしたなら、制裁を加えれば済むことだ」

「（）もつとも。だが、彼女は個人的事情でノーコメントを通すそうだ。私は否定すると言つたが、報道室長は表面的事実のみ書かれている以上、こちらから騒ぐのは不利になると言つ」

数年前の一時期、レイと交際があつたということ。ローラが妊娠しており、父親の名前を決して明かそうとしないこと。そして、子供の父親と関係があつたと思われる時期、アズウォルドを訪れることが報道されていた。

厳密に言えば、『父親=レイ』と思わせる報道は規制することが可能だ。しかし、規制した、という事実は残る。アズウォルドのようないくつかの国では、余計に噂を煽ることにもなり兼ねない。

「身に覚えのないことなら放つておけ」

「問題は……ティナがそう思ってくれるかどうかだな」

「一国の王たる者が！ 情けない言葉だ」

「では、シーケ・ミシュアル、君ならどうする？ アーイシャ殿は無条件で君を信じてくれると思うかい？」

ミシュアルは三秒ほど考え、「当然だ」と答える。

レイは苦笑いを浮かべつつ、

「そう言い切れる、君が羨ましい」

深いため息をついたのだった。

～\*～\*～\*～\*～

「ねえマイ……あなたまで出て来なくても……」

さつきから何度もティナが口にしている言葉だ。

しかし、動搖しながらも「私は大丈夫だから、一人になりたいだけだから」そう言つて宮殿から出て行こうとした。そんな彼女を、舞は黙つて見送る「」ことが出来ず……。

アバヤを脱ぎ捨て、女官の私服を借り、舞は一見すると、口系アズウォルド人？に早変わりである。そして、ちょうどその女官が乗つていた日本製の軽四自動車まで借りた。一人の王妃に詰め寄られては、女官も逆らえないだらう。

それに『無断で借用します。女官のせいじゃありません。舞』と、日本語で書き置きも残してきた。

（アルってば、あの女官を嘲したりしないよね……それだけがすつごく不安）

「マイ、ミシュアル陛下が心配すると思います。やはり、引き返しましょひ」

舞のことを気にして、ティナは戻るつとまで言い始める。

「ティナはそれでいいの？ もし、本当にレイ陛下の子供だつたら

……」

「その時は私はこの国を出るわ。離婚の手続きだって、レイがその気になれば出来るはずよ。彼は……庶子は作らないと言っていたから……あつと」

やう言ひとまた涙をこぼし始める。

あの放送を見た時、「まつさかあ～そんなことありませんよね～」と舞は必死で笑った。隣に座るティナが見る見る蒼白になつていつたからだ。

そしてティナは、ローラの子供の父親はレイ国王に違いない、と。ちょうどその頃から、夜の生活が遠のきはじめ……とうとう一ヶ月くらい前から、ティナの誘いに全く応じてくれなくなつたと知りした。

（一ヶ月も、なんて最っ低！ そもそも、ヤル」とヤラなきや子供

なんて出来っこないじゃない！）

さすがの舞も、ストレートに言つたらティナを傷つけると思つ……。

「いくら国王様だつて、浮氣なんて酷いわ！ しつかりお灸を据えてやらないと」

「浮氣ではないわ。レイは浮氣をするような人じゃないの。本気なのよ。だから、子供を作つたんだわ。だから、私のことも……」

そのまま、打ちひしがれたようにポロポロ泣き始める。

もうすぐレイ国王がここに来る。でも今は、彼と顔を合わせたくない。酷いことを言つて、これ以上嫌われるのはイヤだから。誰とも顔を合わさなくて済む場所がある。レイも知つている場所だから、そこで頭を冷やして、冷静になつて彼と向き合いたい。

「ティナ、この道でいいのよね？」

「え？ ええ、そう。レイが個人的に所有しているゴテージがあつて……きやー！」

不意に背後から大きな音と揺れを感じた。舞は慌てて車のブレーキを踏み、急停止する。

舞は地震の多い東京育ちだ。多少の揺れで大騒ぎはしないが、彼女が感じたのは地震の揺れではないよつな……。

この時、ゴテージに繋がる一本道が崖崩れにより寸断されたことなど、判るはずもない舞だった。



### (13) 恋はスコールのよひ

コテージに車を横付けし、舞とティナは中に駆け込んだ。突然の雨、これをスコールと言つらし。雨季に入つたので数ヶ月は続くとティナが説明してくれた。

「マイ、大丈夫？」

「あ、はい。大丈夫です……たぶん」

幾分心もとない返事だ。しかし、全身が濡れネズミの状態ではそれも仕方ない。雨に濡れたことくらいあるが、グレーのカーテンが引かれたような雨は初体験スコールだつた。

ティナも同じようにズブ濡れだが、さつさと奥に入り舞を手招きする。

「シャワーはそこ、ワードローブはこっちよ。私のほうが背が低いから、少しこいかも知れないけど……」

縦もそうだが、横もワンサイズ違う気がする。ティナから借りた服が、ファスナーが上がりません、なんてことになつたら赤つ恥もいといところだ。

(こんな時こそアバヤが欲しいな……アレって万能だし)

舞の期待とは裏腹に、ティナは若い舞に似合つ服を、ヒアレコレ選んでいる。

結局、エスニック柄の五分袖チュニックとロングスカートという、庶民的な組み合わせを舞は選んだ。サラサラのインド綿が肌に心地

好かつたし、スカートのウエストがゴムのも気に入つた。ティナだとくるぶし近くまで丈がありそうだが、舞にはふくらばき辺りまでだ。

なんとなく、あまり露出がない方がミシュアル国王が来た時に無難かな、と思つたのが本音である。

(「機嫌取つてゐみたいでちよつと悔しいけど……）

舞がシャワーを使わせてもらひリビングに出ると、ティナはすでに着替えていた。違う部屋のシャワーを使つたという。彼女はオフホワイトのワンピース姿だつた。マキシ丈だがノースリーブの肩はむき出しになつてあり、舞より露出度は高い。

キッチンに立つてゐる彼女の姿は？王妃様？といつよつ、『く普通の若奥様みたいだ。

「待つててね。あ、紅茶でよかつたかしら？」

「あ、はい。何でも……。あの、随分手慣れてるんですね」意外だつた。彼女は大富豪のお嬢様で、お皿の一枚も洗つたことがないようなイメージだ。

「このコテージでは何でも自分でするのよ。空からの侵入さえ阻めば自然の要塞だからって、護衛なしでも許されてるの。レイと二人きりで……」

そこまで言い掛け、ティナは口をキュッと閉じた。

「あ、あのっ！ ひよつとしたら、何かの間違いかも知れませんよ。だつて、レイ陛下はティナのことを本当に優しい眼差しで見てるし」スコールで程よく頭も冷え、舞は前向きに考えようとするが、「愛していたら、一ヶ月も触れないなんて有り得ないわ……マイはそう思わない？」

ティナも同じくらい冷静になつたのか、静かな笑みを湛えながら、

温めたティーカップに紅茶を注いだ。

二人はそのままソファに移動し、向かい合つて座つた。

さつきは急いで駆け込んだので気付かなかつたが、世界で一、二位を争うほど豊かな国王が所有するにしては……質素なコテージだ。舞がそれとなく尋ねると

「ここはレイのおばあ様が持つていたコテージなの。この島の出身で……戦時中に、国王の弟であつたおじい様と愛し合つて結婚なさつたんですつて。日本人の血を引いていて、身分も低くて……反対されながらも、二人は思いを貫き通したの。でも、『長男がたつた六歳で……米軍の爆撃で亡くなつて、日本の血を引く』自分のせいだつて悲しまれたそうよ」

その為、次男を終戦処理が終わるまで、なんと十四年間も日本の親戚に預けたらし。彼は十八歳になつてアズウォルドに戻り、皇太子となつた。それがレイ国王の父親である。彼は祖国より日本を愛したという。身の安全に配慮して決められたアメリカ人婚約者から逃げまくり、幼馴染の女性と結婚した。

それが、あのティナに嫌味を言つていたレディ・チカコというから……。

(なんかいまいち、素直に感動出来ないつていうか)

舞がボソッと口にすると、ティナも苦笑する。

「彼女が以前言つていたわ。自分たちは無理に離婚させられた、犠牲者だ、と。確かに、そなならなければ、彼女はこの国の王妃だつたわけだし、レイはこの世にいなかつたんだものね。アーロン王子も、生まれていなかつたかも知れない」

紅茶を少しづつ口に運びながら、彼女は寂しげに話す。

「だから……私はこの国を離れるわ。メイン家には戻れないから、この姿でも目立たないヨーロッパにでも行こうかしら。レイには私が離婚を申し入れるつもり、慰謝料とかタッブリ要求したら悪女ってマスコミに書かれるわね」

ティナはふふふと笑い、「慣れてるから、全然平気よ」と付け足した。

「そ、そんな。落ち着いて、話しあう」

「レイには優しくして貰つたわ。とつても愛してるの。傍に居たら、彼に関係を強要したり、我がまま言うと思うから……もう苦しめたくないの。あんなに苦しそうに、顔を背ける彼を見たくないのよ

舞はティナの言葉があまりに切なく、口を開くだけで声が出なかつた。

「どれほど愛し合つっていても、ほんの些細なことからすれば違ひ、離れてしまつ」こともある。判つてはいても、田の当たりにするのは辛かつた。

「」にシユアル国王が来たら、個人的事情に舞を巻き込んでしまつた、と謝罪するから、舞も素直になつて欲しい。ティナは諭すように言つ。

「ハネムーンに来たのに、嫌な思いをさせてごめんなさい」頭を下げるティナに、舞は唇を噛み締めた。

直後　　「テージ内の電気が一斉に消えたのだ！」

「な、なに？　停電？」

「ブレーカーが落ちたのかも知れないわ」

ティナが廊下の突き当たりまで行き、ブレーカーを確認するが上

下に動かしても電気が点く気配はない。

外は、一旦止んだはずのスコールが再び凄い勢いで降り始める。

「ねえ、ティナ。スコールってこんなに続くものなの？」

「い、いいえ……こんな時間まで降り続くなんて」

「コテージに到着したのが夕刻、辺りはもう真っ暗だ。舞は思わず不安になる。」

「海の近くだけど、満潮で高波が来るってことは……」

すると、ここは入り江になつており、小型のクルーザーがどうにか通り抜けられる程度の水路しか外と繋がっていないという。どんな高波も、グルリと囲んだ断崖が自然の防波堤となり、入り江にはさざ波程度の影響しかない。ましてや、このコテージが何かの被害を受けたなど、ティナは聞いたこともない、と。

ところがその時、派手に窓ガラスが割れる音が聞こえた！

「きや！」

ティナは両耳を押さえ、屈むような仕草をする。

それは、さつき舞がシャワーを借りた部屋だつた。彼女はティナを気遣いながらも、一人で部屋に飛び込む。すると、コテージのすぐ外にあつた大木の枝が折れ、窓に突き刺さつているではないか。部屋の半分に割れたガラスが飛び散り、「ゴウゴウ」と音を立て雨風が吹き込んで来る。とても女手で收拾出来そうな事態ではない。

舞は手にした携帯電話を見つめ、アンテナが立つていなことを確認して、呆然とした。

そこに、逼迫した声でティナが叫んだのだ。

「大変だわ、マイ！ 電話が繋がらないのよ。……どうしたらいいの？」

(……なんか、ちょっとヤバイかも……)

## (14) 嵐に閉ざされて

舞とティナがコテージに到着した同じ頃。

ミシュアルとレイは瑠璃宮殿に到着した所であった。

「一人とも荷物を持つて出でているということは、やはり？覚悟の家出？らしいな」

「アーリシャは君の妃に同情しただけだ。同じにするな！」

レイの言葉にミシュアルは一々不満を唱える。

「どちらにしても大した差はない」

「違う！私の下から逃げ出したとなれば……年寄り連中はいざつて離婚を口にするだろ？クアルンはこの国とは違うのだ！」

「……済まない。私自身が動搖しているようだ」

二人の間に気まずい沈黙が広がる。

直後、レイの護衛官ニック・サトウが走り寄つた。

「陛下！確認が取れました。お一人の乗つた車はフサコ様のコテージに向かつたとのこと」

レイのホッとした表情にミシュアルも胸を撫で下ろす。ところが

。

護衛官のニックは顔を強張らせたままで……「実は、問題が生じております」

アジユール島の北側にそのコテージはあった。

コテージまでは深い森を抜ける一本道で、崖に挟まれた箇所もある。森の入り口には監視棟があり、島の警察官が常駐していた。この数年、コテージを使用するのは国王夫妻のみ。彼らが滞在中は、

衛兵も警戒にあたることになつてゐる。

道中はもちろん、森の中にも随所にセンサーが取り付けられ、管理体制は万全のはずであつた。

「崖崩れ、だと……」

森の入り口にある監視棟に入り、担当者の報告を聞いた途端、ミシュアルは声を荒げた。

「まさか、二人の乗つた車が土砂に埋まつたなどと戯けたことは言つまいなつ！？」

「シーク・ミシュアル、頼むから落ち着いてくれ！ それで、コテージと連絡は取れたのか？」

「……それが、電気系統に問題が発生したのか、ルートのセンサーが反応していません。コテージとも連絡が取れず……」

担当者の青褪めた表情と震える声に、ミシュアルは眩暈を覚えていた。

舞には携帯以外に、本人も知らぬ場所にGPSを潜ませてある。盗賊団に攫われた時も、その装置が役に立つた。GPSのおかげで、早急に舞の居場所を特定することが出来たのだ。

しかし、今回ばかりは役に立ちそうにない。この狭い範囲では、居場所がコテージか土砂の中かまでは判別不能だ。しかも、GPSには生体反応までチェックする機能はついていない。

こんなことなら昨夜、「判つた、力になろう」と言えば良かつたのだ。そうすれば、舞はミシュアルに一本連絡を入れたかも知れない。いくら正しいことをしたつもりになつていっても、相手を納得させられぬなら意味がない。

ミシュアルは苛立ちを抑え切れず、スコールの中、外に飛び出し

た。

「何処に行くつもりだ！」

ふいに肩を掴まれる。思つた通り、レイだった。

「決まつておろづ。森に入るのだ。土砂の下に舞がいないことを私自身が確認する！」

「それは大丈夫だ」

「何をもつてそう断言できる。あの担当者とやらも、判らぬと言つていたではないかっ！」

スーシが水を吸い、シャツはおろか下着まで染み込んでいた。彼の体にも痛いほど感じる雨が、もし傷ついた舞の頭上にも降り注いでいるとしたら……。とても、ジッと待つてなどいられない。

「確かに連絡は取れていない。だが、コテージの電源が入ったことを確認していい。これは一人がコテージまで辿り着いたという証だ！」

「間違いないな！ 気休めなら許さんぞ！」

「気休めを言つてビうする！？ 私のティナも一緒にいるんだ！」

同じくズブ濡れになりながら、レイも堪え切れず叫んだ。ミシユアルはアズルブルーの瞳を睨みつけ、やがて、目を逸らした。

「判つた。君を信じよつ

「感謝する」

「だが、森の向こは海ではないのか？ そのコテージが海岸沿いに建つてゐるなら、高波に攫われる危険があるのでないか？」

ミシユアルの尤もな疑問に、レイは安全性と救出に向かう問題点を口にした。

「……といつわけで、海からの脅威に対してコテージは安全だ。だが、こんな長時間続くスコールは稀だと言える。おそらく、ここ数年の天候異常の一つだろうが」

コテージは元々、自家発電のシステムを採用していた。その自家発電装置の故障で電源が落ちたのだろう。しかし状況が判らない以上、一刻も早く二人を救出する必要がある。

ところが、森の中の一本道は崖崩れで使えない。さらにはこのスコールで地盤が緩み、他の場所も崩れる危険性が出て来た。この状況で迂闊に森を抜けようとするのは一次災害を招く恐れがある。

本来、コテージのある入り江には空からが一番の早道なのだ。しかし、王室へりに夜間飛行の装備はなく、軍用ヘリを使うにしてもスコールが止むまで飛べないといつ。

「ではどうするつもりだ？ 指を咥えて見ているのか。それとも、雨が止むよう神に祈るか？」

舞が土砂の中にはいないと聞き、若干の余裕が生まれたミシユアルはレイを揶揄した。

すると、レイも余裕の笑みを浮かべ……。

～\*～\*～\*～\*～

内心、無駄だよね、と思いつつ、舞はティナに傘を差しかけた。二人は土砂降りのスコールの中、コテージの裏までやつて来た。ティナが言つには、そこに自家発電機が置いてあるのだといつ。

(なんか……年季の入った建物というか、やつぱり小屋?)

ティナが「裏の小屋にあるはずよ」と言った時、?小屋?はあんまりだらう、と思つたが……謙遜じやなかつたらし!。口テージより一階分低い場所に、木で作られたまさしく、掘つ立て小屋?がある。

「何度も修繕はしているのよ。でも、コンクリートで囲んでしまつと風情がなくなるつて、レイが」

ティナは言い訳をしていたが……。

小屋の屋根は見事に吹き飛び、まるで巨大なバケツ状態になつている。発電機が水浸しではハツキリ言つて使い物にならない。

それでもティナはどつにかしよつと思つたのか、木のドアを開けようとする。

「待つて! 大量の水が飛び出して流れちゃつたら大変ですよ。諦めましょ!」

「でも……電気がないと連絡が取れないわ。公用車で来ていたら無線を積んでるんだけど」

公用車を無断拝借したら、後々問題が大きくなるかも知れない。舞がそう言つて、自分が運転しやすい軽四を選んだのだ。

とはいへ、このスコールの中、万に一つも海まで流されてしまつたら洒落にならない。アズウォルドのビーチに憧れて、泳ぎたいと思つたのは確かだ。しかし、この状況で海に放り込まれるのは勘弁して欲しい。

「とりあえず、口テージの中に戻りましょ! いつにう時に動くのつて危険ですよ。着替えて救助を待ちましょ! 雨が止んだら、こちから車で引き返してもいいし」

その直後、舞とティナの耳にギシギシと妙な音が聞こえてきた。舞が周囲を見回すと、どうやら自家発電機の置かれた小屋から聞こえてくる。

「ね、え……ティナ。コレって何の音?」

「判らないわ。マイ、急いで戻りましょ」

ティナに急かされ、舞がコテージに向かう階段に足を掛けた時だつた。

二人の背後で掘つ立て小屋の壁が、内圧に耐え切れなくなつたようすにメリメリと壊れ始め 次の瞬間、水の塊が竜のようになり、二人に襲い掛かった!

## (1-5) パリンセスの願い

( 正気の沙汰ではない )

ミシュアルは巡洋艦ハイドレンジアの上から、荒れ狂う大海原を見つめて呟いた。

彼らは巡洋艦に乗り、入り江と外海を隔てた岸壁が見える位置まで来ていた。これ以上は近づけないと言い、小型のモーターボートが下ろされる。レイたちはそのモーターボートで入り江に繋がる回廊付近まで行くと言つ。

ミシュアルの目にそれは、どう考へてもまともな手段とは思えなかつた。

「レイ……多くを尋ねたくはないが……。まさか、その小船でこの荒波を漕いで行くつもりではあるまいな？」

「小船とは失敬だな。着岸用のモーターボートだ。十人乗りでどれだけ波を被つても沈まない設計になっている」

そう言いながら、レイを含む十名が潜水服に着替えボーターボートに乗り込む準備を始める。

「待て。国王自ら行くつもりか？ なんといつ危険な真似を どうして誰も止めぬ！」

「当たり前だ。私の潜水技術は国内トップクラスだぞ。それに我々は、上陸作戦だけならネイビーシールズにも劣らない自信がある」呆れるミシュアルとは逆に、レイをはじめ潜水チームの面々は余裕だ。

昼間に見た美しい紺碧の海とは違い、海と空の区別すらつかない真つ暗闇である。ミシュアルにしてみれば、海中を行くくらいなら

多少地面が危うくとも森の中を進んだほうがマシだと思える。

だが、これが海洋の民というものなのだろう。ミシュアルたちが自らを砂漠の民と称するようだ。アリス。

納得できないまでも、理解しようとすると彼にレイが言った。

「シーカ・ミシュアル。どれほど遅くなつても、あと数時間でこの雨は止む。このハイドレンジアにはヘリが搭載してある。止み次第、君はヘリで入り江のコテージに向かってくれ」

レイの言つことは判る。だがミシュアルより先に、彼らが舞の元に駆けつけるのを、黙つて見てゐるわけにはいかないのだ。そして同じ国王であるレイに出来ることを、出来ないと口にするのは恥であった。

「馬鹿を申すなつ！ アーリシャを救つ権利は私のものだ。他の誰にも譲るつもりはない。わあ、私の分の潜水服を用意してもらひおつ！」

「いや、それは……」

口籠もるレイを無視して、体格の似た男を捕まると「その潜水服を私に寄越すのだ」と奪い取る。

およそ海軍の兵士かプロのダイバーと言つた辺りだ。一国の国王に命じられては？ ノー？ とは言えない。

「（）は砂漠ではないんだ、ミシュアル！ 頼むから、余計な時間を取りせないでくれ。君の妻の顔を、私以外の男に見せないと約束する」

「無駄な説得に余計な時間取るものではない。さあ、案内いたせミシュアルはさつさとモーターボートに乗り込もうとする。

その後ろを、青い顔をしたレイが追いかけてきた。

「これはスキューバダイビングではないんだ。エアポンベを持たず、私たちはフリーで潜る。瓶に万が一のことがあれば、国際問題に発展することくらい判るだろ?」

「つむせこ男だ。置いていっても同じ……と」

不意に体が宙に浮いた。

見事に足元を掬われ、氣付いた時には豪雨の降り注ぐ海中に叩き落とされていたのである。

ミシュアルが海面に顔を出した時、全員がボートに乗り込みエンジンをかけていた。そして、彼の真横に黒い浮き輪が投げ込まれ、数人の潜水士がミシュアル救助に飛び込んでくる。

いざとなれば手段を選ばないレイ国王のやり口で、巡洋艦の乗組員たちのほうが真っ青だ。

「　　レイ！　貴様——！」

ミシュアルは琥珀色の瞳に怒りの炎を滾らせ、レイを睨む。

「足手まといは御免蒙る。砂漠の王に出来はない。悪く思つな」

レイの最後の言葉は、ミシュアルの血尊心を強烈に揺さぶった。

～\*～\*～\*～\*～

嵐の海で国王たちが一触即発の事態を招いているなど、この時の舞には想像も出来ない。

いや、それどころではなかつたのである。

「ふぎやーつー！」

舞は水圧によりコテージのまつに吹き飛ばされた。可愛らしく叫びたいところだが、とても叫び声を選んでいる余裕はない。砂漠の上を逃げまくるのは大変だった。ジャンビーアを向けられ、殺されそうになったこともある。麻袋を被せられて荷物のように運ばれた時は、本当に売られるのかと思ったほどだ。

思えばここ数ヶ月、その前の一十年間とは比べ物にならないほど、貴重な経験を積んできた。

だが今回は……水に弾き飛ばされ、流されそうになつたのだ。これも出来ればやりたくない？ 貴重な経験？ の一つだろ？

（何でつー？ ハネムーンに来ただけなのに。何でこいつなるのよつー？）

ミシューアル国王がいたら、『お前が勝手に動くからだ！』と怒鳴られるのは目に見えている。

それでも、舞はここに彼がいないことが、例えよつもなく不安だつた。

（わたしがこんな目に遭つてゐるのに……なんでアルつてば、助けて来てくれないのつー？）

まさか舞たちの通つて來た道が、直後に崖崩れで通行不可になつたとは夢にも思わない。

すぐ後ろを追いかけて來てくれる信じていた。怒られるかも知れないけど、ティナを一人きりには出来ないという、舞の気持ちを判つてくれると信じたかったのだ。

でも、來てくれないつてことは……。

(ひょっとして、わたし、見捨てられた？)

水に揉みくちゃにされながら、悪い想像ばかりが頭をよぎる。舞は地面を這うようにしてコテージの横に出た。どうにか水の拘束から逃れ、ホッと息を吐く。その時だ、自分のすぐ後ろにいたティナのことを思い出し、振り返った！

「……ティナ？」

真後ろにいたはずの彼女の姿がない。周囲をキヨロキヨロ見回すが、舞より先に逃げられたはずがないのだ。と、いうことは……。

「ティナ！ ねえ……返事してよ。やだ、何でいないの？ ドコに行つたのよ……ティナ……ティナーッ！」

恐る恐る、舞は這い上がってきた方に戻る。

雨の激しさは変わらないが、小屋の壁を突き破つて吹き出した水は少し弱まっていた。数秒間躊躇つた後、舞は階段を下り始める。

ひょっとしたら、あの水圧でティナは木か壁にぶつかり、意識がないのかも知れない。

その時はすぐにコテージに運び込み、無事な方のベッドに寝させて、自分が助けを呼びに行かないと。舞は気丈にも良い方向に考えるが。

だけど、もし、周囲を探してもいなかつたら？ もし、海に流されていたらとしたら？

（どうしよう。わたし、どうしたらいいの？ アル……アル、お願  
い、一生のお願い。一度と我がまま言わないうから……助けに来て。  
ティナを助けて）

舞は胸の中で懸命にリリカル国王の名を呼び続けた。

背後から襲い掛かつた水に、<sup>から</sup>搦め捕られた感じだった。

声を上げる間もなく、ティナは流されたのだ。海に落ちたことはあっても、流されたことはない。はたと気付いた時には、小型クルーザーを係留した桟橋の辺りまで流されていた。

（「）を越えたら海に落ちてしまう。なんとしても踏み止まらないと……）

ティナは手を伸ばし、桟橋の手すりに必死で掴まる。

スコールの中、海に叩き込まれて、泳いで戻つて来れるほどティナは泳ぎが得意ではなかった。せっかく常夏の国にいるのだから、とレイに連れられ何度もこの入り江で泳いだが……。結局、ティナの運動能力がそれほど高くない、と証明しただけだった。

（レイは何でも出来るのに。私は……）

そんなことを考え始めると落ち込むばかりだ。

ティナにとつてレイは、掛け値なしの王子様であった。父という魔王の呪いから解き放ってくれた英雄と言うべきか。それにレイは、国民からはもちろん、諸外国においても、身近な王宮スタッフからも慕われている。そんな素晴らしい魔王の王妃として、この一年間、ティナはただ隣に立つていてことしか出来なかつた。

チカラの言う通り、レイは子供が大好きだ。兄弟は全て母親違いで、彼は家族らしい家族を知らない。何の取り得もないティナに出来ること、それは一日も早くレイに家族を作つてあげることだけ……。

(それだけ、だったの。)

胸に熱いものが込み上げ 意識が違うことに向いた瞬間、ティナの手は手すりから離れていた！

真っ暗な海中に体が沈む。

マキシ丈のスカートが足に絡み、ティナの自由を奪つた。こんなことなら二度にしておけば良かった、と思つても後の祭りだ。

(私はこのまま死ぬのかしら。)

もう一度、レイに逢つておきたかった。

でも、ティナが死ねばレイは心置きなく再婚できる。ティナも、わざと悪女のふりをしなくても済む。これで皆が幸せになれるのな、う……。

ティナが無駄な抵抗を止め、覚悟を決めた時だった。

背後から抱き締められ、引っ張り上げられる。それは一年前、アズルブルーの海で味わったものと同じ感じがして。

海面に顔を出した瞬間、同じ叱声が聞こえた。

「いい加減にしてくれないか、ティナ？ 君はよほどポセイドンが恋しいようだが……もう、私の妻なんだぞ」

目の前にレイがいる。

神様がティナの願いを聞き届けて、一年前の幻を見させて下さつ

たのだ。ティナはそう思った。

「ああ……神様、ありがとうございます。もう一度、レイに逢えて……私は思い残すことはありません」

「ティナ、ふざけている場合じゃない！ アーライシャ殿は何処だ！？」

その言葉にティナはハッとした。

小屋から吹き出した水は、ひょっとして舞をも押し流したのだろうか？ ティナと同じように、この入り江に放り込まれたのだとしたら……。

「レイ……ああ、どうしましょ。マイは私の前に居たの。私は流されてしまつて……マイがどうなつたのか判らないわ」

ティナの言葉に、レイは頭を伏せ低い声で呟いた。

「それは不味いな。君の金髪は暗闇に光つて見えた。だが、アーライシャ殿の髪だと……」

夜の海で黒髪など見つけられるはずがない。それに、ティナはオフホワイトの明るい色のワンピースを着ているが、舞が着ていたのは彩度の低い色合いで多く使われたエスニック柄。

ティナはそのこともレイに伝えた。

「どうらじしても、君をコテージに連れて行ってからだ」

そう言つと岸まで上がり、レイはティナを抱き上げようとする。

「私はいいの。お願ひ、マイを探して下さい。私はもう一度小屋の辺りを」

「いいから、黙つて言つ通りにするんだつ！」

それは聞き慣れないレイの怒声であった。

ティナは彼に抱き上げられ、緊張した面持ちでレイの顔を注視する。

「一国の王妃の身に何かあれば、ただでは済まないんだ。たとえ事故であれ、クアルン王妃が我が国で命を落とすようなことにもなれば……」

レイの声は深刻極まりないものであった。

彼の懸念する事態になれば、アズウォルドのような小国にとつて国際的イメージの低下は免れない。テロにより国王を殺された事件が掘り起こされ、再び危険な国と呼ばれるだろう。

それに、あのミシユアル国王が許すはずがない。

無理矢理ではないにせよ、舞を入り江のコテージまで連れて來たのはティナだ。アクトシティ事故が異常気象により長時間降り続ぐスコールのせい、なんて言い訳も甚だしい。

「『』めんなさい。謝つて済むことじやないけれど……マイに何があった時は、私が責任を取ります」

「責任？ 何をどうするつもりだ？」

「判らないけど……私がマイを連れ出したのだから。私も死んだら、きつとシーク・ミシユアルだつてお許し」

「馬鹿を言うな！ そんなこと……万に一つ、クアルンと戦争になつたとしても、私は君を差し出すつもりはない」

レイの言葉にティナは目を見開いた。まさか、国王としての立場が第一の彼の口から、そんな台詞を聞くとは思つてもいなかつたからだ。

ティナは、それどころではない、と思ひながらも、つい気になつて尋ねてしまつ。

「で、でも……私がいなくなれば、あなたは再婚出来るのよ。私たちいな役立たずの女のために、この国を窮地に陥れるような真似だけは出来ないわ！」

すると、レイは「テージの前でティナを下ろし、濡れた髪をかき上げた。

「この国も国民も、私は全力で守るつもりだ。だがティナ、君は違う。君だけは、私の命を盾にしても守る覚悟でいる。誓つて言うが、ローラの子供の父親は私じゃない。君を裏切ったと思われるのには心外だ」

「でも……でも、彼女は一月の終わりにアズウォルドに来ていたわ」「一月の終わりに我が国について、妊娠五ヶ月の女性が何人いると思うんだ？」

「二人で、会つていたって、タブロイド紙に……」  
ティナの声がだんだん小さくなる。

「映画の撮影現場を視察して、挨拶をしただけだ。それに、私が会うだけで女性を妊娠させられるような男じゃないのは、君が一番知つているはずだが」

レイの返事にティナは再び声を上げた。

「そ、そうよ！ 判つているもの。あなたがもう、私に興味がないつてことは……だから」

「そうじゃない！」

レイは一旦言葉を切ると、ティナの頬に手を添えた。  
「アーリシャ殿の捜索に私も加わる。君はコテージから一歩も出るんじゃない。説明はその後だ。……いいね」  
軽く口づけられ、ティナも頷くよりほかない。

「マイを助けて……お願いだから。マイが無事なら、私

「えーっと？ わたしがどうかした？」

突然、コテージの中から声が聞こえ……そこに立っていたのは、

クアルン王国アーライシャ妃、もとい、舞であった。

## (1-7) ロマンスに向かない男

さすがの舞でも、まだ水が噴き出している小屋には近寄れなかつた。

「トージの正面に回り、入り江の砂浜方向を手指すが……。

(どこからが海か判らないじゃない!)

夜の海と言つのは本当に真つ暗だ。ましてや、海面を叩く雨音が激しくて、どんな気配も感じ取ることが出来ない。

無駄にウロウロするくらいなら、車を走らせて助けを呼びに行こう。舞はそう考えた。

森の入り口には警官が立つていて、舞たちは引き止められたのだ。乗っているのがティナと判り、「この後に陛下たちもお見えになるのよ」と彼女が言つと、警官たちは最敬礼で通してくれた。

(アソコまで行けば、きっと警官が助けてくれるわ。大勢で探したほうが絶対にマシよ!)

舞はティナのことを思つて泣きそうになる。

でも、呑気に泣いている場合ではないのだ。パンパン顔を叩くと、邪魔なスカートを腰の辺りまでたくし上げ、裾をウエストに押し込む。そのまま、コテージに駆け戻った。

窓が割れ、雨風が吹き込む部屋に飛び込み、バッグの中を床にぶちまけて車のキーを探す。

(何でないのよ……絶対この中に入れたの……)

舞が半泣きでぶつぶつ泣いていると、ふいに話し声が聞こえたのだ。

（え？ テイナ？ でも、男の人の声が聞こえるよつな……）

走つて出て行こうとした時、ティナが舞を呼ぶ声ではなく、男性の話し声が聞こえたので少し迷つた。どうしてここに男性がいるのだろう？ まさか……ミシユアル国王たち？ それともレスキュー隊だろうか？

まだ数ヶ月とはいって、クアルン王妃の自覚が芽生えつつある舞である。不特定多数の男性がいる場所に、アバヤやヒジヤブも身に着けず出るわけにはいかない。

そんな気持ちで恐る恐る覗き込めば……。

コテージの入り口にティナとレイ国王が立ち、悲壮感漂つ顔で見つめ合いキスを交わしている。

舞の場所からでは、二人が何を言つてゐるのかよく聞こえず……。

（今、出て行つたら、ひょっとしてお邪魔？）

悶々と悩んでいると、ティナが「マイ」の名を呼んでいることこゝ気付き、思わず声を掛けたのだった。

「マイ！ 良かつた……マイ、無事だったのね

「ティナも海に流されたんじゃなかつたんだ！ 良かつたあ。本当に良かった

駆け寄るティナと抱き合ひながらお互いの無事を確認する。

ティナも舞と同じ心配をしていたらしい。だが、ティナのほうは本当に海に落ち、冗談では済まなくなるところだつたのだ。

ティナは夜田にも頬を染めながら、「レイがね……助けてくれたの」と小さな声で言った。

「さうすがー！ ヒロインのピンチに駆け付けてこそヒーローよね！」

と言いつつ、自分のヒーローはどなつたのだろう、と考える。

「アーリシャ殿が無事で何よりです」

レイ国王はそう言つと浜辺に向かって歩いた。海から上がってく  
る潜水服を着たダイバーたちに、何事か命じ始める。

舞は濡れるのも構わず、

「レイ陛下！ あの、アルは……ミシュアル陛下はどうぞ」

レイ国王にミシュアル国王のことを尋ねようとした。

しかし、彼は慌てた様子で舞をコテージに押し戻そうとする。

「アーリシャ殿、こちらに出てきてはいけない。妻のそんな姿を他の男が目にしたことを知れば、彼に決闘を申し込まれかねない」舞は丸出しになつて太腿に気付くと、慌てふためきスカートの裾を下ろす。

レイ国王は海のほうに視線を向けながら、

「シーク・ミシュアルは巡洋艦で待機して貢つています。スコールが止み次第、ヘリで来るはず」

そこで彼の言葉が止まり、紺碧の瞳を見開いた。

舞も自然にそちらに視線が移る。

すると、海から上がつてくる大きな影が一つ。他の皆と同じ鮮やかなオレンジの潜水服を着込んでいるが、あれは……。

「アル？ アル、アルッ！」

ミシコアル国王は来てくれた。

やつぱり、舞にとつて王子様は彼しかいない。そんな思いを込め、舞はミシコアル国王の名前を叫びながら浜辺に向かつて走る。

（何て言おう……やつぱり、『ゴメンなさい、かな？ それとも、愛してゐる、のほづが）

色々な感情が胸の中を錯綜した。

そして、抱きつこうと思つた瞬間 ミシコアル国王は舞の横を大股で駆け抜けたのだ！

「ああ、ここまで泳いできてやつたぞ！ レイ、この私が？ 足手まとい？ だと言つた言葉を取り消せつ！」

舞には何のことかサッパリ判らない。しかし、ミシコアル国王に向ひひで、レイ国王は水の滴る前髪をかき上げながら、「ああ、判つた。前言を撤回する。君は素晴らしい勇者だ」困つたように笑つたのだった。

～\*～\*～\*～\*～

「まつたく。他国で面倒を起すなど言つたであつて。舞、少しは反省してくるのか？」

「……」

約一時間後、嘘のよつにスコールが止んだ星空の下、舞はミシコアル国王とへりに乗つていた。

「テージに避難していた時は他の兵士やレイ国王たちが居た為、ひたすら舞を隠すようにしていたが……。二人に一旦別れを告げ、へりで入り江を離れた途端、ミシユアル国王は小言を言い始めた。

舞が崖崩れのことを聞いたのは「テージに避難していた時だ。

携帯も固定電話も繋がらず、崖崩れでたつた一つの道路は通行できず、地盤の状態が悪くて森の中に入る出来なかつたという。追いかけて来なかつたのではなく、来れなかつたと知り、舞は心中でホツと息を吐く。

スコールのせいで軍用へりすら飛ばせず、レイ国王は海軍の巡洋艦と潜水チームを呼び寄せた。一人の王妃の安否確認の為、入り江と外海を繋ぐ狭い回廊を通り抜け、上陸作戦に出たのだった。

その作戦に周囲の制止も振り切り、ミシユアル国王が同行してくれたとなれば、本来なら感激ものだろう。

「舞、聞いておるのか？　返事をいたせつ！」

苛立たしげなその声に、舞は背中を向けた。

（何よ……どうせアルにとつて一番は国王としての名誉で、わたしはオマケなんじゃない！）

レイ国王はティナを抱き締めていた。

浮氣騒動は？　離婚の件はどうなつたの？　とわざわざ聞くのは野暮と言つものだ。二人は朝までコテージに残り、その後、本島に戻ると言つていた。ティナは舞を見送りながら、

「クアルンと戦争になつても私を守るつて言つてくれたの。だから……私、レイのことを信じるわ。何があつても、もし子供が授からなくても、愛は変わらないって

ピンチに颶爽と現れて、女が一番聞きたい言葉をくれる。ティナが全部、水。今回の場合、海に流しても当然だと思つ。だがミシコアル国王に言わせれば……。

「あのレイが、国際的にダメージを受けるような問題を起こすはずがなかろひ。全く、女というものは、なんと短絡的な……」

そりゃせうだらひ。舞にだつてそれくらいのことは判る。重要なのは、そつ言つて欲しいのであって、本当に戦争を起こして欲しい訳じやない。

（なんでアルには、そつこう女心が判んないのよつー）

舞が黙り込んでいると、ミシコアル国王はブツブツ言つ始めた。

「それほどまでに、レイに遅れを取つたことを怒つてゐるのか？ 昨夜ほどの激しい雨に打たれたのは、人生で初めての経験だ。それに、海で泳いだことも数回しかない。他国の軍を勝手に動かすなど出来ぬし……」

その言葉を聞き、舞は振り返るなりミシコアル国王に抱きついた。ちょっとだけヘリが揺れてビックリしたが……操縦士からクレームは出なかつた。

「最初に名前を呼んで欲しかつたのつー、無事でよかつた……死ぬほど心配したつて、嘘でもいいから言つて欲しかつた。ただ、それだけ」

「馬鹿者！ 心配じりひで済むわけがなかろひ。舞、今後はせめて、私の手が届く範囲で窮地に陥るよつこしてくくれぬか？」

はい、と答えるのも間違っている気がして……舞は小さく頷き、  
キスで応えたのだった。

コテージの中は静まり返っていた。

雨は降り出した時と同じく突然止み、迎えに来たヘリがミシコアル国王と舞を乗せて飛び立つた。リビングにいた海軍の兵士や潜水士たちも別のヘリで引き上げる。代わりにやつて来たのは護衛官や衛兵だ。

彼らを伴い、レイは崖崩れの様子を確認に向かった。

(あの凄い音が崖崩れだつたなんて……)

舞と一緒に話を聞き、ティナは背筋が寒くなる。  
もし舞を巻き込んでいたら、とんでもない事態になるところだつた。舞の好意に甘えて、年長者でありながら瑠璃宮殿を飛び出すなんて……。王妃にあるまじき行いだと、責められても文句は言えない。

ティナは無事であつたほうの部屋に独り佇んでいた。ベッドの端に腰掛け、テーブルに置かれた電池式ランタンをジッと見つめる。  
レイはティナの身を案じて、スコールの降り注ぐ海を泳いできてくれた。

何でもない」とのよつて言つていたが、本当は国王として許されぬことだろう。その証拠に、巡洋艦の出動履歴を消し、公表しないよつて密かに命じていた。おそらく、サトウ補佐官にも報告しないつもりなのだ。

それにこの騒動 자체も、レイは自分の責任だと軍や警察関係者に

告げていた。

ミシユアル国王と舞を「テージに招いたのは自分で、ティナに舞を連れて先に行くよう命じたのも自分である、と。

夫婦生活がなくなつたことと、ローラ・ウイリアムズの件は別なのだ。

レイは浮氣などしない男性だから、ティナ以外の誰かと関係したのなら、それは本気に違いない。だが一年前、どれほどティナが誘惑しても、レイが落ちることはなかつた。初めてティナを抱いたのは、正式に結婚した後だつたのだから。もし他の誰かを愛したなら、ティナと離婚するほうが先だらう。

レイは十代の少年のように、自制心を失つて女性に飛び掛かるような真似はしない。

（愛をされていたのに、こんな愚かなことをしてしまつて……。呆れて、今度こそ捨てられてしまうかも知れないわ）

オレンジ色のランタンの灯りは、しだいにゆらゆらと揺らめいた。それは、ティナの涙のせいだつた。

「また、泣かせてしまつたようだね。長い間、独りにして済まない」

ドアが開くと同時に、レイの声が聞こえた。

ティナは慌てて手の平で頬を拭い、顔を上げる。

「いいえ。あの……私たちほりつまで」

「さあ、こつまでかな」

「……？」

レイの言葉の意味が判らず、ティナは首を捻る。

「無線で呼ぶまで『テージには近づくな、と命じてきた。』」でな

ら、正直に話せるような気がしてね

「……正直……話つて」

胸の奥がざわめき、ティナの涙腺は一気に緩んだ。

「ごめんなさい……本当に、ごめんなさい。でも今は信じてるわ……あなたのこと。もう、遅いかも知れないけれど、私はあなたの妻でいたい……」

手で口元を覆い、ティナはしゃくりを上げながら気持ちを伝えた。「愛してるの……」二年前と変わらず、ううん、それ以上に。相応しい妻でいたかっただけなの。みんなに、そう思つて欲しかつた。それだけだったのよ。あなたが子供は要らないと言つなら、私も要らない。もっと、魅力的な……あなたが好む女性になるから……お願い、レイ

直後、ティナはレイの胸に抱き締められていた。

「マイ・エンジェル それ以上魅力的になつても、私の愛はこれが精一杯だ」

レイは柔らかい笑顔で彼女の顔を覗き込み、甘い声で囁いた。

「そ、そんな……だつて……」

二ヶ月も妻として愛して貰えないのに。ティナはその言葉を飲み込む。

すると、レイは彼女の隣に座つて優しく肩を抱き寄せ、信じられない言葉を口にしたのだ。

「ティナ……君の？妊娠しなければならない？という、同じプレッシャーを私も感じていた。素直に血の繋がった家族が欲しいという気持ちと、君に子供を与えてやりたいという願い。努力が結果に直結しないのは初めての経験でね。どうすればいいのか判らなくなり

……

？抱かなかつた？のではなく？抱けなかつた？彼は悲しそうに告白する。

「どうして？ どうして言つてくれなかつたの？」

話してくれていたら、こんなに悩むことはなかつたのに、とティナは思う。

だが、レイは伝えたという。そう言われたら、最初の数回『駄目だな、疲れているらしい』『今日は無理みたいだ』そんな言葉を口にしていた。

ティナは自分の中に必死で、レイの表情をちゃんと見ていいなかつたことに気付く。きっと今と同じように、アズルブルーの瞳が悲しみに沈んでいたはずなのに。

「『めん……なさい。最低だわ、自分のことしか見えてなかつたの……』

「いや、君に伝わつてないことはすぐに判つたんだ。何が駄目なのがハッキリ言えればよかつたんだが……私にも男の見栄があつて言葉には出来なかつた」

女性より男性のほうが纖細だと聞いたことがある。

ティナは自分が不幸だと嘆くあまり、思いやりの心を忘れてしまつていたのだ。

「この間もそうだ。シーク・ミシュアルは何においても自信に満ち溢れている。彼ならこんな情けないことには……そう思うと、？種付け？なんて酷い言葉で君を傷つけた。悪かった……私を許してくれるかい？」

もう、謝る言葉すら口に出て来ない。

ティナは黙つて頷くだけだった。

レイが不妊検査を拒んだ理由もティナの為であった。

彼は自分がアズル王室唯一の王子となつた時、生殖能力を確認す

るため一通りの検査を受けていた。当時、庶子に王位継承は認められておらず、万一小の時は法改正が必要となるからだ。

そして、自分には問題がないと知りながら、彼は一言も口にしなかつた。

軽い不妊治療で済むような問題であればいいが……。ついでなければ、ティナが離れて行くことが怖かった、とレイは言った。

「でもティナ、君がそれほど望むなら検査を受けてみればいい。私も一緒に心理セラピーを受けるのも悪くない。そう思つたんだが……」

「もういいの！ もう、そんなことどうでもいいの。傷つけてごめんなさい。私、あなたの傍に居られるなら、何も要らないと思ってこの国に来たのに。一番大事なあなたを踏みつけにしてたなんて」「いや、ティナ、そうじゃなくて」

「もう私の為なんて思わないで！ お願いだから、あなたの為に、私にも出来ることを教えて」

ティナは真剣に言つたつもりだが、予想に反してレイは声を立て笑い始めた。

「レイ？ あの……」

「君は本当に早とちりで、人の話を聞かないな」

そう言つとティナを抱き上げ、膝の上に横抱きにする。そのまま強く抱き締められ、激しいキスに唇を開かれた。先ほどの軽い口づけとは違い、スコールのような激しさでレイは彼女の唇を奪う。唇が離れた瞬間、ティナはあることに気付き真っ赤になつた。

「う、うそ、ばっかり……だつて、あの」

「駄目なままの方が良かつたかい？」

「そうじゃ……ないわ……でも」

ヒップの下に硬いものが当たつている。レイのよつと元誇り高い男性が、言い訳にあんな嘘をつくとは思えない。

「欲望に忠実で、底抜けに楽しそうな新婚カップルを見ていて思い出したんだ。私たちは一年以上、妊娠を目的としたセックスばかりだったね。今はただ、君と楽しみたい」

誘惑の言葉を聞き終える前に、ティナはレイの唇をキスで塞いだ。

(19) 異度も變わらひやこへ R (記書)

性描写があります、R-15でお願いします。

レイの反応を感じ取った瞬間、我慢できなくなつたのはティナのほうであった。

着替えたばかりのシャツを彼女自身の手で脱がせる。彼の言う通り、妊娠のためじゃないセックスなんて何ヶ月ぶりだらう。純粹に彼を欲しがつてゐる自分に、ティナは驚いていた。

そして、久しぶりに触れたレイの体だつた。

無敵の逞しさではないが、均整の取れた見事なボディラインである。適度に泳いでいるせいだらう。規則正しい生活を好むレイなら、きっと十年後もこの体を維持してゐるに違いない。

ティナも、絶対に手は抜けない、と決意を新たにしつつ……。

「何を焦つてゐるんだい？ クリスティーナ」

上から涼やかな声が降つてくる。

顔を上げると、少し湿つて黒っぽく見える髪を揺らしながらレイは笑つてゐた。ランタンの灯りに照らされ、アズルブルーの瞳がきらきら光る。

レイは公式の席以外では、ティナを誘うときだけ『クリスティーナ』と呼ぶのだ。

ティナを膝から下ろすと、彼は上半身をはだけたまま、ベッドの中央に横たわつた。

「焦らずに全てを脱いで、ここまでおいで、マイ・スワイート

悪戯つ子のようにレイはウインクしてゐる。

「それつて……私にストリップをしろつてことなの、レイ？」

「ストリップかい？ それはいいね。ポールがないのが残念だ」

レイの返事にティナは口を尖らせ、

「国王陛下はポールダンスがお好きなのね。皆に言つぶらしゅやおうかしり」「

「では、毎夜、王妃が楽しませてくれる、と答えておいで

「私はそんなことしません！」

背後でクスクス笑いが聞こえていたが、ティナが脱ぎ始めるとピタリと止んだ。

彼女はレイに背中を向けたまま、袖つきのシンプルなワンピースタイプの部屋着を脱ぐ。そして下着も順に外していく。ショーツを足の先から外した直後、後ろから抱き上げられベッドに押さえ込まれた。

レイはすでに裸である。

情熱的なキスの嵐に、ティナはあつという間に訳が判らなくなつた。白い磁器のような肌は見る間に紅潮して熱を帯び、息が上がる。彼の唇も指先も……まるで魔法のようだ。激しく揺さぶられ、ふいに止められ、気が付くと啼くよつた声でティナからねだつてしまつ。

「ティナ……私のクリスティーナ。いつまでも、私だけの天使でいて欲しい」「好きよ、レイ。あなたに?クリスティーナ?と呼ばれるのが凄く好き」「いつも呼ばうか?」「

「それは……だめ。だって」

背筋がゾクリとして、しだいに下腹部が火照つてくる……公務中にそんな風になつたら、想像するだけで恥ずかしい。

「ああ、なるほど」

レイはティナを背後から貫きながら、納得したよつに囁いた。「ここがこんな風になるのなら……それは恥ずかしいね、クリスティーナ」「

「やだ……あつん、もう……レイつたら

「なんだい、クリスティーナ？ もつと、激しく動いて欲しいのかな」

ティナは愛する人に組み伏せられ、快樂の奔流に飲み込まれる。

「愛してる。君を愛しているよ。どんな未来も、一人で乗り越えて行こわ」

数え切れない悦びの果てに、レイのそんな言葉を聞きながら……  
ティナは幸福の海を漂い、眠りについた。

～\*～\*～\*～\*～

舞が目を覚ました時、異常なスコールが嘘みたいな晴天だつた。  
太陽は中空にきている。記憶があるのはヘリの中で、ミシュアル  
国王にキスしたところまで……。

（まあ、女心とか……。全然計算しないのがアルのいい所だし、ね）

あれがレイ国王だつたら、まず舞を抱き締めて無事で良かつた、  
とか言ってから文句を言つだらう。本当はどうちが一番か微妙でも、  
君が一番、と答えられる人だと思う。そのほうが嬉しいし、女とし  
ても気分がいい。

でも、ホントは違うんだろうな、と思えてしまつてことは……。

（わたくしで、やっぱりアルが好きなんだ）

と、再確認した。

そういうレイ国王はズルイよつた気がするのだ。朴念仁で無神経でもミシユアル国王のほうが誠実で嘘がないように感じる。舞はそんなことを考えつつ周囲を見回した。

彼女が寝かされていたのは天蓋つきのベッドである。

だが、王宮にあるようなゴージャスなものではない。シンプルな木枠のベッドで、天蓋に掛けられたレースも……例えは悪いが蚊帳かやのような印象だ。

それをぐぐり抜け、舞は素足で床に下り立つた。

(「…………」)

アジユール島の瑠璃宮殿か、本島の王宮に戻るのだらう、と思つていた。しかし……。

その部屋は見たことのない内装だった。宮殿やホテルの一室といふより、平屋のコテージに近い。庭が見える窓はフルオープンでそこから出入りするらしい。庭にはヤシの木が見え、その向こうにビルがある。でも、反対側の大きめの窓から見える景色は……紺碧の海！

「お田代めでしょうか？」

背後から声を掛けられ、飛び上がるほどビックリした。

「あ、申し訳ございません、アーライシャ妃殿下。わたくしは当リゾート・スパの女性バトラー、クロエ・アディソンと申します」

長い黒髪を編み込みでビシッと整え、さらにアップにしていく。ほつれそうな部分はピンで留める、といつも入れようだ。制服なのかタキシードのようなスーツを着て、細身のズボンが凄くカッコいい。

王宮で出会つたレディ・アンナと同世代かな、と舞は想像した。

「えつと、ここは……リゾート・SPA？ あのバトラーって」

「ここは国内で最も美しい砂浜があると言われる、セルリアン島でござります。リゾートホテルが数多く並び、そのほとんどにヘリポートが設置され、中でも当リゾートでは観光用の飛行艇もご利用いただけます」

セルリアン島は王国内のほぼ中央に位置する島だった。

本島やアジュール島近くの海より、少し碧の掛かつた優しいセルリアンブルーの海。肌理きめの細かいサラサラの砂浜と合わせて、観光客に人気の島だという。

そしてこの国立リゾート・SPAは全室スイート仕様で、さらに、ヴィラがあつた。上流階級を意識して、全てのヴィラにバトラーが置かれている。滞在中、客は主人となり『旦那様』『奥様』と呼ばれる。ほとんどのことをバトラーに頼むようになっていて、命令されなくとも、主人が過ごしやすいよう配慮するのが仕事らしい。

このバトラーは男性が多い。だが、女性だけで過ごす場合、女性バトラーを希望されることもあるためクロエの他に一人の女性バトラーがいるという。

「この度、ミシユアル国王陛下、アーライシャ妃殿下の『滞在に合わせまして、全室貸切になつております。妃殿下がどちらに行かれましても、館内は全て女性の従業員のみでござりますので、『安心下さいませ。』この下に見えますプライベートビーチも同様でござります』

クロエはにっこり笑つて、綺麗な日本語で答えてくれた。

一番人気の島の国立リゾートを貸切なんて……相変わらず、ミシユアル国王のやることは桁違つた。多分、舞の？憧れのビーチサイ

ド物語?を叶えようとしてくれたのだろう。

「あ、あの……陸トはだちりこ?」

「はい。プライベートビーチに向かわれました」

舞は大きめの窓からビーチに目をやる。

人影は見えないが、木で出来た階段を見つけ……舞はヴィラを飛び出した。

(20) 普通は風のあとで R (前書き)

性描写があります、R1-5でお願いします。

観光用パンフレットの宣伝文句に載つていそうな、本物の白いサラサラの砂浜に舞は足を下ろした。ビーチサンダルを履いているので足の裏は熱くない。

広いビーチでどうやつてミシュアル国王を探そう、と悩んでいたが杞憂に終わつた。

白い砂浜のほぼ中央、海を睨むようにミシュアル国王が立つっていた。

それも随分久しぶりに見た、真っ白のトーブ姿である。同じく白のグトラを被り、黒のイガールで留めていた。トーブが潮風にはためく。その姿は？砂浜に立つシーク？とでもタイトルがつきそうな不思議な光景であった。

舞は生成りのワンピース姿だ。

他には……なんとショーツ一枚しか身につけていない。ノーブラで素足にサンダルなんて、クアルンの歴史上、ありえないほどラフな格好の王妃かも知れない。

「えつと……アルーツ！」

ちょっと離れた距離で舞はミシュアル国王に向かつて手を振つた。勢いをつけたまま彼に駆け寄るが、舞は抱きついていいのかどうか直前で悩む。

次の瞬間 ミシュアル国王の手が舞のウエストを捉えた。そのまま一気に抱き上げ、ギュッと抱き締める。

「舞……私に昨夜と同じキスを」

「で、でも、人前でしたらダメなんじゃ」

「！」はアズウォルド。そんな法律はない。それに、誰も見てはお

らぬ

浜辺でキスなんて、ロマンス映画みたい！  
舞はグトラの下に隠れた濃いブラウンの髪に手を添え、そっと口づけた。

「これだけか？」

「え？ だつて……昨夜のキスつて」

「こんなもんだったんじゃ、と舞が言おうとした時だつた。

舞の身体は砂浜にストンと下ろされ、直後、掬い上げるように唇を奪われた。息苦しいほど乱暴に口の中を蹂躪され、舞は思わず抗議の声を上げたくなる。

「ちよ、ちよっと……アル！？」

「王である私を欲情させ、わざと開いてしまつた罰だ

（よ、よくじょひつて、わたしつてば何したの！？）

言われても全然思い出せない。

ただ、そう言えば

「アルが来てくれるのを待つてたんだからね。何で、レイ国王よ  
り早く来てくれないのよ。海でも砂漠でも、誰にも負けちゃヤダ。  
アルは世界一の王様なんだから。世界で一番のわたしだけのヒーロ  
ーなんだからあ」

とか何とか、半分寝ながら叫んでいた氣はする。

でも、あんな台詞で欲情はしないんじゃない？ と舞が笑いなが

「うん」と。

「キスした後、私の膝に乗り、しなだれ掛かりながらあの台詞を言ったのだぞ。それも、臀部で私の股間を刺激しつつ……さらには、柔らかな手の平で私の裸の胸元を撫で擦つた！ ヴィラに到着した時、私はすっかりそのつもりであった。それを……」

「この砂浜にヘリを着陸させ、階段を駆け上がり、ヴィラのベッドに舞を押し倒したという。

ところが、その時には舞はスースー寝息を立てていたと言つから、何ともフォローしがたい。ミシユアル国王は百パーセントその気になったムスコを宥めるのに必死だつたらしい。

「ヘリポートではなく、砂浜に無理やり着陸させ、人払いまでしたところの」

口惜しそうに言わると、何と言つか、本当に申し訳ない気持ちになる。

こんな真つ昼間から言つてもなあ、と思いつつ、

「えつと……じゃあ、今から……スル？」

馬鹿もの！ と怒鳴られるのを覚悟して身構えていたが、予想外の返事が返ってきた。

「当たり前だ！ お前が田覓めるまで、ずっと待つておつたのだからな

「え？ えつ？ ええーつ！？」

（ビーチのど真ん中なんて、嘘でしょーつ）

なんと、ミシユアル国王の瞳は爛々と輝き始める。

舞がアタフタしていると、そんな心の声が聞こえたのが、彼はとんでもないことを口にした。

「そう言えば……アサギ島のビーチで、レイたちもコトに及んだとか、どうとか聞いたが」

「コトってアレのコト? う、うわっ…」

「婚姻前という噂だ。まさに、アズワールドは楽園だな。それに比べれば私たちは夫婦なのだから。誰も文句は言つまい」

樂園でそういう意味じゃないんじゃ……。

言い返す間もなく、理性を溶かすようなキスが舞を包み込む。確かに、三六〇度どちらを向いても人影はなさそうだった。青い海、白い空に囲まれ、開放的に砂浜の真ん中で……。

(エッチしたいなんて言つてないってばーーっ)

「ム、ムリ! 絶対にムリだって。集中出来ないよ」

ミシューアル国王の唇が首筋を這い、手が腰からヒップ、太腿と撫で始めた時、舞は泣きそうな声で伝えた。

すると、彼はため息を一つ吐き「仕方あるまい」と口にする。すると、今度は唐突に舞を横抱きにした。砂浜の上を飛ぶように走り、階段を駆け上がる。ヴィラに飛び込むと、さつきの女性バトラーの気配はどこにもなかつた。

「舞、寝てはおるまいな

さすがに少し荒い息で、ミシューアル国王は尋ねた。

舞は気圧されるようにコクコクと頷く。彼はさも嬉しそうに、天

蓋から下がったレースのカーテンをぐぐり抜け、ベッドに舞を下ろしたのだ。

そして、ミシューアル国王はトーブを脱ぎ捨てる。その下は舞より身軽な格好であった。

しかも、昨夜からその状態を維持してたの？ と聞きたくなるよう、立派なジャンビーアがそそり立っている！

（わたしも……脱いだほうがいいかな？）

舞もワンピースに手を掛けるが、

「余計なことを致すな。お前を脱がせるのは私の役目……楽しみを奪うでない」

ミシューアル国王はそんな言葉と共に、ワンピースの背中についたファスナーを引き下ろした。肌触りの良いコットンは足元に滑り落ち、舞は明るい陽射しの中、ショーツ一枚になる。彼はそのショーツにも手を掛け、引き摺り下ろした。

二人は一糸纏わぬ姿で、ベッドの上に横たわった。

「ね……アル。わたし、覚悟は出来るから……」

「何の覚悟だ？」

「もし、わたしが男の子を産めなかつたらつてこと。でも、不意打ちはやめてね。それから、もし心変わりした時は、わたしのこと日本に帰らせて。それだけ……約束してくれる？」

舞にすれば思いつきり譲歩したつもりだった。

レイとティナがどうやって乗り越えていくのかは判らない。でもお国柄で考えれば、舞に男の子が出来なかつた時のほうが、あの二人より大問題になると思う。

しかし……。

「そんな約束は出来ぬ

「アル……」

「？妻は生涯ひとり？だと、何度言わせれば気が済む。アッラーに誓つたであろう、私の妻はお前ひとりなのだ。お前以外の女に、私の息子を産む権利など」「えぬ。お前が日本に帰る日など永久に来ぬ。舞、諦めて心ゆくまで妻の悦びを味わうがいい」

そう言つと琥珀色の瞳を煌かせ、舞の身体にキスの雨を降らせる。甘く熱い蕩けるようなキスの連續攻撃は、舞から考える力を奪つていぐ。

（信じていいの？ でも、ダーウードが……）

「人生には努力や知識では動かせぬ？運命？があるのだ。私がお前にそれを教えてやろ」「

ミシュアル国王は極上の笑みを浮かべつつ、舞の……とても言葉に出来ない場所に口づけた。そしてゆつくりと、生温かい舌先が何度もその場所を往復する。

「や……ん、アルの意地悪……もう、ダメえ」

「駄目ではなかろう？ お前の欲しいものは何だ？」

スルリと、舞の身体に太く長い指を押し込みながら、平然とそんな言葉を口にする。指先で弄ぶテクニックも日々進歩している感じだ。

舞の身体に変化が現れると、たちまち動きを変えてしまう。巧みに焦られ、ベッドの上で教えられたアラビア語を口走つてしまふ「うう……」。

『陛下……お願いです。陛下の剣で、わたくしを貫いて下さいます』

ミシユアル国王は自分の愛撫に舞がメロメロになるのが樂しいらしい。

満足気に微笑みながら『よからう』と呟き、破壊力抜群のジャンビーアで舞を攻め始める。ベッドの上に日本語とアラビア語の「愛してる」が飛び交い、舞が「もう許して」と言つくらい?妻の悦び?知つた頃、ミシユアル国王も?妻を持つ悦び?に打ち震えるのだった。

～\*～\*～\*～\*～

「舞、眠ったのか?」

「え? ……あ、ちょっとウトウトした。でも、大丈夫よ

昼食と夕食の時間以外は全てベッドの上で過ごしている。

(セルリアン島のリゾート・スパを貸し切る必要つてなかつたんじや……)

密かに舞が疑問を持ち始めた頃……。

疲労困憊で浅い眠りに引き込まれそつになつた舞に、ミシユアル

国王は声をかけた。

『? 言うは易し、行なうは難し? だと知つてゐる。だが私は、全て

の敵からお前を守り、あらゆる困難を排除して、共に歩く未来を約束する。アッラーの神に誓つて』

アルワードウサハーフンワ アルフィアルマタル

「ア、アル？ 最後しか判らなかつたんだけ……」「「」の命死きるまで、抱くのはお前ひとつだと誓つたのだ……不満か？」

舞はゴクリと唾を飲み込んだ。

「ふ、不満じゃない。ナビ、今夜はこれくらじで眠つて、また明日つてことで」

「安心致せ、舞。お前はゆくつ眠るといふ」

「それつて、どうこいつ意味？」

「知りたいのであれば、教えてやる」

眼下に広がる紺碧の海で泳げる日は果たして来るのだろうか？  
そんなことをチラシと考えつゝ……舞は、琥珀色に艶めく情熱の海に身を投じた。

紺碧の海

編 ～ナビ～

金色の砂漠 編へ続く

(1) 胸騒ぎのハネムーン／R（前書き）

性描写があります、R15でお願いします。

## (1) 胸騒ぎのハネムーン／R

「無理！ 絶対に無理だつてば」

「心配いたすな。そつと進めればよからひ」

樂観的なミシユアル国王の言葉に、舞は必死で抵抗する。

「壊れるつて、アルは加減を知らないじゃない。すぐに無茶するんだから」

舞の言葉に、さわかムツとした表情をしつつ、

「ガタガタ言わすともよい。黙つて見ておれ」

そう言つてミシユアル国王はゆつくりと奥に進める。壁を擦りながらも、どうにかねじ込んで行く。

舞はその様子を固唾を飲んで見守つた。

「アル……がんばつて、もう少し……」

「わかつておる。そう急かすな」

彼の額に噴き出した汗は、頬から顎を伝い滴り落ちた。真剣な表情で、琥珀色の瞳を煌かせるミシユアル国王の顔を、舞はじつと見つめる。

(なんかもつ……可愛いなあ)

ミシユアル国王が貫通する寸前

「あんつー。」

舞は思わず声を上げた。

最後の最後で力を入れすぎてしまったようだ。それとも、ミシュー  
アル国王の腕が太すぎたのか。

「やん、もう！ アルの馬鹿っ！ せっかく作ったのに」  
舞は三十分かけて作った砂の城が崩れ落ちるのを、残念そうに眺  
めるのだった。

小さいころ、幼稚園の砂場で作るのが大好きだった　　？王子様  
の住んでるお城？

舞はそのことを思い出し、セルリアン島のビーチでせっせと砂の  
城を作り始めた。しかし、この浜の砂はサラサラしていて上手く固  
まらない。なるべく掘つて濡れた部分でチャレンジし、よつやく形  
になってきたところだった。

「お城が出来たらトンネルを作るの」

「トンネル？ なぜ、城にトンネルなのだ？」  
ミシューアル国王は当たり前のような質問をする。

「い、いいのよ、理由なんか何でもっ！ とにかく、仲の良いお友  
達と反対側からトンネルを掘つて行って、真ん中で指が合つのがす  
つごく嬉しかつたの！」

同じ幼稚園の名前も覚えていない男の子だった。

舞が極秘で、クアルン王国ミシューアル王子の婚約者に選ばれたの  
が五歳の時。それ以前は公務員の娘として普通の生活を送っていた。  
当然、舞が通っていたのは、近所の公立幼稚園だ。

懐かしい思い出を舞が語つていると、とたんにミシューアル国王が  
不機嫌になつたのである。  
どうやら、一緒に遊んでいたのが男の子と知り、ヤキモチを妬き  
はじめたらしい。

（なんで幼稚園児に妬くわけ？）

そしていきなり、「私もその城にトンネルを掘るー」と宣言したのだった。

「だから言つたでしょ？　！」の砂はサラサラで脆いから、アルの腕だと太過ぎて崩れるつて」

「……判つた。では人を集め、もっと頑丈な砂の城を」「いいつて！　もういいから！」

舞がパンパン手を払つて立ち上がると、ミシュアル国王は悔しそうな顔をする。

彼にとつて、思いどおりにいかず？諦める？といつ行為は相当な我慢を要するらしい。それも、愛する正妃の願いを叶えてやれなかつた、つてトコも重要だ。

でも、彼に任せていたら、ビックリまで徹底的にやるか判らない。結婚前に日本で会つて間もなくの頃、『白馬の王子様がよかつた』なんて、舞は勢いで口にしてしまつた。それを真に受け、ミシュアル国王は本物の白馬に乗つてやって來たのだ。

（本物の城を砂浜に建てる、とか言い出したら……ああ、アルならやりそう）

「も、もういいんだつて。その、アルのせいじゃないから」

「だが、砂の城の中で手を繋ぎたかったのであるう？」

「それは……アルとだつたらどうで繋いでも幸せだから、いいの」

舞は一本立てのビーチパラソルの下、砂浜に座り込んだままのミシュアル国王の隣に寄り添い、そつと手を重ねた。

海外で過ごせるハネムーンは、あと一週間だけ。

クアルンに戻ればまた、王家のルールや国の法律、ムスリムの掟

……たくさんの制約に縛られる。砂漠の国の王妃になつた以上、覚悟はしているが、不安を完全に消し去ることはできない。

「舞……」

自分の手をひっくり返し、ミシユアル国王は舞の手をしつかりと握つた。

「……あん……」

握つた手をそのまま引っ張られ、舞は彼の胸に倒れ込む。

「私となら、どこでも幸せか？」

「ん。そう言つたじゃない」

滅多に見られない海パン姿のミシユアル国王である。カラフルなハイビスカス柄がかなり可愛い。

かたや、舞は真っ白なビキニであつた。彼にとつて女性のイメージは黒いアバヤ姿だ。ところが、東京の結婚式で舞は純白のウェディングドレスを身に纏つた。それはミシユアル国王に、新鮮な衝撃を与えたという。

今回、白い水着を用意させたのは彼自身であつた。

舞は甘いムードに気をよくして、ミシユアル国王の胸にもたれ掛かる。

（浜辺で水着姿なんて……思いつきりハネムーン！ って感じで最高！）

二人きりでセルリアン島の国立リゾートを貸し切り、ビーチをはじめリゾート内の色んな施設で遊び……。ヴィラに戻つたら、心ゆくまで夫婦の時間を楽しむ。それもベッドの上だけとは限らず、たくさんの場所でミシユアル国王は舞を楽しめてくれた。

舞がうつとりしていると、彼の唇が舞の頬に触れた。くすぐつたのが何となく気持ちがいい。

そのままゆっくりとお互いの唇を重ねてきて……ふいに強く吸われる。キスはタイミングや仕草に癖があるんだ、と舞は初めて知った。//シユアル国王のキスにもだいぶ慣れてきて……。

「あつ……あん。アル、それ以上は」

唇だけのつもりが、彼の手は知らぬ間に水着をずらし、舞の胸に直接触れていた。

それこそリズミカルに、舞の感じるポイントを的確に刺激していく。

「ど」でも幸せと言つたではないか？」

「そつそれは……手、を」

「手を、いづすればよいのか？」

言つなり、するつと今度は水着の下に滑り込ませた。

「ひやあんつ！ バカあ……アルのえつち！」

見る間にスルスルと下を脱がせ、砂浜に押し倒していく。いくら誰も見ていない、と判つても、真唇に外で裸になるのは抵抗を感じて当然だと思う。だが、舞の抗議を軽く無視して、彼は舞の膝を割り、その部分にキスしてきたのだ。

ひとしきり、口付けて舞がフラフラになつたとこ//シユアル国王の言つた言葉。

「舞、……私の上に乗ることを許す」

許されてもヤダ、と言いたい反面、しうがないなあと思えてしまうのが？愛？かも知れない。

その後、舞は？愛を籠めて？ミシユアル国王をお尻の下に敷いたのだった。

～\*～\*～\*～\*～

国王夫妻がハネムーンを楽しむアズウォルド王国から約一万二千キロ。八時間の時差があるクアルン王国では間もなく夜明けであった。

広大なアブル砂漠を一頭の馬が駆けている。

アラブ馬の駿馬であつたが、やはり相当スピードは落ちていた。サラブレットより小柄な馬体に一人の人間を乗せ、夜を徹して駆けてきたのだ。当然かも知れない。

それでも馬は主人の窮地を知つてか、懸命に馬銜を取り、砂を蹴り上げて目的地を目指す。

『シャムス、疲れたであろう？ 辛くはないか？』

腕の中の妻にそう問いかけたのは、ミシユアル国王の乳兄弟にして側近、ターヒル・ビン・サルマーンだ。妻とともに国王夫妻に仕えるため、彼もミシユアル国王のすぐ後に結婚式を挙げたのだった。妻のシャムスはわずか十八歳。とはいえ、十六歳の頃から王太子の宮殿に上がり女官の見習いをしてきた。クアルンの基準では立派に一人前の女性である。

『いいえ。あなた様と一緒にしたら、私は何も辛くなどありません』

シャムスは疲れた顔に笑顔を浮かべ、きつぱりと言い切った。

妻の言葉を受け、ター・ヒルはしっかりと彼女を抱きしめる。小柄なシャムスの軀に女らしい曲線を感じながら、彼は器用に片手で手綱をわざいた。

『……すまん……』

ター・ヒルは小声で詫びつつ、目的地 隣国ラフマーンとの国境を田指すのだった。

## (1) 胸騒ぎのハネムーン／R（後書き）

御堂です。

お待たせいたしました。

金色の砂漠編スタートです！

サイトがどうも携帯ユーチャー様には不評のため、こちらもほぼ同時更新と致します（^\_^;）

出だしは… いつもこの好きです（苦笑）

久しぶりにターヒル＆シャムスの登場… 何やらヤバそうな雰囲気。アル＆舞も浮かれてる場合じゃなくなります。

週2回更新を目標に頑張ります。

よろしくお付き合いくださいます（^\_^）

## (2) 砂漠に落ちた涙

砂漠に朝日が昇る。

それはまるで、闇に襲い掛かる火の玉のようだ。決して逃がさぬとばかり、地平線を朱色の光が追いかけてくる。そんな錯覚に、ターヒルの手綱を持つ手は汗ばんだ。

『旦那さまっ！』

懐でシャムスが声を上げた。

国境に到着したのだ。印は何もないがそこを超えると確かに隣国ラフマーン王国。その証拠に、密かに手配したヘリが待機し、ターヒルらの到着を待っていた。

白いトーブに身を包んだ数人の男が見える。ターヒルは手前で馬を下り、腰のジャンビーアに手を添えた。

『我が名はターヒル・ビン・サルマーン！ あなたの方の主人の名をお聞かせ願おう』

シャムスはターヒルの背後に隠れる。

もし、予想どおりの名前が返つて来なければ、二人はこのまま銃弾の洗礼を浴びることになるだろう。そのときは砂漠に屍を晒すことになる。せめてシャムスだけでも逃がしたかったが……。

ターヒルがそう思った時、妻はギュッと彼のトーブの端を掴んだ。

（共に死ぬなら、それも良しとしよう。我々の無念は、必ずや陛下が晴らしてくれるはずだ）

覚悟を決め、ターヒルが剣の柄に手を掛けたとき 男たちが左  
右に割れた。

そして赤いグトラを被つた長髪の男性が姿を現す。

『我が命はラフマーンの國王スルタンに、そして我が心はアッラーに捧げて  
いる。これでよいか?』

『サディーク王子!』

ターヒルとシャムスはほぼ同時に叫び、砂の上に膝を折った。

隣国ラフマーン王國のサディーク王子にターヒルは助けを求めた  
のだ。だが、まさか王子自らが彼らを迎えてくれるとは思わな  
かった。

『このたびの『ご厚情、深く感謝申し上げます。』このお礼は必ずや』  
律儀にも礼を言い始めたターヒルの言葉を遮り、サディーク王子  
が言った。

『挨拶は後だ。へりで空港まで行き、乗り継ぎを経てマーラからア  
ズウォルドを目指す。パスポートは用意した。すぐに』

『では、妻だけお願ひいたします』

『ターヒル! 正氣か? 国に残ればお前は』

『私はミシユアル国王陛下より、不在中はカイサル陛下とヌール妃  
様、そしてラシード王子ご一家をお守りするよう命じられておりま  
す。事態がどれほど変わろうとも、主君の命に背き、逃げ出すわけ  
にはいきません。どうか、妻を……サディーク王子の『ご養女アーリ  
シャ様の下にお届けください』』

女官を娘の下に送り届ける。

国外に出たのがシャムスだけなら、サディーク王子の名誉を傷つ  
けずに済む。

ターヒルのそんな思いに気づいたのか、サディーク王子はそれ以

上何も言わなかつた。

『旦那さま……私は……私は』

シャムスの大きな瞳から涙がこぼれる。

彼女はクアルン女性の鏡だ。夫の言葉に従い、どんなときも夫を立てる。妻にしたばかりの女性と離れたい男はいない。だが、ター ヒルにとつてはアッラーに誓った主君 ミシユアル国王が最優先 なのであつた。

そしてまた、その思いを判つてくれるシャムスを、ターヒルは深く愛していた。

『万に一つ、私が死んでも見苦しく騒いではならぬ。そして、子供が出来ておらぬときは婚姻を無効として嫁げるよう、<sup>したた</sup>認めておいた。どうか新しい結婚をして、幸福に』

生涯を寡婦として過ごす覚悟は出来ております』

葉を受け入れる。

シャムスの髪を覆う「ビシヤ」の裾を手に取り、彼は布の端に軽く口づけた。それだけで、サツと背中を向け、サディーク王子に礼を

タービルの背中にシャムスの声が響く。

その言葉は何より強い“お守り”であつた。

大

『ター・ヒルと連絡が取れぬとはどういうことだ！ もういい！ 戻り次第、連絡を寄せと伝えよ！』

香氣にリゾートに籠もり、ハネムーンを楽しんでいるように見えるミシユアル国王だが、定時連絡はちゃんと受けていた。

今回、本国にター・ヒルを、日本にはヤイーシュを残しアズウォルドにやって来たのだ。

ター・ヒルを残したのは彼が結婚を控えていたことが第一の理由である。他にも理由はあり、ミシユアル国王の不在中、ラシード王子と共に王族の管理と首都の治安維持を任せて來たといふ。

ラシード王子だけではどうも心許ないらしい。

そのためなら、ター・ヒルは前国王の名を使つてもよいことになつていた。前国王は退位間もないこともあり、まだまだ権力・影響力とも衰えてはいない。そんな前国王の名前を出せば、国王の一側近であるター・ヒルにも相当の力が揮えるという。

「電話で怒鳴つてたのはヤイーシュなの？」

「だいぶアラビア語の聞き取りが出来るようになつた舞は、ミシユアル国王に尋ねる。

「いや、アズウォルド本島にあるクアルン大使館員だ。ヤイーシュから定時連絡が入つておらぬ。それをター・ヒルに確認しようとしたら、奴とも連絡が取れぬのだ」

かなりイライラした様子で部屋の中を行つたり來たりしている。

「あ、ほら、ター・ヒルは新婚さんだしさ。ヤイーシュもモテそうだから、日本人の恋人を見つけてデートしてるのかも」

「馬鹿者！ そんな理由で連絡を怠つたのであれば、二人ともクビだ！」

ミシュアル国王の気持ちを和まそつと言つたのだが、余計に怒らせたらしい。

とは言え、舞にしても訳が判らない。第一、連絡がないのは舞のせいではないのだ。

「ちょっとアル！ わたしに怒つたつて仕方ないでしょ！ 違う人間に連絡してみる、とか。別の手段を考える、とか。動物園のライオンみたいにうるうるしてないで、もつと有益なことに時間を使えば？」

舞の言葉を聞くなり、ミシュアル国王はニヤリと笑つた。

（そ、その笑顔つて……）

「確かに、お前の言つとおりだ。ビうせ待つしかないのだから、もつと有益に待つことにしよう」

そう言いながら、ラタンのカウチソファーに座る舞の隣に腰掛けた。

舞が手にしていたオレンジジュースの入ったグラスを取り上げ、ソッとテーブルに置く。

「ア、アル、まだ夕方だよ。夕食だつてこれからだし……」

「では、夕食前に軽く運動することにしよう」

（絶対に“軽く”じゃ済まないくせにっ！）

舞はそう抗議しようとするが……開きかけた口を塞がれ、あつという間に深いキスに突入する。

「昼間も砂浜で頑張つたんだしさ……ねえアル、せめて夜まで休んだほうが」

「有益なことに時間を使え、と言つたのはお前ではないか？」

「他にも何か、することが」

「ない！ 愛する妻がしどけない姿でカウチに横たわり、私を誘惑しているのだぞ。夫のするべきことは一つだ」

昼間は砂まみれにされたのだ。シャワーでようやくわいぱりして、  
寬いでいただけで……。

（誘惑なんてしてないってば～～！）

叫ぶ暇もなく、舞はスルスルと部屋着を脱がされた。

(3) わせやかな樂園へR(前輪轍)

性描寫があります、R1-5でお願いします。

### (3) わわやかな乐园／R

カラソ、ヒグラスの中の氷が崩れる音がして……冷たい唇が舞の胸元に落ちてきた。

「ひやつ……あん」

冷たさにびっくりして声がこぼれる。同時に、ゾクリとした快感を覚え……舞は誘惑に近い声を上げた。

「昼間は暑かつたであろう? 私が冷やしてやる!」  
ミシユアル国王は上田遣いにそんなセリフを呟く。先ほどの不機嫌は何処へやら、随分楽しそうな声である。

「冷やすつて……氷?」

「ああ、そうだ。舞、お前の身体からはオレンジの匂いがするぞ」

それはグラスにオレンジジュースが入つてたから……と言いたいのだが、冷たい舌先で舐め上げるよう先端を刺激され、不思議な感触に舞のバストはどんどん敏感になつてくる。

気持ちよさに身体をくねらせ、舞は懸命に我慢していた。すると、冷たい舌は脇腹を伝つて下に向かい、腰辺りに吸い付いたのだ。肌がぴりぴりと痛むほど吸い上げられ……。

(もうつー キスマークは恥ずかしいからヤダつて言つてゐることー)

場所なんてお構いなしに、楽しそうに“自分のモノ”である証を付けて回る。舞が何度抗議しても無視だ。ミシユアル国王の返事はいたつて簡単。

「お前の素肌を見る権利は私にしかない。男の口を気にして恥じる必要がどこにある？ 女たちは夫にこよなく愛されるお前を羨むだろ？」「うう

などと自信満々に言つてゐる。

「やあっ！ ちよつアル……何してゐる……あや

冷たい唇からいつもの熱を感じ始めた直後、彼は再び氷を口に含んだ。そして今度は、なんと脚の間に口付けた！

ヒンヤリとした空気をその場所に感じる。ミシユアル国王の触れていない部分まで、冷たい風にくすぐられる感じがした。

「お前の身体から溢れるのは、ジュースよりもっと甘い液体だ。氷で冷やしていただくとしよう」

言つなり、冷たい物が体内に押し込まれた。

「やつ……やだ、もう！ アルの馬鹿つ！ 変態国王！」

「舞、それはムツシリスケベと同じ意味か？」

「へん、変なエッチが好きつてこと…」

ちょっと違う気もするが、変態を上手く説明するのは難しい。

すると、ミシユアル国王は何を思つたのか、

「夫が妻の身体を愛でてどこが悪い」

「わ、悪くはないけど……」、「氷とかつ……使うのは？」

冷たい吐息で胸よりもっと敏感な場所を撫でられては、とてもまともには喋れない。

「様々な手段でお前に悦びを『えたいだけだ。正直に言つてみよ

舞が答えるより早く、身体のほうが敏感に反応する。

それはミシユアル国王にも伝わつたらしく……彼はフツと笑つた。

「なるほど、正直な身体だ。褒美を取らせよう」

「やだ、もつ、アル……アルのばかあ」

「お前の“馬鹿”は“愛している”と同じ意味であったな。いや、この場合“もつと”と言つておるのか」

そんな自分にとつて都合の良い解釈をしつつ、ミシュアル国王はカウチソファに悲鳴を上げさせた。

ダンダンッ！ ダンダンダンッ！

不意にドアをノック……とこつより殴るよつた音が聞こえる。

「ア、アル……誰か、来た。ちょっと……ストップ」

「馬鹿者！ 止まる訳がなかろうー？」

「ええつ！？ だつて、あ……ん」

『陛下！ わたくしでござります。定時連絡が入つておりまして失礼いたしますぞ』

その声に舞はギクリとした。彼女を決して正妃と認めようとしない、側近ダーウードだ。

今すぐ入つてこられたら、ダーウードの前にあられもない姿を晒してしまつ。すぐにも飛び起きなきや、とこつ場面のはずなのに……。

ミシュアル国王にはその気配が全然ない！  
ドアが音を立て、ダーウードが入つて来よつとしたその時

『誰が入つてよいと言つた！？ このヴィラは後宮と同様である。

無断で立ち入つた男は生かして帰さん！』

ミシュアル国王は動きを止めて一喝する。

隆起した筋肉が激しい呼吸に上下していた。オリーブ色の肌に汗が伝い光つて見える。彼の止め処ない熱情に翻弄されながら……

（カツコいいなあ……つてこんな格好だけど）

カウチの上で組み伏せられ、その荒々しさに舞はドキドキだ。

（定期連絡くらい待たせてもいいんじゃない？）

そう思つたことを後悔するよつた問題が起きているとも知らず。ダーウードが今ひとつ苦手な舞は、夫の与えてくれる悦びに、しばし身を委ねたのだった。

／＊＼＊／＊＼＊＼

翌朝、舞をセルリアン島のヴィラに残し、ミシュアルはアズウォルド本島の王宮に戻つた。もちろん、ダーウードも一緒に。

『レイ、このたびは貴国の協力に感謝する』

王宮正殿の国王執務室に入るなり、ミシュアルはレイに対して感謝を口にした。

一方レイは、柔らかい物腰と動作でミシュアルに着席を勧める。

『感謝には及ばないよ。予定どおりと言つべきだらう。……違うのかい？』

レイの問い掛けに何と答えればよいのか、ミシュアル自身にもよく判らない。

彼は曖昧な笑みを口の端に乗せながら、『神のみぞインシャーアッラー知る、だ』そう小さく答えた。

そこに、電話の音が鳴り響いた。

レイが受話器を取り上げ、英語に近いアズウォルドの言葉で軽く受け答えをする。

『シーグ・ミシュアル、日本からの不法入国者が君の名をしているというが……』

受話器を手にしたまま、彼はミシュアルに向き直り尋ねた。

『不法、入国だと?』

『サンドベージュの髪にブルーアイズ、米国人でアライブ・キヤラハンと名乗る青年だ。心当たりは?』

『ある。連れて来てくれ』

キヤラハンは母方の姓だつたと記憶している。英語のアライブとはアラビア語でヤイーシュを意味した。

クアルンの首都ダリヤでの戴冠式前後、『日本の血を引く王を認めない』『日本人王妃に血の制裁を』そんなビラが大量に撒かれた。ミシュアルはあえて国を離れ、前国王の権力が及ぶうちに、それらを利用して反日組織の一掃を計画したのだ。ラシードを旗印とし、実質的にはターヒルに指揮を命じた。前国王にも、王族の中から協力者を選んでもらつたのである。

一方、ヤイーシュは部族長を続けながら、側近に戻ることになり、最初に命じたのが日本での仕事だった。

前王妃ヌール妃は一人娘であつたが両親……ミシュアルにとつて

は祖父母が存命だ。舞にも両親と弟がいる。それ以上の遠縁にまで害は及ぶまいが、近親は充分に危険だ。

だが、現状で一番危険なのは舞であろう。

(そのために、この国を選んだのだ)

アズワルド

周囲一千キロ四方を海に囲まれた、自然の要塞とも言えるアズワルド王国。典型的なランドパワー国家のクアルンに対して、敵対するには不慣れとも言えるシーパワー国家だ。しかも、敵対勢力はそれほど大きなものではない。舞をクアルンから引き離すだけで充分なはずであった。

そして四日前、舞に塗料を投げつけ、ビラを撒いたとされる反日組織が根こそぎ逮捕された。

ターヒルから『お帰りをお待ちしております』と連絡を受け、ヤイーシュも一、二三日様子を見てからクアルンに帰国すると言つていた。

だからこそ、セルリアン島のリゾート・スパで心ゆくまでハネムーンを楽しんでいたのだが……。

(3) わわやかな樂園へR(後書き)

御堂です。

「」覧いただきありがとうございます。

若干ですが、サイトの本編より直接的な性描写を削除しました。  
こちらでは、アルのジャンバーがどのポジションにあるか判らない程度になってるかと（苦笑）

次回、ヤイーシュの登場です。

引き続き、よろしくお願ひいたします（^ ^）／

## (4) 砂の迷路

ドアがノックされスース姿の男が通された。

ヤイーシュ・アリ・ハッダード・アル・バドル、シーサーの地位にある男だ。砂色の肩より長い髪を一つに縛り、左右の頬に掠り傷があつた。青い瞳には疲労が見え、事態の混迷さを色濃く映し出している。そして、ミシユアルが一際驚いたのが、シャツの胸元から見え隠れする白い包帯。

彼は大股で部屋を横切り、ヤイーシュの腕を掴んだ。  
ヤイーシュは微かに頬を歪める。包帯は胸元だけでなく、手首からも見えた。

『日本で襲われたのか？ 何が起こったのだ。説明いたせ！』

『はい、陛下。まずははじめに、笠原家ならびに月瀬家の皆様に、一切被害はありませんので安心下さい。そして、私が本国に異変を感じたのが三日前のこと』

普段であれば綿密に連絡を取り合うヤイーシュとター・ヒルであるが、今回は少し様相が違つた。

ター・ヒルが新婚ということもあり、クアルン時間で夜間に連絡は取らぬよう配慮したのだ。もちろんそれだけではなく、ヤイーシュのほうにも様々な事情があり……。

早く言えば、反日組織が逮捕された、との連絡を受けてから丸一日以上、ター・ヒルと話していなかつたのである。

現在、複数の中東国家で連鎖的に暴動が起こっていた。

もしミシユアルの従兄にあたる、亡きマフムード王太子が即位し

ていたなら、クアルンもその煽りを受けていただろう。だが、今のところ新国王の評判は上々だ。国民に絶大な支持を受けており、暴動は対岸の火事で済むと考えていた。

ただ一つ懸念される問題といえば、やはり新王妃である舞の存在だろう。

案の定、日本人王妃反対を唱え、暴動が計画されたのである。その首謀者が反日組織と判明し、暴動は火種のうちに制圧された。その先頭に立つたのがリドワーン王子だった。

リドワーン・ビン・ワッハーブ、現在三十一歳で前国王の最年長の孫である。

第一夫人ファーティマ妃との間に儲けた王女は十七歳で遠縁の王族に嫁ぎ、一男二女を産む。彼は王子の称号を持ち、父系では嫡流から外れるものの、母系ではラシードに次いで正統な血を受け継いでいた。

ファーティマ妃は第二子の男子を死産し、子供が産めなくなつた。リドワーンはそんな彼女にとつて失つた息子も同然だつたのだ。

一方、前国王にとつてもリドワーンの誕生は大いなる喜びだつた。ヌール妃と出会う以前、前国王には三人の王妃に五人の娘がいた。四十歳を回っていた彼は息子を儲けることを諦め、第一王女の生んだ孫息子を自身の後継者に、と考えていたくらいだ。

だが、リドワーンが三歳の時にミシユアルが誕生した。

その後、他の王女にも男子が恵まれ、現在、ミシユアルには七人の姪と四人の甥がいる。

リドワーンはその後も周囲の期待を受け成長した。今回の譲位で大臣やそれに伴うポストも若返りを図り、彼は宗教警察の副長官に任命されたのであった。

『そのリドワーン殿下が、暴動の首謀者に逮捕状を出したと、日本

のクアルン大使館に連絡があつたのです』

『組織は一網打尽にしたのではなかつたか？ 首謀者が他にいたとは、私は聞いておらぬぞ』

ミシュアルの問いにヤイーシュは頷きつつ答える。

『はい。私も暴動は未然に防がれ、一味は全員捕らえたと報告を受けておりました。それで、不審に思いターヒルに連絡を取ろうとしたのですが全く繋がらず……』

ヤイーシュはラシードにも連絡を取つたといつ。

だが、側近に電話を取り次いで貰えず、やがて電話番号そのものが不通となつた。王宮や首都に在住の知人・友人に連絡するが、電話だけでなくメールも遮断され、日本のクアルン大使館は一時騒然とした。

『事態の判らぬまま、いたずらに、ハネムーン中の陛下に『報告も出来ず アル＝バドル一族に連絡を取り、現在クアルンで何が起こっているのか、調べさせたのです』

アル＝バドル一族とは、ヤイーシュが族長を務めるベドウインの一族だ。誇り高く、砂漠の戦士と呼ばれる勇猛果敢な部族である。彼らは国家の法より一族の捷を優先する。國の如何なる機関からの命令があつても、族長の命令に勝るものはない。

『報告を受けて驚きました。なんと首謀者としてターヒルに逮捕状が出ていたのです』

『馬鹿な！』

ミシュアルはその一言を叫び、絶句した。

『これは、私が直接陛下に『報告申し上げねばと思い、日本の出国

手続きを取りました。しかし、出国許可が下りなかつたのです。どうもクアルン政府から要注意人物として私の名前が挙がつたらしく……その直後、クアルン大使館の公用車が時限式の爆弾により爆破されました』

微妙な振動に異変を察知したヤイーシュの命令で、大使館員はすぐさま車両から飛び出した。しかし高齢の運転手が逃げ遅れ、彼を庇いヤイーシュは肋骨を三本折るという重傷を負つたのである。

『どうしてすぐに連絡をしなかつた！？』

『出来なかつたのです。大使館に増員されたメンバーは、我々に一切連絡を取らせようとしませんでした』

爆発事故で欠員が出るのを見越していたように、大使館には本國から増員が到着した。

幸い、手術は不要と診断されたヤイーシュだが、数日の入院と安静を医者から言われる。その病室前に、護衛と称して複数の見張りがつけられたという。ヤイーシュはそこを逃げ出し、追いかけてきた一人を殴り倒し、大使館員の身分証を不正使用して出国したのだつた。

『しかし……なぜ、リドワーンが、歳若いシドを補佐するため、父上が選んだ男だぞ』

『はい。それに、今回の逮捕命令もリドワーン殿下が執行されましたが、逮捕状に書かれた名はカイスアル前国王陛下であつた、と』

リドワーンは優秀で機敏な男だつた。女性とのトラブルもあつたが、常識の範囲内であろう。過度な女好きでもなく、マフムードのような犯罪に加担することもなかつた。軍経験もあり、副長官とし

てそつなく務めている。長官になるのもそう遠いことではないだろう。ミシユアルたちとの関係も、王族の中では良好な部類であった。彼がミシユアルに反感を持つとすれば、一点だけ心当たりがある。リドワーンは七年前に第一夫人を、三年前に第二夫人を娶つたが子供に恵まれていない。彼は二人の妻を離縁し、今年中に第三夫人を迎えるという。その噂を聞いた時、ミシユアルは彼を呼び出した。

子供を得る為の結婚なら、お前に夫の義務を果たす能力があることを証明せよ。出来ぬときは、これ以上不幸な女を増やすわけにはいかない。

リドワーンはその証明を断り、離婚と第三夫人の件を撤回した。ミシユアルもそれ以上、年上の甥に恥を搔かせることはしなかつたのである。

『レイ、面倒を掛けるが、すぐさま専用機が飛び立てるよう、準備してくれ』  
『ミシユアル陛下、それは』  
レイより先にヤイーシュが反応した。  
『お前はアズウォルドに残れ』  
『いえ、陛下が帰国されるのであれば、私も』  
『怪我人では役に立たん!』  
『いいえ! 骨が砕けても、私は陛下に付いて参ります!』

ヤイーシュは胸を押さえつつ、怒りに満ちた瞳に青い炎を燃え立たせていた。

## (5) 白馬の王子がついた嘘

睨み合つ一人に、割つて入つたのはレイであつた。

『まず、ミスター・キャラハン、ソファに掛けなさい』

『いえ、私は』

『では……シーク・ヤイーシュとお呼びしましようか？ どちらにしても簡単に済む話ではなさそつだ。主君に仕える心構えは立派だが、精神力だけでは骨は繋がらない。座つて体を休めなさい』

彼は落ち着いた声でヤイーシュに話しかけた。

ヤイーシュはプライドの高い男である。頭(こ)なしに命令されることは何より好まない。だが、レイのように理路整然と言われたら、従わざるを得ないだろう。

案の定、憮然とした面持ちでヤイーシュはソファに座り込む。

『出発準備にはどれくらいの時間が必要か？』

ミシユアルの質問をレイはアズウォルドの言葉に訳す。すると、答えたのはレイの補佐官サトウであつた。

『急ぎ機体のチェックをし、燃料を補給せねばなりません。出発だけでしたら一時間ほど頂ければ……ただ、よろしいでしょうか？』

サトウは見るからに真面目そうな五十年代の日系男性だ。

彼はレイが頷くのを見て、ニコリともせず意見を口にした。

『陛下の命に従い、クアルン国内のアズウォルド大使館と連絡を取りました。しかし、ダリヤ市内をはじめ、クアルン国内では何の問題も起こってはおりません。ニュースにも『暴動は未然に防がれた、ラシード王子とリドワーン王子のお手柄だ』とあります。反逆罪に

も等しい重大犯罪が行われているとまとも……」

『言葉を濁したサトウに瞞み付いたのがヤイーシュである。

「ほう。では、貴殿は私が独りで騒いでいるだけだ、と」「とんでもありません。閣下の周囲で何かが起こっているのは事実。情報の伝達に問題が生じて……」

『そんな瑣末な問題で、車が吹き飛ぶと思つていいのかつ！？』

『いえ。私が申し上げておりますのは、ミシコアル国王陛下や王族の皆様ではなく、シーク・ヤイーシュ閣下の御身を狙つたものではないか、と』

その言葉にヤイーシュの顔は青ざめ立ち上がつた。

『それは聞き捨てならん！ 我がアル＝バドル一族に、姑息な手段で族長の命を狙う輩などおりぬ。訂正せぬなら、ただでは済ません！』

『しかし……』

『サトウ、貴重な意見だが……彼に謝罪するんだ』

レイの一言でサトウは「言葉が過ぎました。お許し下さること」と頭を下げる。彼はそのまま、部屋から出て行つた。

『つむぎの補佐官は私にも意見するくらいだ。君の名誉を傷つけるつもりなど一切ない。許してやつてくれ』

『国王であるレイに謝らでは、ヤイーシュもそれ以上は言えない。代わつて、黙り込む主君 // シュアルに声を掛けた。

『陛下、ラシード殿下たちに万一のことはないと想いますが、ターヒルの身が危険です。一刻も早く国に戻り、事態の解明に 陛下

『判つてゐる。騒ぐな』

部外者であるサトウの言葉を聞くと確かにそうだ。ヤイーシュの部族が族長を狙うことなどあり得ない。だが、日本のクアルン大使館車両が爆破された狙いはヤイーシュで間違いないだろう。そしてターヒルに出ているという逮捕状。

その時、一旦下がった補佐官サトウが再び部屋に現れた。彼はレイに、マニラ国際空港から特別チャーター機が到着した、と告げたのである。

「今週一杯、公賓の予定は入っていなかつたと思うが。入国希望者の国籍と名前は？」

「ラフマーン・スルタン国でござります。王太子第一=王子サディーク殿下が、長期滞在中のご息女アーサン・シヤ様のために、五名の女官を遣わせる、と」

ミシュー・アルはハッと顔を上げた。ヤイーシュも無言でこちらを見ている。

二人の様子にレイは、

「いいだろう。入国を許可する。その五名を王宮正殿に連れて来るようだ」

そう命じたのであった。

～\*～\*～\*～\*～

「クアルンに帰るつて……何かあったの？ ひょつとして、お父様

の身に「

ちょっと本島に戻り用事を済ませてすぐに戻る。ミシュアル国王はそう言って舞をセルリアン島に残して行った。

だが、暁はとうに過ぎ、陽が傾いても戻つてくる気配はまるでない。

最初……

（アルと一緒にエッチばかりだし、たまには独りでノンビリしたいよねーっ！）

などと浮かれていた舞だが、やっぱり新婚。エッチなことを仕掛けてくれないと寂しい、と思い始めていた矢先だった。

ミシュアル国王から帰国を告げる電話が掛かったのだ。

「そうではない。父上は」無事だ。国王の判断が必要な事案が発生した。そのための帰国だ」

「わ、わかった。じゃあ、すぐに用意するから……」

元々が、体調の優れない前国王のために譲位を急いだ結婚だった。クアルン王室では、愛妾や側室ではなく、夫人がいなければ即位できない決まりなのだ。最初はそのことに不満を感じた舞だったが……。

（まあ、渡りに船つていうか。アルはラッキーと思つて求婚してきてただけだもんね）

それでも、ミシュアル国王は舞を正妃にするために奔走した。そのことを知った今となつては、過去をほじくり返して文句を言つづ

もりなんぢせりやしない。

「いや、お前は」のままアズウォルドに滞在するよつこ」

「え？ だつて新婚旅行なんだよ。アルが帰国するならわたしだつて」

「これは一時帰国に過ぎない。一～三日、或いはもつと早く、案件が片付きしだい戻つてくる。我々の帰国スケジュールに合わせて、首都でパレードも行われる予定だ。それより前に揃つて引き上げるのは、国を挙げて迎えてくれたアズウォルドに対して礼を失する。残るのは正妃の務めだ」

そんなふうに言わわれては、舞も承知するよりない。

不満ありげな舞の様子を察したのだろう。ミシユアル国王の声が心持ち甘くなる。

「どうした、舞？ そんなに私と離れるのが寂しいのか？」

「べ、べつに、寂しいとかじや……その、退屈つて言つが……だつて、ティナもレイ陛下と仲良くしてゐみたいだし。ひとりでバカンスつて“ひとり焼肉”とか“ひとりボーリング”と同じくらい悲しい気がして」

「その“ひとり焼肉”が何を意味するのは判らぬが……舞、私の心は常にお前と共にある。必ず戻る。それまで、おとなしく待つよう

に」

ミシユアル国王の言葉は信じられないほど優しかった。

普段なら強がりを言つ舞も、最低でも一日は会えないのだ、と思ひ、つい……

「ねえアル、私のこと愛してる？」

言つてすぐ 我ながらなんていう恥ずかしいセリフを、と後悔したがもう遅い。

電話口から爆笑、いや『ぐだらんー』なんて声が届くことを想像したが、今夜は違つた。

「愛している。我が命と名誉、すべてを懸けて愛し抜く。不服か」「い、いえ、充分です」

琥珀色の瞳を想像しつつ、舞は赤面する。

（まあ一回ぐらいなら、せつかく憧れの南の島にいるんだし、羽を伸ばそーカナ。ちょっとだけ、独身気分で遊んじゃおうー）

たつた一回、やつて信じていた。

## (6) 情熱の国へまいりや

「まあ、では陛下がおひとりで帰国されてしまわれるのですね……  
妃殿下もお寂しいでしょう」

舞の前にアイスティが入ったグラスを置きながら、驚いた声をあげたのはクロエ・アディソンである。国立リゾート・スパの女性バトラーだ。アメリカ系アズウォルド人の彼女は、舞と遜色ない身長で肌は白く、スタイルもいい。クアルンに行くとモテるタイプかも知れない。

普段、女性のことなど口にしないミシユアル国王も、  
「クロエは素晴らしい氣の利く女だ。」このよつな島でバトラーなど  
させず、私なら王宮にあげて仕事を『えるだろ』  
なんてことをボソッと言つていたくらいだ。

（ま、まさか……側室、つづん、第一夫人にしたいから連れて帰る、  
とか！？）

舞は一瞬、びびったが……。

でも、クロエは既婚者で子供もいる、と知りホッとした。ちなみに、彼女の夫もこのリゾートでバトラーをやつているといつ。

「残念だつたね、アル」

そんなんふうにからかうと、

「馬鹿者！ お前は私を、そのように見ておるのか！？」  
と半分本氣で怒つてしまい……。

そのまま、「お仕置きだ」とか言い始めて、昼間からあーんなこ

ヒヤーーんな」ことを、やがてやがての呑田になつたのだった。

（一回五回や六回平氣だもんねえ。アルのジャンビーアつて元氣良  
すきだと思つ）

口の中でブシブシ言つてはみるものの、今夜は戻らないと思うだけ寂しく感じるのはどうしてだらう。それも下半身の辺りがトクに。

自分の身体がすっかり“夫婦生活”それも“アルのジャンビーア”に馴染んでしまつていてことに気がつき、舞はちよつと恥ずかしかつた。

「あら？ 妃殿下、お顔が赤うるわこます。日焼けでしょつか？ それともお風邪でも」

「ち、違うから……大丈夫だから。クロエのせいじゃないし、心配しないで」

まさか、夫とのアレコレを想像して赤面してしまいました……なんて、口が裂けても言えない。

「あ、そうだ。陛下の代わりにね、本国からわたし付きの女官がやつて来るの。わたしたちより新婚さんなのよねえ。確か……クアルンの外に出るのは初めてだつたと思うから、色々驚くだらうなあ」

なんと、アズウォルドにシャムスがやつて来るといつ。

十八歳という年齢のわりにしつかりしていて、教義にもつるさい。小姑っぽいイメージのあるシャムスだが、それでも舞にとつては頼りになる女官だ。

（ターヒルとの新婚生活を絶対に聞き出してやう。楽しみ〜）

クアルン国内の異変、そしてターヒルの身に起こっていることなど何も知らない舞である。約一ヶ月ぶりとなるシャムスとの再会に、胸を躍らせて無理はなかつた。

舞にとつて気がかりがあるとすれば、

「周辺地域の警護はレイに任せているが、リゾート内に護衛としてダーウードともう一名側近を残して行こ」

と言つた点だらうか。

おじいちゃんのダーウードに護衛なんて務まるのだらうか？ それに、正妃として認められてもいないのに。それを考慮すると氣の重い舞だつた。

～\*～\*～\*～\*～

日が完全に沈みきつた頃、本島からへりの到着を告げられた。シャムスが到着したのである。

すると、舞の胸にフツと悪戯心がよぎつ……。

「妃殿下、女官シャムス・ビント・サルマーン様以下、お付きの方がご到着されました」

木枠の引き戸の向こうに人の足が見える。

「ダーウードも一緒なの？」

舞の質問に答えたのはクロエであつた。

「いえ。ですが、アバヤを着用なさつてくださいませ。戸をお開けしてもよろしいでしようか？」

「ええ、どうぞ」

衣擦れの音がした。

シャムスなら、きつちりとアバヤを着込み、ヒジャブをかぶつて二カブで口元を覆つてることだろう。

でも、せっかくやって来た南の島のリゾートである。『シユアル  
国王の命令で男性はひとりもいない。』これは一つ、パアーツと思い  
切つて楽しまないと、こんなチャンスは一度とないかも知れない。  
そんなとんでもないことを舞は考えた。

といつゝことで、舞がアバヤの下に着てこるのは、ミシユアル国王お気に入りの純白ビキニ。

「はあーい！ シャムス、よつこをアズウオルドへ！」

舞はバツとアバヤを脱ぎ捨て、シャムスを振り返つた！  
予想どおり、アバヤ姿のシャムスはよかつた。だが、彼女の横に  
なぜかヤイーシュがつ！！

ア、ア、ア—イ

シャムスはひたすら「ア」を繰り返している。ヤイーシュは口を開けたまま固まっていた。クロエはどうしたらいいのか判らない、といった風情でオロオロしている。

(なつー なんでヤイーシロが「アーリーのやつ」か)

舞は心の中で絶叫した。

～\*～\*～\*～\*～

アズウォルド本島から王室専用船で海上エアポートに到着する。ミシューアルは舞の失態など想像することもなく、シャムスのもたらした情報に頭を悩ませていた。

反日組織が本格的な暴動を起こす前に逮捕し、関係者が胸を撫で下ろした直後に問題が発生したという。逮捕された組織の連中がこそつて、現国王の側近ターヒルの名前を首謀者に挙げたのである。

『皆が、あり得ない、と証言してくれました。ところが、陛下の『結婚に段取りが狂つたのは、我が夫ターヒルさまが同じく側近のヤイーシュ様と結託しアーライシャ様を攫つたせいだ、と』

確かに予定が狂い、様々な行事を省いた。舞の具合が悪いと押し通し、宗教的儀式も飛ばしたのだ。ところが、同時期に舞をアブル砂漠近くのカンマン市で見かけたという声が上がつたらしい。

真実を口にすれば、ラシード王子妃となつたライラの罪が明るみに出てしまう。ターヒルをはじめ国王直属の衛兵らは全員が口を噤んだ。

ラシードはターヒルを庇おうとしたが……。

『ラシード様とライラ様の結婚は予定外のことでした。そのせいで色々な噂が水面下で広がっております。ラシード様はそのせいで、リドワーン様に捜査の指揮権を委ねるような形になつてしまつて』

言葉をあやふやにするシャムスに、ミシューアルは詫ねる。

『シャムス、色々な噂とはなんだ?』

『それは……聞くに堪えぬ噂でござります』

『それを決めるのは私で、お前ではない。話せ』

シャムスは胸の前で手を組み、躊躇つ仕草を見せながら口を開いた。

『ライラ様に手をつけた陛下が、それを隠すためにラシード様に押し付けられた、と。マッダーフ元軍務大臣もだまし討ちにされた、と言つておられるとか。あまりに早い』懷妊も、或いは陛下の口にしながら。

怒りに身が震えたが、それをシャムスにぶつけるわけにもいかない。

シャムスは『陛下の命に従うと國に残つたターヒルさまをお救いください』と涙を流しひれ伏した。夫は陛下に忠実です、と何度も口にしながら。

(そのようなこと、当然ではないか!)

用意ができました、と知らせに来た空港係員をレイは労う。おそらく離着陸のスケジュールを狂わせる事態になつたのだろう。

『レイ、この恩には必ず報いる。どうか、私の妃を守つてやつてくれ』

『もちろんだ。だがシーク・ミシュアル、当初の予想を大きく外しているようだが……君自身は大丈夫か? 今、帰国するのは危険ではないのか?』

『如何なる問題が起つと、國を逃げ出すよつた王に王たる資格はない。そつは思わぬか?』

レイは何も答えなかつた。

## (7) 献身

「ねえ、シャムス。まだ怒つてる?」

衝撃の再会から一夜明け……朝食を食べた後、舞はシャムスを伴い、リゾート・スパの中を散歩に出掛けた。

緑の芝生の上を歩きながら、海風に髪をなびかせ、舞はせつせとシャムスの「機嫌を取る。王妃なのだから女官が不愉快そうな顔をしていたら叱つてもいいのかも知れない。でも、舞はそんな気にはなれなかつた。

「エステもあるんだよ。ボディ・トリートメントとか。シャムスだって新婚さんなんだからさ、ぴつかぴかにして、タービルに会つた時、ビックリさせいやつよ……」

クアルンにも海はあるが、首都から気楽に行ける距離ではない。リゾート施設やビーチは、当たり前のように男性用と家族用は別! 女性だけで海水浴を楽しむなんて論外だ。それに、妻や娘の水着姿を人前に晒したくない、という男性も多い。タービルもそのタイプに間違いない。コレを逃せば、シャムスが海で遊ぶなんてできないだろう。ソリ。

舞がそう思つてウキウキとシャムスに話し掛けるが……。

「タベのことは、まさかヤイーシュが一緒だとは思わなかつたんだつて」

確かにアバヤを着てくれとは言われた。

でも、ヤイーシュが一緒ならそう言つてくれたらよかつたのだ。

ヒーリング……

「妃殿下……」こちらの方はミスター・アライブ・キャラハンです。レイ国王陛下のお客様で、お怪我の療養に入国されました。さらには、ミシコアル国王陛下が特別に、このリゾート内での滞在を許可されたのです。お聞き及びではありますか？」

舞のビキニ姿に仰天していたクロエだが、どうにか落ち着くと説明してくれた。

だが、全くの初耳で今度は舞が驚く番だ。

「え？ ミスター・荒井……？ それって日本語の名前じゃ。って、怪我あ？ なんで怪我なんか？」

「荒井ではなく、英語名でアライブ・キャラハンです。キャラハンとお呼びください。ところで妃殿下、まずは質問の前にアバヤを身に着けていただけませんか？ お美しいビキニ姿は充分に堪能させていただきました。ですが、ヒーリングではありません」

そんなことを言しながら、ヤイーシュはツカツカと部屋の中に入ってくる。

彼は舞が投げ捨てたアバヤを拾い、彼女の肩に掛けてくれた。

「あ、ありがと」

「相変わらず、破天荒な方だ。その分なら、この国でも何かしでかしたのではありませんか？」

青い瞳に室内の光が反射し、ギラッと煌いた。

（「……違うって言えない」）

アジュール島の「テージ」で的一件を思い出し、口を閉じる。

(いや、でも……あればティナにだつて半分は責任があるような……)

…

「自己弁護を思い浮かべる舞にヤイーシュは、  
「本当に何かされたのですか！？」

「してないってば。ちょっとしたトラブルというか……想定内のア  
クシティントっていうか。そう、自然災害かな。でも、トクに問題は  
ないから」

舞が釈明すればするほど、ヤイーシュだけじゃなく、シャムスも  
不安そうな顔になる。

「いや、ホント、ホントだつてば」

あははは……と舞ひとり、声を立てて笑つたのだつた。

結局、シャムスは初めて国外に出て、時差を経験したので休ませ  
て欲しいと申し出て、舞はそれを許した。ヤイーシュも怪我の具合  
があまりよくないらしく、隣のヴィラで“療養”するのだといつ。

(ヤイーシュは日本にいたんだよね？ なんで怪我なんか……)

尋ねたくても相手がおらず、逆に舞のほうが悶々と夜を過げること  
とになり。

「申し訳ございません。どうやら、時差に身体が馴染まぬようです。  
でも、慣れたら大丈夫だと思いますので……ところで、アーリーシャ  
様が日本にお住まいの時は、いつもあんな水着を？」

ようやくシャムスが口を開いた。

ホツとして舞も笑顔になる。

「まさか！ 学校で着たスクール水着がせいぜいだつて。ビーチで

遊ぶのだって今回が初めてだもの。今思えば、アルっていう婚約者がいたから、人前で水着やレオタードは着せてもらえないなかつたんだろ？

バレエの発表会には出させてもらひえず、結局すぐにやめてしまつた。

それ以外にも、不思議なことに、舞の通う女子校では男性教諭はすべて既婚で五十代以上。体育教師もずっと女性だった。舞は少し表情の和らいだシャムスを樂しませようど、そんなことを一生懸命に話す。

突然、クアルンに連れて行かれたとき、心細かつたのを覚えている。でも、舞にはいつでもミシュアル国王が傍にいてくれた。仕事とはいえターヒルと引き離され、シャムスは頼りない気持ちでいると思う。

そんなとき、シャムスがくすつと笑う。  
やつと笑顔が見れて舞はホッとしつつ……。

「まあ、アーリシャ様、不思議なことでもなんでもありませんわ。  
私、ターヒルさまに伺つたことがあります」

「え？ なにを？」

「陛下がお命じになられたとか。アーリシャ様の通う学校はほとんど女性教師にするように、と。独身男性など論外、退職間際で私生活に問題のない男性教師のみ許可されたそうですが」

「なつ！？」

舞は息が止まつた。

まさか、そこまでやつていたとは……。

どうやら、相当な寄付をしていたらしい。道理で、恒例の臨海学校が舞の学年だけ林間学校やらキャンプ体験・スキー合宿に変更されたはずである。

しかも、舞には必ず教師の旦が光っていた。少し羽田を外そうにも、ピッタリ張り付かれて逃げられなかつた記憶がある。修学旅行でも宿泊先で他校の生徒を見かけることは全くなく、見学先で声を掛けてくる男子生徒は片つ端から追い払っていた。

それもこれも全部ミシュアル国王の 手配したのはおそらくお父上であるうが 命令と知ると、開いた口が塞がらない。

(アルひてば、やり過ぎー)

「あの……アーリシャ様、お怒りですか?」

「そういうわけじゃないけど……」

「愛が深い証ではありますんか。アーリシャ様はお幸せでございますよ」

言葉とはうらはうらに、シャムスの瞳に影が見える。

「どうしたの? ターヒルと喧嘩でもした?」

「まあ、そんな。旦那さまと喧嘩なんて」

「ホントは、国を離れたくなかったんじゃない? ターヒルと一緒にいたいんでしょう? アルに連絡取つてみるから、帰してもらえるように頼もうか?」

舞の言葉にシャムスは小さく首を振る。

「でも……」

「どう見てもシャムスの元気のなさはおかしい。

「いいえ! 陛下がお戻りになられたら、問題はすぐに片付くでしょう。そうしたら、陛下と一緒に旦那さまが迎えにきてくださいましすわ。本当に時差で体調が戻らないだけなのです。明日には……アーリシャ様のおっしゃいますように、エステを受けてみてもよろしいですか? 旦那さまに喜んでいただけたら……」

ポツとシャムスの頬が赤くなつた。

「うん、間違いなく！ ねえねえ、ター・ヒルってあんな顔してエッ  
チなこと口にする？」

シャムスの顔は湯気が立つほど赤く染まつていま……

「ア、ア、アーア・シヤさまっ」

舞は心に隅に芽生えた不安を、大きな笑い声で追い払つた。

## (8) テラブルがいつぱい

海の方向から波の音がヴィラまで届く。

目を向けてもそこには漆黒の闇が広がるだけだ。ヴィラの周囲には見る者の心を明るくさせる原色の花々が咲き乱れていたが、夜は濃度の違う黒にしか見えない。微かに、甘い香りが舞の鼻腔をくすぐるだけだった。

舞はヴィラのすぐ外まで出てきていた。

出入り口にセンサーが付けられていたら? と懸念したが、何も起こらずホツとする。舞が窮屈な思いをしないように、と内部の移動は色々配慮されているらしい。おかげで、南国の花に囲まれた通路を抜ければ、隣のヴィラまで一直線だ。

昨夜は我慢した。一夜明ければ向こうから挨拶に来るのでは、と思つたからだ。しかし、待てど暮りせどヤイーシュは姿を見せず……。

舞は心配で「ヤイ……キャラハンの怪我つて酷いの?」とクロエに尋ねたくらいだ。

だがクロエは、

「いえ、妃殿下の心配には及びません。当ゴゾートには専属のドクターもおりますので」  
そう言つてニシコリと笑つた。

(だつたら何で顔くらい出をなこのよつー)

いつも呼びつけてやるつが、とも思つたが。

ミシユアル国王が戻ってきた時、舞のほうからこのヴィラにヤイーシュを呼んだ、と知られたら厄介だ。『お仕置きしてやる』とか言つ出して舞をベッドやソファに押し倒すくらにならっこ。でも、

ヤイーシュにジャンビーアを突きつけ、『決闘だ！』とか言い出さないとも限らない。

（アルならやりそつ……呼ぶのはヤバイよね。やめとけ！）

とはいって日本にいたヤイーシュが大怪我なんて尋常じゃない。日本の家族に何があったのかも知れない。だが、舞はミシュアル国王の許可なしに電話一本掛けられないのだ。彼がいない間はこの島から離れることすら不可能だった。

ヤイーシュの個人的事情で怪我をした、というならそれでもいい。いや、別によくはないけど、舞の心配が取り越し苦労だと判れば一安心だ。

でももし……ミシュアル国王が急遽帰国した原因とか。唐突にシヤムスがやつて来た事情とか。それらのこととヤイーシュの怪我に関係はないのか、どうしても確認しておきたかった。

それに“アライブ・キヤラハン”を名乗る理由もちゃんと聞いておきたい。

「今回、アズウォルド王国ではその名前を名乗つております」

なんて、説明にもなっていない、人を馬鹿にした言い草だ。クアルンで起こった“国王の判断が必要な事案”とはなんだろう。ひょっとして、またライラが何かしたのだろうか？

“また”なんて言つたらライラは怒るかもしない。だがライラの父、マツダーフ元軍務大臣が起死回生の一発を狙つて何かしでかした可能性は大だ！

（暴動とか……反乱とか……ま、まさか、戦争になつたりしないよね）

舞の中にヤイーシュに言われたことで忘れられない言葉があった。

私の知る人間で“自由”に生きることが許されないのは……  
シーク・ミシュアル、彼だけです。彼がそれを求めた時、この国に戦乱を招くでしょう

ミシュアル国王は舞を正妃とするため、あらゆる手段を講じた。  
それがもし、自由を求めたことになるなら。そのせいで、クアルン王国に内戦でも起ることになれば……舞は必ずすればいいのだろう。

そのことをヤイーシュに尋ねたかった。

思えばこのアズウォルドに来た頃から、ミシュアル国王は舞に対して妙に優しくなった気がする。ティナの件で口を挟んだ時も、彼にしては珍しく舞の機嫌を窺うかのようだ。

舞は頷き、思い切って一步踏み出した。

／＊＼＊／＊＼＊＼

（ヴィラつてどれも同じような間取りつていつか、配置なのね）

似た造りの階段を一段一段、そーっと上がりながら、舞はそんなことを考えていた。

ちなみにダークードはヴィラではなく、リゾート・SPAの本館に部屋を取っているという。昨日チラッと挨拶に顔を見せただけで、そそくさと引き上げて行った。その態度は、正妃に対するものからは程遠い。誰が見ても側室扱いだ。

「いくら先代の国王陛下に長年お仕えしたとはいえ、現国王の正妃様になんという失礼な態度でしょう。陛下がお戻りになられたら、私から申し上げます！」

だいぶ元気が出てきたシャムスは、鼻息も荒く怒っていた。

とはいって、ミシューアル国王自身がどうもダークーデが苦手と見える。それに、国王の前ではあくまで儀礼的とはいえ、頭は下げている。間違つても公然と舞を無視しているわけではないのだ。ただ、舞だけ……或いは女だけになると態度が変わるという。ある意味、彼は教典を遵守しているのだろう。

そのダークーデに、こんな風に男性がひとりでいるヴィラに忍び込むところを見られでもしたら……。

（口くちてひょつとして……夜這いに見えたりする？）

思えば、ヤイーシュからプロポーズされたこともあった。あれはたぶん本気じゃない、とは思つが……。もし、本気だつたら？　ふいに浮かんだ疑問に、舞の足はピタリと止まる。

（この状況つて、呼びつけのバレたらやばいかも？）

舞は額に汗が浮かび、回れ右をした。

急いで隣のヴィラに戻るべく、階段を足早に下りる。その上を小走りに横切り、あとはプールサイドを通り抜けたら、先ほどの南国の花が咲き乱れる通路にたどり着く。あの場所まで行けば、眠れなくて散歩していました、という言い訳が通用するだろう。

プールサイドは平坦で何もなかつた。舞が駆け出したその時、建物との間に植えられた生け垣がガサツと揺れた！

ハツとして振り返った瞬間、舞は身体が大きく振られ  
踏ん張るために足を開くが、間の悪いことに舞が足をついたところはプールの縁。見事、ツルンと滑つて真夜中のプールに飛び込み  
そうになる！

（つ……つそつ……）

派手な水音がしたら、全員が起き出してくるだろう。  
寝ぼけていたみたいで、気がついたらプールに飛び込んじゃいました。なんて言い訳が通用するだろうか？ と真剣に考えてみる。  
だが、いつまで経つても水に落ちる気配はない。  
それは誰かが、アバヤ越しに舞の腰を支えてくれたおかげだった。  
そのままグツと引き起こされ、傾いた身体はプールサイドで真っ直ぐになる。

「あ、ありがとうございます。寝ぼけて……」

「まったく、あなたとこうお方は、真夜中にアバヤ姿で水泳ですか？ この間のビキニは、こういつ時のために着るものだと存知でしょうか？」

舞が礼を言いながら顔を上げると、眉間にシワを寄せたヤイーシュが睨んでいたのだった。

## (9) そして熱いキスを

「レイ！ レイ？ どうしたの？」

ふと気づけば王宮の中庭に佇み、レイは噴水を見つめていた。彼の名を呼び、駆け寄ってきたのは最愛の妻ティナである。だが、噴水を睨みつけるようなレイを見て不安を覚えたらしい。彼女の足は止まつた。

ミシユアルが本島の海上エアポートを飛び立つて一日目の朝になる。

無事クアルン入国の一報をミシユアルから受け取り、早二十四時間が経過。予定どおりなら、今日中にもクアルン出国の連絡があるはずだが……。

レイは早朝から外務省経由で予期せぬ報告を受け、戸惑っていた。それをヤイーシュに伝えるべきかどうか。ひょっとすれば、ダーウードが自國の大使館を通じ、すでに情報を入手している可能性はある。そのときは舞とシャムスに伝えるか否か、相談できるのだが。

「…………レイ？ シーク・ミシユアルの身に何か……」

ティナはやけに心配そうだ。おそらくミシユアル本人より、すっかり仲良くなつた舞を案じてのことだろう。

レイはティナの手が自分の腕に触れた瞬間、彼女に飛びつくように抱きしめた。

「レ、レイ！？ いつたい……」

「何もないよ。解決したという連絡がない、それだけだ。彼の身に何かが起こつたわけではない。ただ……友人が危険に陥つても、表

立つて動くことのできない自分が情けなくてね。自国の利益を最優先に考えてしまつ。こんな私は、冷たい人間なのかもしれない」

レイはティナに触れたことで思わず本音を吐露してしまつた。クアルン王国では今、よからぬ企てが進行しているのは事実なようだ。

『如何なる問題が起つたと、国を逃げ出すような王に王たる資格はない』

ミシュアルの言葉には同意せざるを得ない。

レイ自身、同じ立場に立たされたら、ティナの安全を確保したうえで単身帰国するだろ？

だが、側近であるヤイーシュをこの国に留め置いたのは正しかつたのだろうか？ 他人の身分証を使い、米国籍と偽名を名乗つたことを理由に出国を許可しなかつた。無論、怪我に配慮したミシュアルの希望ではあつたが……。

レイの腕の中から少し身体を起こし、ティナは彼の髪に触れた。クセのないサラサラの髪をかき上げながら、

「いやだわ、レイ。本当に冷たい人はそんな心配などしないものよ」「だが、ティナ……」

異論を唱えようとした唇にそつと彼女の細い指先が当たられる。「何もかも、背負つてしまおうとするのは、あなたの悪い癖だわ。シーク・ミシュアルはご自分の義務と責任を判つていらつしやるし、あなたに手を貸して欲しいところはちゃんと言葉にされてるんじょう？ あなたは充分なことをしていろわ」

ティナの言つとおりだった。

ミシュアルは自國で起つるかもしれない暴動の気配を察して、正

妃を守るためにアズウォルドを新婚旅行の地に選んだ。彼がレイに頼んだのは舞の安全。その条件に、アズウォルドの石油輸出国機構正式加盟に尽力する、と云ってきたのだ。

「どれほどのことが起こっているのか、私には判らないけれど……。今日はマイのところに行くのでしょうか？　あなたが笑顔でないと、マイが不安になるとと思うの」

ティナの優しい言葉にレイは心のしこりが解けていくのを感じた。

「それは大変だ。じゃあ、私を笑顔にしてくれるかな？」

「私が？　何をすればいいの？」

「そうだな。まずはダーリン、唇にキスを……愛情を籠めて、優しく、情熱的に」

レイの言葉にティナは呆れたように首を振る。

「なんて注文の多い王様かしら」

軽く微笑むと、彼女は愛情を籠めたキスから始めたのだった。

夜は明けている。今日もいい天気みたいだ。  
判つっていても、舞は起き上がれない。

～\*～\*～\*～\*～

(ヤイー シュめ……本当に手強いんだから)

風通しのよい軽い掛け布団を頭までかぶり、舞は昨夜のことを思い出していた。

舞を彼女の、ヴィラまで送り届け、中庭に建てられた洋風東屋の中のベンチに座らせると、ヤイーシュは距離を取つて控えた。彼は身を屈めているので、ヴィラから人が出て来ても、おそらく舞ひとりに見えるだろう。

悔しいが、これが舞の名譽を案じた配慮なのだと思ひつと、逆らえない。

「えーっと、どうしても聞きたいことがあります

「月瀬家の皆様のことでしたら、全員が無事です、と申し上げたはずですが」

確かにそんな事務的な報告は聞いた。だが、

「ちょっと待つてよ！ 何か起きたけど無事なのか。それとも、何も起きてなくて無事なのか。全然違うでしょ？ それに、わたしのことが理由で家族以外の人に迷惑かけたのだとしたら……」

舞はそのことを心配していた。

遠い親戚、学校の友だち、或いは舞の出身校や知人というだけで、何かトラブルに巻き込んでしまったのだとしたら。それを確認したくても、連絡を取ることもできない。

するとヤイーシュは言い直した。

「失礼いたしました。何も起きてはおりませんし、アーライシャ様はどなたにも迷惑などかけておられません。 これでよろしいですか？」

「……」

思えば……砂漠でも振り回されっぱなしだった気がする。

“求婚”しながら妙に偉そうで、ああしろこうしろと半分脅しながら、うるさく命令ばかりしていた。舞は今でもあのプロポーズは本心じゃなかつたと固く信じている。

（一回でいいからこの男を、わたしに向かって『参りました』と言わせてやりたいっ！）

舞が言えと命令したら言いつのだらつ……尊大な態度で。そういう奴だ。

ミシュアル国王には服従の態度を取るくせに、舞に対してはどこか違う。シャムスが言うには、ヤイーシュは常日頃から『花嫁は絶対クアルン人！』と言っていたらしい。それから考えても、あのとき自分にふらつとさせて、舞を罠にはめるつもりだったとしか思えない。

「他に御用がないようでしたら、私はこれで」

「だつたら、どこでそれほどの怪我をしたの？ 全身に擦過傷と打撲があつて、肋骨なんか三本も折れてるそうじやない。まるで爆発で吹き飛ば……」

「交通事故です。大使館の車両が居眠りのトラックに衝突されました」

「あ、あのリムジンが？」

大使館の車両には、舞も乗せてもらったことがある。

王の側近、しかもシークの称号を持つヤイーシュなら、多分あのリムジンに違いない。

「はい。車体はもちろん、ガラスも防弾ですので多少の衝撃にはビクともしません。ですが、運の悪いことにガソリンタンクを破損しました。漏れたガソリンに引火して……。死人が出なかつたのが幸いです」

殊勝な顔で言うヤイーシュに、舞はうつかり頷きそうになつた。

「でも、なにかおかしい……」

「ちょっと待つて！ それでなんで偽名を使つてるわけ？」

普通に入国すれば済むことだ。というより、そんな重傷でわざわ

ざ来る必要がないだろう。

「自主的に退院を決めたため、大使館員に止められました。入国の一際にやむなく母方の姓を。それと……陛下への報告は私の役目ですので」

しらつとした顔で答えた後、ヤイーシュは口にチャックをしてしまった。

ミシユアル国王相手なら“泣き落とし”や“色仕掛け”的手が使えるが、ヤイーシュ相手ではどうしよもない。結局、判つたような判らないような……舞はヤイーシュの牙城を突き崩すことができず、あえなく退散したのである。

(10) 憧れ好きー

フテ寝を決め込もうとしていた舞を、ベッドから引っ張りだしたのはレイ国王とティナであった。

クロエがベッド脇にきて、

「国王陛下」夫妻がビーチでお待ちになつておられます……。アーシャ妃殿下のお加減が悪いようですが、と申し上げたほうがよろしいでしょうか?」「

心配そうに声を掛ける。

（そ、そんな恐れ多い! 仮病で両陛下を追い返すなんて、バチが当たるつて）

舞は飛び起きて身支度を整えた。

だが、どうしてビーチなのだろう。普通はリゾートの入り口から入つてくるもんじやないだろうか?

そして、舞の疑問は彼女がアバヤ着用でビーチに下りるなり、解消されたのだった。

～\*～\*～\*～\*～

「ティナ! ねえティナ、あれつてひょつとしてイルカ?」

「ええ、そうみたいね。マイ、イルカは初めて?」

「もちろん! ひょつとして、イルカと一緒に泳げたりする?」

舞は今、空から紺碧の海を見下ろしていた。

水面と同じくらい深さを、滑るようにイルカの群れが泳いでいる。

一、二頭が跳ねると数頭が後につづくのだ。そのたびに、舞は歓声を上げた。

彼女が乗っているのは王国のカラー、アズルブルーに彩られた飛行艇。三十人乗りのサイズにたつた十席。余裕のVIP仕様だ。操縦士は一人でも国の規定には反していない。だが、安全のために副操縦士も配置され、乗客担当の女性乗務員までいる。さすが国立リゾート・スペインの観光用飛行艇！ と舞は感激していた。

飛行艇の窓に張りつき、イルカの群れをみつめる舞に答えてくれたのはレイ国王だった。

「このあたりは日本に比べると、本当にサメが多くてね。ビーチ以外は全面遊泳禁止にしてるんだ。期待させて申し訳ないが」「い、いえ、すみません。そんな外海で泳げるほど泳ぎに自信はないんで……ちょっと言つてみたかっただけなんです。本当にすみません」

済まなそうに言われると、逆に舞のほうが恐縮する。

これがミニシユアル国王なら

『馬鹿者！ サメのいる海で泳ぐつもりか！？』と一喝されて終わるだろう。

舞もムカついて、

『シーケだつたらサメくら』にかしてよー』

なんて無茶なことも言えるのだが、相手が上品なレイ国王ではそもそもいかない。

レイ国王はそんな舞の緊張をほぐすと親しげに声を掛けてくれた。

「飛行艇に乗ったのは初めてかい？ いつでも使えるよ」と待機させていたはずなんだが

舞がミシユアル国王と一緒に、ヘリでセルリアン島に入つて一週間が経つ。実質、丸四日間をふたりきりで過ごした。

「とくに船や車を使った様子もないが、館内施設だけでは退屈だったのではないか? ミシユアルは有能だが気の利くタイプではないし。ふたりで何を……」

言われてみれば、何をしていたんだろう? と考え……一秒後に、舞は顔から火を吹いていた。

すると、

「レイ、あなたも少し気が利かないわ。おふたりは観光旅行にいらしたわけじゃないのよ」

頬を薄つすらとピンクに染め、ティナはレイ国王の袖を引っ張つている。

「ああ、失礼。確かにそうだ。随分前のことなので、うつかりしていた」

「あら? まだ一年しか経っていないのに?」

ティナが少し唇を尖らせて答える。その仕草がなんとも可愛らしい。

レイもそう思つたのだろう。苦笑して自分の席から身を乗り出すと、彼女の手を握り……。なんと、頬にキスをしながら、「もう一年だよ。それも半分以上が公務という実に慌しいハネムーンだつた。今度はもう少し、ふたりでのんびりしたいものだ。シーカ・ミシユアルに砂漠でも案内してもらつとしよう アーイシャ殿からも頼んでもらえるかな?」  
軽くウインクして舞を見る。

(な、なんて……手馴れた、というか……スマートな王様なんだろう。さつすが、プレイボーイ・プリンスって言われただけのことはある!)

ついこの間、別れる別れいで大騒ぎしたカップルとは思えない。

いや、騒いでいたのはティナのはうだけって気はしないでもないけれど……。

ティナはレイ国王の言葉ですっかり気を良くしたらしく、「機嫌な表情で彼をみつめている。

「素敵だわ。でも、砂漠って夜は寒いんじゃないかな？」 サソリや毒グモとも怖いのだけど

「国にもよるが……大きな砂漠は中央に向かうほど、昼夜の気温差が広がる仕組みになっている。町に近い場所なら、おそらく大丈夫だ。それに、砂漠の生物は基本的に夜行性だから、夜はテントでとなしくしていたら安全だと教わった。ティナ、君はオアシスで泳いでみたいとは思わないかい？」

レイ国王の言葉に、舞は感心していた。

（へえ、口説き文句が上手なだけじゃないんだ！ 見た目も頭も良くて、優しいときたら……そりや、ティナくらい美人でも不安になるよねえ。よかつた……アルはカッコいいけど、性格に問題ありだから）

両国王が聞いたら卒倒しそうなことを考えつつ、舞は目の前でいちゃつくふたりを幸せな気分で見ていた。

すると、

「ねえ、マイ。マイはオアシスで泳いだことはある？ 楽しい経験だつた？」

「え？ ええ、ありますよ。えっと、あのときは……」

全裸でオアシスの泉に入られ、ミシューアル国王にわんざん恥ずかしいことをされて、拳句の果てに、盗賊団に攫われた、という。この珍しい経験は とても一言では説明しきれない。

「……楽しかったです……。えーっと、裸で泳ぐのがちょっと恥ず

かしかつたかな」

「まあ、裸で泳がないとダメなの？ それはイスラムの教義なのかしら？」

「いえ……たぶんアルの、アル＝エドハン一族のルールなんだと思いますけど」

舞が答えると、横からレイ国王が口を挟んだ。

「それは初めて聞いたな。数年前に一度、私が招待されたときは、下着のような布を巻いて入った記憶がある。男たちだけだったが……どうやら彼は、私が知るより策士なようだ」

そう言つとレイ国王はクスクス笑つてゐる。

（ア、アルのばかあーーっ！ オアシスには裸に入るもんだ、とか言つて。ウソツキのスケベシーク！）

そのとき、飛行艇の最後尾から吹き出すよつな小さな笑い声が聞こえた。

「何か言いたいことでもあるの？ ミスター・キャラハン」

舞が座席越しに視線をやると、そこにヤイーシュが座つていた。

一応、レイ国王が客人を招いた、という形をとつてゐる。でも、彼が舞の警護のためについてきたのは明らかだ。

「いえ。そんな素晴らしいオアシスがあるなら、ぜひ私も同伴させていただきたいのです」

「ええ、ぜひ。わたしの知つてゐる、アル＝バドル一族の族長なら歓迎してくれるでしようよ。と一つても良いかだから！ でもその前に、イルカと泳ぐのも楽しいかもね。ミスター・キャラハン、あなたの毒舌ならサメだつて逃げて行くんじゃない！？」

舞が言い返すと、ヤイーシュの隣に座つたシャムスが困つたように「ア、アーライシャさま、それ以上は……」と口にする。

だが、とうのヤイーシュは澄ました顔で、  
「お優しいかただ、クアルンの王妃殿下は、できれば怪我人です  
で、妃殿下の母国にある温泉にでも招待していただきたいものです。  
サメ抜きでね」

聞きたいことはひと言も言わないくせに、どうでもいいことばく  
ラペラとしゃべる。

（もう、頭にくるしたら……早く戻つて来てよ、アル！ つていう  
か、連絡くらこしるーつ）

早く会いたい。せめて声が聞きたい。心の中で舞は夫の名を呼ぶ  
が……。

(10) 懐かしい好きー(後書き)

御堂です。

更新ペースが落ちてて、ゴメンなさい^\_^(—)^\_

そんな中、10月にサイト開設2周年を迎えます。

お礼のSSS番外編を何にするか…ということで、アンケート第4弾を開始しました！

全9問ですが必須回答は5問のみ。

それもチェックだけで済みますので、よかつたらご協力お願いしま

す( ^ ^ ) /

こちらです <http://enq-maker.com/efc>

Sur

## (1-1) わまよゑる砂漠の王

本島から北へ約一百キロ、国王一行は飛行艇で第一油田基地を視察に訪れていた。

安全のため、周囲は海軍に警戒させている。今日ばかりは、ロシアやアメリカの潜水艦はあるか、サメの一匹とてアズウォルド海軍のチェックなしでは領海内を横切れない、という厳重さだ。

そもそもミシュアルの敵対勢力に、そこまでの警戒に値する軍事力はないのだが……念のためであつた。

『レイ国王陛下。このたびの寛大なるお申し出、心より感謝申し上げます』

レイにアラビア語で話しかけてきたのはスース姿のヤイーシュだ。二人は監視棟に立ち、窓からテッキを見ている。そこにはティナと舞が並んで油田の責任者、ジョージ・カンザキから油田の採掘作業についてレクチャーを受けていた。

『他人の身分証を使い、偽名で入国した男を公賓として遇し、国立リゾートの滞在を認めたことかな？ ミスター・キャラハン』

『……恐れ入ります』

レイはター・ヒルとは面識がある。だが、このヤイーシュとは初対面であった。

ヤイーシュは、アメリカ人との混血というだけあり、肌の色はミシユアルよりレイに近い印象だ。髪の色も淡く、金に近い亞麻色……たしか砂色サンドベージュと言っていた。なによりレイが身近に感じるのは、青い瞳のせいかも知れない。アズルブルーより透きとおった空の青。中東にも青い瞳の部族がいるというが、ヤイーシュはそういう部族とは関係ないらしい。

本来、重傷者である彼を引っ張り出すのはどうかと思つたが……。様々な事情を考慮し、ヤイーシュの同行を許可した。

『シャムスには事実を伝えずともよかつたのだろうか?』

レイがぽつりと呟いた言葉にヤイーシュが応じる。

『はい。夫が暴動の首謀者として逮捕されたと聞けば、彼女は悲しむでしょう。ターヒルもそれを望みません』

### ターヒルの逮捕。

それは今朝、レイが外務省経由で受けた報告だった。

『だが、ターヒルに万一千ことがあれば』

『たとえそもそも、彼女にできることは神に祈るだけです。それは今、聞かされたとしても同じこと』

厳しいようだが事実である。

レイが無言でいるとヤイーシュが続ける。

『心配には及びません。ミシュアル様が帰国されたのです。必ずや事態を收拾してくださいます。ターヒルは陛下とともに妻を向かえに来るでしょう。私はそう信じております』

バストバンドを装着して胸部を固定し、痛み止めの注射を打つてはいるが、医師からは昨夜も三十八度の発熱があつたと報告を受けている。

『ミスター・キャラハン、君自身はどうだ?』この警戒態勢を見て、充分に納得してもらえたと思うが。君も無茶をせず、ヴィラで静養にあたるべきだと私は思つてゐる』

『お言葉、ありがとうございます。私は以前、ミシュアル様に失礼な振る舞いをいたしました。それにも関わらず、今回、正妃様の警護を任せていただけて光栄に思つてあります。身命を賭して、アーライシャ様をお守りする所存です』

『だが、君に何かあればシャムスのように泣く者もいるだろう』

レイは何気なく尋ねたつもりだつた。

しかし、予想以上にヤイーシュは狼狽し、

『そつ、そのような者は……私に妻はおりませんし、第一、妻はアズウォルド人と決めておりますので。日本にそのような……』

『……？』

逆にレイのほうがどう答えてよいのかわからない。

『さあ、そろそろセルリアン島に戻ろうか。ミシュアルから、タービルを連れてクアルンを出発した、と連絡が入つているかもしだ

い』

レイはヤイーシュを促し、デッキに向かうのだった。

／＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼

『シド！ ラシード、私にはお前の話がわつぱり判らぬ。もう一度、最初から説明いたせ！』

ほんのひと月前、新国王誕生で賑わつた莊厳かつ壯麗な白亜の王宮。

そこに、ミシュアルの怒号が鳴り響いた。

緊急とはいえ国王の帰国である。ドーム屋根の大広間には赤い絨毯が敷かれ、通路の左右に大臣がひれ伏していた。ミシュアルは彼らの間を大股で通り抜け、玉座に座る。そして、呼び出したラシードの報告を受けていたのだが……。

『ですから……報告書どおりです。反日組織を殲滅し、暴動の主犯と曰された男を逮捕いたしました。僕は陛下の命令に従い、父上に

指示を仰いで、リドワーン王子と協力しただけです』

『ラシードはひざをつき、顔を上げないまま答える。

『その“主犯と田された男”が、なにゆえ私の側近ター・ヒル・ビン・サルマーンになるのか、と尋ねている。答えよ』

『それは……先ほども申しましたとおり、父上の署名が施された命令書に従つただけです』

『確かに、父上にはお前をはじめ若い王族が暴走せぬよう、監督をお願いした。だが、父上がご自分で反日組織の捜査をされているなどと聞いてはおらぬ。ましてや私の側近に逮捕状とは何ごとか！？』

『そ、それは……』

ミシュアルが王宮に入ったほぼ同時刻、ター・ヒルの逮捕が伝えられた。

衛兵らの顔ぶれに変わった様子はない。正式な報告以外、彼らから話しかけることはできないので、ミシュアルから質問した。すると、多くの者が『側近中の側近であるター・ヒルがなぜ？』と疑問を口にするだけだ。

それだけではない。

朋友ター・ヒルの危機にどうしてヤイーシュが帰国しないのか。そんな声すら上がった。クアルンではヤイーシュが日本に足止めされていたことも、在日大使館で爆破事件があつたことすら報道されており……。

（なんということだ！ これほどまで徹底した報道規制、情報の遮断が行われていたとは……）

『わかつた！ ではもう一人の責任者、リドワーン・ビン・ワッハイブを呼べ』

『恐れながら申し上げます。リドワーン殿下は今朝、ルシーアの宮

殿におられますカイサル様のもとに向かわれました』

近衛隊長が一步前へ出てひざまずくなり答えた。

『それは私が帰国する、という一報を受けてか?』

『それは……わかりかねますが』

『よい。では、逮捕したター・ヒルをただちに釈放し、私の前に連れてくるのだ』

近衛隊長はうつむいたまま息を飲む。

『国王命令がきけぬか?』

『い、いえ』

『まさかとは思うが　すでに処刑したとは言つまつにな』

その声は、静かだが鬼気迫るものであった。

しんとした大広間に、力チカチと奇妙な音が広がる。ミシュアル国王に正面から睨まれ、歯の根が合わない近衛隊長の口元から発せられていた。

彼は酸欠の魚のようにパクパクと口を開きつつ、

『い、い、いえ。そ、そんな……そのような報告は受けておりません。リ、リドワーン殿下が……カイサル様のご命令とおっしゃり、ター・ヒル殿を連れてル、ル、ルシーアに……』

ミシュアルは少し考え、あらためてラシードに聞いた。

『シード。妻と娘は息災か?』

突然の日本語にラシードはハツとして顔を上げた。

その目にはくつきりと動搖が浮かんでいる。

『お気にかけていただき、恐れ入ります。ふたりとも妻の母であるサマン殿を訪ねておりまして……』

サマン王女が夫と別居し過ごしているのもルシーア地方にある別

邸。

「ラシードの答えを聞くなり、ミシユアルは命じた。

『ルシーアの宮殿に参る。ヘリを用意せよ。』

## (1-2) ロイヤル・ターゲット

ミシュアルはヘリを用意させる間、リドワーンの人柄を思い浮かべていた。

彼は優秀だが腹の据わった男ではない。言われたことだけをこなし、何ごともほどほどで妥協できる人物だ。宗教警察の幹部で軍務経験もあるが、前軍務大臣だったマッダーフとは格が違う。とても、軍を率いてミシュアルに対抗するような勢力など持ちようがない。

海外では王族の特権で、多少羽目をはずしているようだが……。それに関する国際法に触れない限り、ミシュアルも目こぼしするつもりでいる。締め付けが過ぎては、より凶悪な犯罪に走る王族も出てくるからだ。

(ヤツに関しては、手綱の加減を誤ったか?)

ミシュアルは独自のルートでルシーア地方の安全を確認した。そのつえで、王宮の真裏にあるヘリポートに急ぐ。  
そんな彼の後を追いかけてきたのはラシードだった。

「アル……僕も行きたい。連れて行つて欲しい」

「それは認められない」

「砂漠で式を挙げたときは、ふたりともダリヤを離れたじゃないか」

「あのときは父上が国王だった。だが、今は違う」

ミシュアルが帰国するまでラシードが首都を離ることはできない。国王と王位継承順位一位の王子がそろつて王宮からいなくなれば、何か起こるかわからないからだ。

それと同じような理由で、王位継承者が同じ乗り物に乗ることも

禁じられていた。以前、ミシュアルとラシードが砂漠から首都に戻るとき、別々のジーツトヘリを飛ばしたくらいである。七歳以上の王の息子たちには、全員別々の乗り物が用意されるのが慣例となっていた。

テロや内乱が普通に起こりうる情勢で、一度に王位継承者を失わないための策だ。緊急時以外はそれが決まりであった。

ミシュアルに冷たくはねつけられ、ラシードは立ち去っていた。  
「僕の言葉がさっぱり判らない、と言ったけど……。実は僕自身も判らないんだ。本当に正しい行いを重ねただけで、気がついたらアルだけでなく、誰とも連絡が取れなくなっていた。おそらく、みんなもそうだと思ひ」

なんと返したらしいのかラシードの言葉だけでは判断ができず、ミシュアルは無言を通した。

するとラシードは声を潜め、

「ライラとルナ・アーカイシャが心配だ。母上が危篤と聞き、駆けつけたんだが、一度も連絡がない。こんなことなら、ルールを破つても僕がついて行くんだった。……僕が」

泣き言を言い始める。

そんなラシードの胸倉をつかみ、

「馬鹿者！ 妻の言いなりなるお前が愚かなのだ。夫の威儀を保てぬなら、妻など娶るな！ シド、今までなら当たり前のように妻のひとりに迎えてきた。

だが、それは王の判断で回避するとして……。

しかもそのときは、愚かな弟に代わって、ミシュアルがライラの面倒を見る必要がでてくる。これまでなら当たり前のように妻のひとりに迎えてきた。

だが、それは王の判断で回避するとして……。

将来、正妃である舞に男子が恵まれなかつたとき、再び、ライラを妻にという声が上がるのが目に見えるようだ。

ミシュアルの叱責にラシードは言葉を失う。

だが、ラシードの言い訳にミシュアルはある確信を得ていた。今はまだ、クアルン国内において何も起こっていないのだ、と。間違いなく、リドワーンによつて情報操作され、混乱を招いているのは事実だ。しかし、まだ反乱といえる段階ではない。

彼はミシュアルをルシーアの宮殿に呼び出し、こいつたいどんな要求を突きつけるつもりなのか。

ミシュアルの力を殺ぐ為、ターヒルとヤイーシュを遠ざけたのはわかる。だが、それにしてはヤイーシュに対するやり口が辛辣すぎる。まるでヤイーシュは殺しても構わない、というような……。

『国王陛下、ヘリの用意ができました！』  
『わかった』

（ヤイーシュをアズウォルドに残してきて正解だつた。いろいろ含むところはあるが、ヤイーシュなら舞を守るだらう。それでも何かあつたときは……）

最悪の場合にならぬことを願いつつ、ミシュアルはヘリに向かつて足を進めた。

／\*／\*／\*／\*／\*／

アズウォルド王国、空の玄関口に一機のプライベートジェットが着陸した。ジョン・F・ケネディー国際空港から飛んできた民間機

である。

そして海上工アポートに降り立つたのはひとりの男。彼は黒いステッツを着込み、手にアタッシュケースを持っていた。

「ようこそ、アズウォルドへ。パスポートを拝見いたします」

男は背広の胸ポケットからパスポートを取り出し、入国カウンターにいる女性職員に渡した。

それは赤い表紙で“日本国”と金字で書かれている。

「恐れ入りますが……」

女性職員はにこやかな笑顔をくずさぬまま、男に声をかけた。すべて言われずとも男は察したようだ。右手で黒いサングラスをはずす。

男は一八〇を軽く超える長身だった。体格はスッキリしていて、とくに危険なムードをかもし出しているわけではない。だが、彼が身にまとつ空気は独特なものであつた。

そして女性職員は男の素顔を見た瞬間、息を飲む。

そのまま十秒あまり、彼女は無言で見惚れ続け。

「失礼。先を急ぐんだが」

耳ざわりの良い、艶のあるバリトンが女性職員の耳に届く。彼女は頬を赤らめ、自らの想像を恥じるよつにうつむいた。

男の言葉はパスポートにふさわしく日本語で……だが、サングラスで隠した瞳の色からは想像しがたい言葉であった。

／＊＼＊／＊＼＊＼

入国カウンターの職員の間で、ひとりの日本国籍を有する男性が話題になつた同じ夜

セルリアン島の国立リゾート・スパは闇に包まれていた。時刻はすでに深夜、本館から数人の人影がヴィラの方角に小走りに向かう。彼らの目指す方角にあるのはVIP専用のヴィラが立ち並ぶ一帯。一軒のヴィラを取り囲むように、彼らは息をひそめた。

やがて、ひとりが何かを取り出し、カード認証システムに翳す。赤いランプがグリーンに変わり……それは、ロック解除の表示だつた。

客のプライベートと安全を考慮して、屋外のみ二十四時間稼動という最強の防犯システムだ。ヴィラだけでなく、リゾート・スパの敷地全体にセンサーが網の目のように張り巡らされている。

ということは、である。前の晩、舞がこっそりヤイーシュのヴィラを訪ねようとしたことも警備室には筒抜けだったのだ。

ヤイーシュは事前に「妃殿下がヴィラを出られるようなときは、ただちに連絡を」と警備室に頼んでいた。半信半疑の担当者だったが……。ヤイーシュはあらかじめ、舞を待ち構えていたことになるのだから、タイミングよく助けられて当然であるう。

扉は音もなく開いた。

正面玄関横にあるキー管理システムで、建物内のロックが一斉に解除される。カードを手に認証システムを突破した男がインカムに向かつて小さな声で囁いた。

そこから漏れ聞こえてきたのは……。

### (1-3) 真夜中の訪問者

室内のカーテンが風になびいた。吹き込んだ海風はどこか生暖かく、室内的温度はわずかだが上昇する。

その部屋の中央にベッドがあつた。窓際にある大きなソファは、ミシユアル国王が氷を使って舞に悪戯した場所である。ベッドサイドのポールハンガーにはアバヤが掛けられ。

そこは、舞の滞在するヴィラで間違いなかつた。

ベッドは素朴な木を組み合わせた天蓋で囲まれている。目の粗いカーテンが下がつており、侵入者のひとりがカーテンをつかむと力任せに引き千切つた。

『我らは“愛国の戦士”である！　日本人女は先代国王を誑かして、尊きクアルン王家の血を汚した。それだけにとどまらず、新たな女を送り込み、正妃の座まで得ようとは。我らはこれ以上、不浄な血が混じつた王は認めぬ。外国人の血は力によつて排除する！　アツラ－のお望みのままに』

男はアラビア語で叫ぶと、ベッドの中央に横たわる人物に向かつて、小ぶりのジャンビーアを振り下ろした。

本来なら拳銃を使いたかったのだろうが、今のアズウォルドは特別に警戒が厳しい。お守り代わりのジャンビーアを持ち込むのが精一杯であろう。

ジャンビーアを突き立てる寸前。

薄い掛け布の下から男は腹を蹴り上げられ、もんどうり打つて後ろに倒れた。侵入者たちの顔色が一瞬で変わる。

『やれやれ、あまりに遅いので本当に寝てしまうといふだった』

『なつ！ 貴様は……』

ベッドから半身を起こしたのはヤイーシュだ。

もちろん、舞の姿はどこにもない。

『なぜ貴様がここにいる…？』

『異なることを。お前たちを捕まえるための罠に決まっておるづ。何のために、わざわざ妃殿下を島の外に連れ出したと思つている？ 舞がいなくなれば島の警備は手薄になる。そしてなるべく隙を作り、侵入者をこの島におびき寄せた。当然、舞がこの島に戻つたはずがない。

ヤイーシュはゆっくりとベッドから下りた。髪を後ろで束ね、上半身は裸、下半身にはトーブの下に着用する白いズボンをはいている。足は裸足だ。

そして、武器らしき物は何も持つていなかつた。

彼は侵入者の前で仁王立ちになり、

『顔を隠しているところを見ると、どうやら無事に逃げ出せると思つていたらしいな。愚か者が！』

そう吐き捨てる。

ヤイーシュの怒声に、男は顔に巻いたグトラをはずした。

『やがましい！ アメリカ人の血が混じつた出来損ないのシーグが！ 貴様が王の側近など笑わせるな』

男は先日の爆破事件直後、本国から在日クアルン大使館に派遣されてきたひとりであつた。

どうやら、彼らのパスポートや身分証は本物らしいが、本当に派遣されてきたわけではないようだ。それらの手配はリドワーン王子にも可能だが……。

黙り込むヤイーシュに向かつて男は挑発的な言葉を口にする。

『雑種というのは、生命力だけは旺盛でたちが悪い。車を爆破して

死んだと思ったのに、まんまと生き残りおつて『

『あれしきで死ぬ者などおらぬ。かすり傷だ』

ヤイーシュは腕組みをして侵入者たちを見据えた。

バストバンドは装着せず、骨折などなかつたかのように振る舞う。弱味を見せては終わりだ。それは砂漠で生きる野生動物のような本能だつた。

男は悔しそうに、

『どうせ王に異国の女を娶るよう、そそのかしたのも貴様らであるう』

『何を馬鹿な。王の婚約は十五年も前に決まつたことではないか。当時は王弟殿下の第一王子であられたが。王はアッラーの誓いを守られただけだ！』

『欺瞞にすぎぬ！ ラフマーン国サティーケ王子まで利用して、日本人女を正妃につけるとは。あの日本人女を生かしておぐと、いずれ我が国の資源は日本に吸い尽くされるのだ！』

そう叫ぶと、男たちは一斉にヤイーシュに斬りかかった。だが戦闘には適さない室内である。ヤイーシュは最初にかかつてきた数人を叩き伏せ、次にリーダー格の男を捕まえた。そのまま、彼らへの盾にする。

『騒ぐな！ 庭を見てみるがいい』

次の瞬間、庭からヴィラの建物に向かつてライトが照射された。室内はまるで昼間のように明るくなる。沖にはアズウォルドの戦艦が、浜からは兵士が階段を上がつてくるのが見えた。

そして庭に待機しているのは島内の警察官だ。彼らの先頭に立つのが、レイ国王の命令を受けた王宮警察に所属するニック・サトウ。本来は国王専属の警護官として王宮に勤めている。ミシユアル国王ほど大柄ではないが、ヤイーシュと遜色ないほどの体格をした強面

の男だ。

そのニックが拳銃を手に一歩屋内に踏み込んだ。

「ここの建物だけでなく、国立リゾート・スパの周囲は警官が、そしてセルリアン島は海軍が包囲した。逃れる道はない。投降しない場合、射殺が許可されている。小さな島国だと甘く見られては困る。我が国はテロリストに対して容赦はしない」

ニックのアズウォルド英語をアラビア語に訳し、ヤイーシュは男たちに伝えた。

加えて、

『この国はテロにより国王を殺された過去がある。暴力により歴史を動かそうとする者には容赦がないぞ』

『我らはアッラーの教えに……』

『王に背き、正妃の命を狙う不屈き者に、神の名を口にする資格などない!』

ヤイーシュの手の中で“愛国の戦士”を名乗る男は力なくうつなだれた。

～\*～\*～\*～\*～

セルリアン島に一旦戻つたものの、ヤイーシュだけ降ろし、舞とシャムスは本島に行くことになった。

王宮での夕食に招待されたからだ。

レイ国王とティナ、それにレイ国王の大伯父にあたるリューク王子夫妻と彼の孫アーロン王子も一緒だった。アーロン王子はレイ国王の異母弟でもあるといつ。真面目そうで口数の少ない十三歳の少年は、淡い茶色の髪とアズルブルーの瞳がレイ国王によく似ていた。

『遅くなつたので国賓室に泊まつて行くといい』

夜も更けて、舞はレイ国王の言葉に従つ。

ミシユアル国王がいつ戻つてくるのか、夕食の席で聞くことはできなかつた。だが、一夜明けたら聞く機会もあるだろ。そんなふうに考えたからだ。

王富正殿の国賓室はふたりでも広いのに、ひとりだと寂しきる。シャムスに一緒にいて欲しいと頼んだが、ヤイーシュに代わつて付いてきていたダーウードが、

『王妃と女官が同じ部屋で寝るなどとんでもない!』

と喚き、舞はひとりきりになつたのだつた。

(ダーウードの石頭つーほんと、生きた化石なんだから……)

昼間も、そして夕食の間も、ティナたちは舞の寂しさを紛らわせてくれようと思つた。

そのことがわかるだけに、舞も精一杯明るく笑つたつもりだ。でも……どんなにキレイな景色も、美味しい食事も、これ以上望めないような豪華な部屋を与えられても、ひとりでは色褪せる。ミシユアル国王が一緒でないと心細さが付きまつた。

舞は天井の豪華なシャンデリアを見上げ、目をこすつた。

「アルの馬鹿……。早く迎えに来ないと、日本に帰つちゃうからね

小さな声でポツリとつぶやいた。

カタン……トッ……カチャ……

最初は夢かと思った。

でも、舞の眠りを妨げるような音が先ほどから聞こえてくる。舞は夢見心地のまま、近づいてくる足音に薄く目を開けた。天蓋から呑のやれたカーテンの向こうに、黒い影がボンヤリと浮かぶ。

「……アル……？」

舞は半分眠つたまま声にした。

直後、ふわりとカーテンが揺れ……月光を背に黒い影が目に映る。その影は舞に向かってゆっくりと手が差し伸べ……。

（く、んな夢だなあ……じつせなら、アルの夢が見たいの）

舞はボケた頭でそんなことを考えていた。

刹那 伸ばされた手が舞の口を押さえたのだ。  
急に息苦しくなり、

（う、これって、ひょっとして、夢じゃないんじや……）

闖入者が手を振り上げたように見え、その先が月光にキラリと反射して

(1-3) 真夜中の訪問者（後書き）

御堂です。

「覧いただきありがとうございます。」

ロマンスから離れてこいつてますか…

えーっと (\* \* ) テヘ ( 笑って ) まかす

執筆予定が厳しく、今月こいつぱい週一回の更新になります。(\* ; )

人)

完結一気読みも歓迎!!

よろしくお願いします。

## (1-4) 異国から来たナイト

舞は、ギュッと目を閉じ、覚悟を決め……たりするわけがない。

光つたのが刃物なら、ここで諦めたら間違いなく殺される。得意な蹴り技を披露したいが、横から押さえられていては足が届かない。舞の手元にあるのは羽根枕くらいで……。

舞は枕を手でつかみ、思い切り振り回した。

次の瞬間、枕が切り裂かれ、寝室に最高級のグレーダックダウンの羽根が舞つた。

(も、もつたいたなかつたかも……)

なんて思ったが、命には代えられない。

舞は飛び起きて入り口のドアに向かう。だがそこには、鍵がかかっていたのだ。

仮にも国賓室のドアである。日本の家にありがちな、ボタンを押したり、力ちりと捻つたりする簡単なタイプの鍵じゃない。

どうしりしたドアに丈夫そうな真鍮製のドアノブ。ノブの下に鍵穴が一つ。特殊な鍵を使って、中からのみ施錠できると聞いていたが。

(あ、あれ、鍵かけて寝たつけ？ いや、そもそも鍵つてドコにあらのつ！？ 第一、表に警備兵が立つてゐるから、逆に鍵はかけないほうがいいって言つてたんじや……)

「なつ、なんで開かないのよーつ！」

後ろに人の気配を感じ、舞は振り向いた。

暗闇の中、侵入者が舞に向かって突進してくる。その手には、間違いない刃物が握られていた。

「たつ、助けてーつ！ ドロボー！ ヘンタイ！ 変質者よーーつ！ 誰か来てーつー！」

舞は声を限りに叫んだ。

ところが、外から警備兵の駆けつける様子がまつたくない。

（ど、どうなつてゐのー？ 職務怠慢だつてばつ）

部屋を見回し武器になりそうなものを探すが、壊したらマズイような骨董品ばかりだ。しかも、軽くてコンパクト 繊細な陶器か宝飾品ばかり並んでいた。

（なんで甲冑とか槍とか飾つてないのよー。防犯用のバットくらい置いといてよー）

槍を持つてどうする氣か、と聞かれたら困るが……。

とりあえず、舞はソファを飛び越えながら、テーブルの上にあつた大理石の灰皿をつかんだ。

「あなた誰つ？ わたしをクアルン王国王妃、アーライシャ・モハメツド・イブ？ アブ？ いや、ラブ？ ……サドがどうとか。とにかく！ わたしに何かあつたら、ミシコアル国王が黙つてないわよつ！」

今夜の舞はハネムーンにぴつたりのヒラヒラネグリジエ姿である。しかし、片手に大理石の灰皿を持ち、もう片方の手には、まだ切れないので羽根枕を持っていた。お世辞にも、強そうとは言いがたいファイティングスタイルだ。

舞の名誉のために付け加えるなり。普段は自分の名前くらいスラスラ言える。

でも寝込みを襲われたうえ、刃物を手に追い回されでは、とても平静ではいられない。

闇の中、侵入者は黒ずくめの服装をしていた。ベッドの反対側なら月光が射しているが、こちら側は目を凝らしてもほとんど見えない。だが、立ち上がった舞と視線の位置がほぼ同じ。ということは、男性なら、さほど大柄でない人物ということになる。

そして舞は、その目に見覚えがあった。

(ま、まさか……ね。そんな……いくらなんでも)

侵入者は刃物を腰に仕舞う。

しかしそれは撤退を意味したものではなく……。懷に手を差し入れ、黒光りするモノを取り出したのだ。

「ちょ、ちょっとソレって反則……！」

羽根枕と大理石の灰皿で、どうやつて拳銃の弾が防げるだろうか。舞はとりあえず前に突き出し重ねてみると……効果はなさそうだ。「な、なによ！ 仮にも殺そうっていうんなら、名前くらい名乗りなさいよねっ！ わたしを殺したってなんにも変わりはしないんだからっ！」

せめて時間稼ぎになれば。助けが来るまでの……。

そう思つたとき、舞の胸にイヤな予感が走つた。

「ちょっと待つて！ あんたつてば、まさか外の警備兵を殺したの？」

さすがの舞も声が震えた。

何度かピンチには陥つてきたけれど、今度ばかりはヤバイかもしない。なんといっても、ミシユアル国王は舞の近く……どころか

この国にはいないのだ。ヤイーシュもセルリアン島に置いてきた。  
しかも怪我人。

頼みの綱はレイ国王だが、賊がここまで入ってきて、しかも騒ぎになつていないと云ふことは……。

（……手引きした者がいるんだ。王宮のほうは誰も気づいてないかも）

冷たい汗が背中を流れた。  
黒い光がピクリと動き、舞はとつさに灰皿で頭を覆い、しゃがみ込む！

舞の耳に ガンッ！ と何かが壊れる音が届き、続けて、パンッ！ ともう少し軽めの空気を震わせる音が聞こえた。

／＊＼＊＼＊＼

「大丈夫か！？ 怪我はないか？ 返事をしろっ！」  
「ア、アル？ アル……アル……アレ？」

発砲音のあと、舞の耳に聞こえてきたのは間違いなくミシュアル国王の声だった。

そして腕をつかまれ、舞は彼に抱きついたのだ。だが、どうも……なにかおかしい。

（声は同じなんだけど、なんか……違つ氣がする。胸板の厚さとか……それに、砂漠の匂いがしないような……？）

舞は体を離し、助けてくれた男性の顔を見上げた。

暗がりにミシュアル国王と同じ、琥珀色の瞳が光った。やっぱりアルだ。と思った直後、髪の長さが違うことに気がつく。それに、色も真っ黒に見える。ミシュアル国王はチョコレート色なので、暗がりでも仄かに明るいのだ。加えて、見上げる首の角度が低め。普段は真上を向くようになるはずで……。

「あ、あの……どちらさまでしょうか?」

「その前にすべきことがある」

声は恐ろしいほどミシュアル国王に似ている。目を閉じて聞いていたら、わからないくらいに。

彼は舞を自分の背中に庇い、左手に持った拳銃をうずくまる黒ずくめの男に向けた。

「貴様は……いや、貴様は王家に背いた愚か者だ。恥を知れ　ダーウード!』

日本語が、いきなり流暢なアラビア語に替わった。そして、彼の口から発せられた名前に舞は叫んだ。

「ダ、ダ、ダーウードって言つた?」

舞もよつやく暗がりに目が慣れる。黒ずくめの男が口元の布を下ろし、こちらを睨んでいた。どうりで、鍵を持つているつえに、簡単に入つてこれたはずだ。

ヤッパリといつ思い、そして、まさかといつ思いが胸の中を駆け巡る。

「なんで?　なんで、こんな……」

『下賤な女め!　私はアラビア語以外の質問に答えるつもりなどない!』

『えつと……どうして、わたしを殺すの？』

『決まつておる。お前はすでに王の種を宿しておるやも知れぬ。殺さねば、次の王にはさらにお穢れた血が混じる』

きつぱりと言い切られ、舞はそれ以上なにも聞けない。

『同志をセルリアン島に送り込み、ヤイーシュの動きを封じたついに。まさか、あなたがこの國におられるとは……』

『……アルの頼みだ。断るわけにはいかない』

『ミシユアル国王のせいで婚約者を失いながら、それでも命令には従われる、と。美しい兄弟愛ですな』

『命令ではない！ 奴が自ら歩み寄り、私に頼みごとをするなど……よほどの事態だ。國は捨てたが、神と家族は捨てていない。引き受けた以上、命に代えてもアーカイシャ妃とその御子は守る。アツラーの名にかけて』

ふたりは早口すぎて舞には理解できない部分も多い。だが“兄弟”という単語はしっかりと聞き取った。

「兄弟？ 兄弟って……ひょっとして、アーテル……いや、アティール王子？」

「笹原でいい。アーディル・ビン・カイサル・アール・ハーリファ」という名前もある。だが……笹原公平のほうが覚えやすいだろ？「

声は似ているが温度が違う。ミシユアル国王ならすぐに怒鳴るところだが、この笹原は常に抑制されたトーンで話すのだ。

そして舞は思い出した。彼の名前が“公平さ”を示す言葉だ、と。

『それはそれは立派な心構えですな。やはり、王位継承権は捨てても、保守的なあなたこそ王位にふさわしい。ラシード王子では国が

割れるやも知れぬ。ミシュアル国王も最期によいことをされた。こうして、あなたを呼び戻されたのですからな』

舞の耳に飛び込んできた“死ぬ”<sup>ヤムトウ</sup>といつ単語に心臓が大きく跳ね上がり。

## (1-4) 異国から来たナイト（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

「」で登場、第一王子です（笑）

彼は日本国籍で日本名を持っています。

彼がヒーローのお話はこの数年後、いつか発表したいと思っています。

うーん、結婚2ヶ月目で未亡人になりそうな舞ちゃんですが…

す、すみません、また来週（^ ^ ;）

よかつたらお付き合いくださるませ。

## (15) あの朝の別れから

頑丈なドアのノブが見事に壊れ、ドアは開いたままになっている。そしてベッドの近くで肩を押さえ、ダーウードは跪いていた。最初の発砲でドアの鍵を壊し、一発目で彼の肩を撃ち抜いたらしい。

アーディル王子こと笹原はかなりの頼りがいのある人物のようだ。……それはともかく。

『ダーウード、それはいつたい……』  
「ちょっと、ダーウード。今なんて言つたのっ！？」

義弟を押しのけ、舞はダーウードに詰め寄る。すると

しかし次の瞬間、ダーウードは一旦おさめた刃物……ジャンバーを手に斬りかかってきた。小振りで日本の出刃包丁くらいの長さだが、殺傷能力は充分にありそうだ。

笹原が慌てて飛びつこうとしたが……。

しかし、今の舞はさつきの彼女とは違う。

相手は利き手を動かすこともできない。それに、平均よりはカクシャクとしているものの、ダーウードは七十近い高齢だ。

思えば、闇の中とはいえ敵が笹原のような若い男だつたら、舞は逃げ切れていなかつただろう。

ダーウードが斬りかかるといつてもかなりゆっくりで、舞は手にした大理石の灰皿でジャンビーアを叩き落した！

『無礼者！ 聞かれたことに答えよっ！』

舞はミシコアル国王の口調を真似て叫んだ。

ところが、笹原もダーウードも目を見開いて驚いている。

舞はとたんに不安になり……「わたし、なんか間違ってる?」と

笹原に尋ねた。

「いや……だが、男言葉で怒鳴る王族女性は私の記憶にはないな。まあ、最近のことわからぬが」

そういうえば、以前ターヒルが『発音は正確に、そして女性形と男性形があるので、英語と同じように考えてはいけません』なんて言つてた気がする。

では、女言葉でどう言えばいいのか、ひとつに出てくるものではない。

『だが、ダーウード、妃殿下のおっしゃるとおりだ。聞かれたことに速やかに答えよ。貴様が国王を手にかける、愚か者ではないと信じたいが……』

舞が悩んでいる間に、笹原がダーウードに尋ねた。

『さあ、私は存じませぬな。ただ、本国には日本人女を正妃にした陛下をよく思わぬ人間もいる、とだけ申しておきましょう』

『アルに妙な真似したら、ただじや済まさないから!』

『日本語の質問に答えるつもりはない』

舞はズンズン歩いて再びダーウードに近づく。さすがに大理石の灰皿はまずいので、もう片方の羽根枕で彼の頭をぶん殴つた。いくら柔らかい枕とはいえ、思い切り殴われたら平手打ちくらいの威力はある。

『答えなくてもいいわ! 覚えときなさい。アルになにかしたら、あんたを殺してやる! ゼッタイに許さないから!』

激昂して怒鳴る舞に比べて、笹原はずいぶん落ち着いた声だ。

「その脅しは意味をなさないだろうな」「ど、どうして？」

「この男はあなたを襲った時点で死刑が確定している。本国に戻りしだい銃殺。残つても、アズウォルドの王宮正殿で國賓を殺傷しようとしたんだ。この国の死刑は絞首刑。生き残る道はない」

笹原の言葉にダークワードは頬を歪めた。どうやら、彼は答えたくないだけで、本当は日本語もわかつているらしい。

「とにかく、一刻も早く、アルに連絡しなきや……夜中で悪いけど、レイ国王を叩き起こして」

舞がそこまで言ったとき、噴水の間の向こうへ、廊下のほうから大勢の足音が聞こえてきた。

その直後、隣の部屋から拳銃を手に、レイ国王が飛び込んできたのだ。

「アーリシャ殿！ お怪我はありませんか？」

背後には警備兵や警護官たちの姿が見え、一斉に国賓室になだれ込みそうになる、が……。レイ国王が手で制し、その間に笹原がベッドサイドのアバヤをつかんで舞の頭からかぶせた。

当の舞には、とてもそんなことまで気を回す余裕がない。

「申し訳ない。衛兵たちに大使館員は通すな、と伝えたのだが、ミシユアル国王の側近はノーチェックで通すようになつっていた。妃殿下にお怪我がなくて何よりです」

何よりだと、言つてレイ国王の顔色が真つ青だつた。  
彼は舞の隣に立つ笹原に目を留め、

「ミスター・ササハラ、君の機転に感謝する

短く礼を口にする。

「いえ。勝手な真似をして失礼致しました。身元を確認してから、明日、アーライシャ妃にご挨拶を、と言わっていましたのに。何卒、お許しください」

この笹原は仕事でアメリカに入国していたが、そこからアズワオルドに予定外の緊急入国をしたのだという。

（別に途中で寄り道くらい……）

と舞は思ったが、そう簡単にはいかないそうだ。

彼のように、王子の称号を持ちながら多国籍、という微妙な立場の人間はそう多くない。というか、反乱軍に国を追わされて亡命するような人物と同じ扱いになり、滅多にいない。

公式にボディガードなどはつけられないが、彼の身に何かあれば国家的な問題に発展する。

行く先々で、笹原の行動は常に監視されていた。『安全に配慮して』といえば聞こえは良いが、まるで刑事案件の容疑者のように居心地は悪いだろう。そんな彼が、兄・ミシユアル国王からの書簡を受け取り、独断でアズワオルドに入国したのだという。

普通なら、大使館を通じ事前に入国先の許可を得る。でも彼は今回、そういった手順を一切無視した。

誰にも知らせ入国し、直接この王宮を訪ね、レイ国王にミシユアル国王の希望を伝えたらしい。

「書簡つてなに？ アルはあなたになにを頼んだの？」

舞はアバヤをかぶつたまま、笹原に向かつて尋ねる。

しかし、言葉を返したのはレイ国王のほうだった。

「アーライシャ殿。テレビをかけさせてもらうが……構わないだろうか？」

「は？ テ、テレビですか？ はあ、それは別に」

言葉の内容に気が抜けたが、レイ国王の声はまだ緊張を孕んでいた。

（なんだ、こんなときにテレビ？　でも、逆らつて逆らえない…  
…）

胸の中でふつぶつ言いながら、舞は黙つてみていた。

すると、エアコン用と思つていてリモコンを彼が手に取ると、ワントッチで壁がウイーンと上にスライド！　そして、超大型のフルツースクリーンテレビが姿を見せる。

「す、すごい！　こんなトコにテレビがあつたなんて！？」

「何日も滞在して……君たちはテレビも見ていなかつたのか？　それはいつたい、なにを」

レイ国王は呆れた声を出すが……飛行艇の中で繰り返した同じやり取りを思い出したらしく、咳払いして途中で口を閉じた。舞も気持ちは同じだ。

ちょっとと時間があればエッチな」とばかりで、ミシコアル国王は舞を片時も解放してくれなかつた。綺麗で高価そうな骨董品ばかりの部屋だ、と思っていたが……この分なら、他にもいろいろあるのかも知れない。

（もうつ、アルつてば！　心配は心配だけど……そのへんのところ、一回はハツキリ言つとかないと…）

舞がミシコアル国王の顔を思い描いた瞬間、その大型画面に彼の顔が映つたのだ。

イケメン＆美人アナウンサーがちょっと慌しいスタジオのセットに並んで座り、早口で原稿を読み上げている。

画面の上部には『a news flash』の文字があった。

「ニュース速報だとはわかつたが、字幕なしにアズウォルドの英語でまくし立てられたら……舞は「ちよつと待つて！」と言いたくなつた。

『……まさか……そんな嘘だ……』

舞の隣に立つ笠原がレイ国王以上に真っ青になり、アラビア語で咳く。

「え？ なに？ なんて言つてゐるのよ。ねえつて……」

その直後、テレビから舞にもわかる日本語で女性アナウンサーが話し始めた。

繰り返します。クアルン王国政府は、本日未明、ミシュアル・ビン・カイサル・アール・ハーリファ 国王の乗られたヘリが墜落し、国王陛下の死亡が確認された、と発表しました。同国王は即位して二ヶ月と日も浅く、王太子の席も空白であつたことから、政府はただちに王族を召集し、後継者の選出にあたると……。

## (16) 涙は流さない

「アーリシャ殿、今、こちらも大使館を通じて事実確認を急いでいる。政府の発表と言われているが、どうやら王室の長老会議の発表と受け取ったほうがいいようだ。とにかく、正確な情報を入手するまで、いたずらに悲しまないよう」……

レイ国王がそう言って舞を励ました直後、背後で狂氣めいた笑い声が上がった。

ダークードだ。彼は手錠をはめられ連行されながら、

『イン・シャーアッラー！ クアルン王国万歳！』

呵呵大笑と勝ち誇った声でアラビア語を叫ぶ。レイ国王は警備兵に小さな声で「黙らせろ」と命じた。

舞は国賓室から王宮に移るようつに言われ、素直に従つた。笠原は何か言いたそうだったが、レイ国王に明日にするよう言われ、彼もおとなしく引き下がつたのである。

～\*～\*～\*～\*～

何があつても朝は来る。

舞はそのことを実感しながら、短い眠りから目を覚ました。

天井にはこれまでと違つシャンデリアがぶら下がつてゐる。王宮は壁や柱、調度品に大理石が多く使われてゐるせいか、全体的に涼しげなイメージだ。

日本にすごく近い気がするのに、アズウォルドは常夏の島なんだなあとあらためて思う舞だった。

ベッドは国賓室のものより少し狭い。

女官長のスザンナが、

「突然のことでお支度が充分でなく、申し訳ございません」  
そんなふうに謝っていた気がする。

だが、実を言えばよく覚えていないのだ。

眠っているところをいきなり襲われた。

で、ミシュアル国王に助けてもらつたと思ったら、実は初対面の  
アーディル王子こと笠原公平と名乗る人物。しかも、舞を襲つた犯  
人は……先代国王から側近を務めて来たダークワード。  
決して私欲に走る人物とは思えない。そんな彼に殺したいほど憎  
まれていたのか、と思うと……。たとえ苦手なダークワードとはいえ、  
かなりキツイ。

しかもラストは、ミシュアル国王の死亡が確認された、なんてい  
う馬鹿げたニュース。

（ダークワードも呑気に笑つちゃつて、バッカじやないの！？ あの  
アルが簡単に死ぬもんですか！）

ハッキリ言って、舞は全然信じていなかつた。  
彼は言つたのだ 『必ず戻る。それまで、おとなしく待つよう  
に』と。

「アルが戻るつて言つたんだから、ゼッタイ迎えに来るに決まつて  
るじゃない！」

舞はあえて大きな声で言つた。

誰に聞かせるつもりじゃない。ただ、自分の心にちらちら顔を出  
していく弱気の虫を、思い切り叩き伏せたかっただけだ。

そして、長くて苦しい、怒涛の一日が始まる。

まず、文字通り飛行艇で飛んできたのがヤイーシュだつた。シャムスは朝になつて事態を聞き、舞のもとに駆けつける。そして顔を見るなり、抱きついて泣きだしてしまつ。

「陛下が……陛下が……」

そう口にしたまま言葉にならな。

「シャムス？ ねえ、ちょっと落ち着こ<sup>ムツヅク</sup>」

舞はシャムスを宥めようと声を掛けるが、

「アーリシャ様はどうしてそんなに落ち着いておられるのです！ 逆に怒られる始末だ。

「いや、気持ちはわかるけど……わたしは信じてないから。誰になんと言わっても、アルの死体をこの田で見るまで、死んだなんてゼッタイに信じない！」

キッパリと言い切る舞をシャムスは唖然とした顔で見上げている。

そして、シャムスは悲しげに微笑むと、小さく首を振つたのだ。

「アーリシャ様には報告いたしませんでしたが、私の旦那さま……ターヒルさまは反日組織に味方し、暴動を企てた首謀者として指名手配されたのです」

「なつ！？ なんなのよ、それはつ！」

それは、いきなりの出来事だったといつ。

ターヒルは自身の部下からもたらされた情報に、妻を連れて飛行機で国境沿いの町に移動した。そこで馬を調達。シャムスも気づかぬうちに、ターヒルはラフマーン王国のサディーク王子と連絡を取り合つていたらしい。砂漠の国境を少し越えたところでサディーク王子一行と落ち合つた。

そしてター・ヒルは、シャムスをサディーク王子に預け、自分は首都に戻つたのだった。

「どうして？ 指名手配されてるの……」「陛下から、不在中はご両親様とリシード様一家をお守りするよう、そう言われているから、と」「ば……」

バカじゃないの？ と言いかけて舞はやめた。

それがター・ヒルという男なのだ。彼ならきっと、殺されるとわかつていても、ミシユアル国王の命令とあれば戻るだろう。

シャムスは「ター・ヒルさまもすでに……」そう呟くと、再び泣き崩れた。そんな彼女の背後から、言い辛そうにヤイーシュが口を開いた……。

「シャムス殿、気を確かに持つて聞いて欲しい。実は昨日の朝、ター・ヒルが逮捕されたとの一報を受けた。私の判断で、あなたには伝えなかつた」

舞の横でシャムスは息を止めた。

そんな彼女に代わつて舞が尋ねる。

「ど、どうして？ なんでそんな大事なこと黙つてるのよ！」

「彼女が知つてもできることは何もないからです。ならば……私がター・ヒルなら、妻に無用な心配は掛けたくない、と思うでしょう」

ヤイーシュの言葉は正しい。

アズウォルドに来てから、シャムスはずつと打ち沈んでいた。ター・ヒルが心配でならなかつたのだろう。そんな彼女が“逮捕”なんて聞いたら、もっと悲しむに決まっている。

ター・ヒルだつてそんなことを望んでいないのはよくわかる。わかるけど……。

(それが男の理屈だつて、なんでわかんないのよつー)

どれだけ辛くとも愛する人が窮地に陥つてゐるのだ。知らないより、知つていていい。それが女心というものである。

ヤイーシュに怒鳴つてやりたい。

舞はそう思つたが……。主君や盟友の窮地に、一万一千キロも離れた異国のにいる。しかも深い傷を負つて。プラス、きっとヤイーシュにも『正妃を守れ』とか、ミシユアル国王が命令したことは容易に想像がつく。

苦悩に満ちた彼の横顔を見ていると、舞は怒鳴るに怒鳴れなくなつた。

「えーっと。でも、それつて……逮捕されたからつて、すぐ『ビビつこつされるつてわけじゃないわよね?』

「もちろんです。通常であれば公正な捜査がなされ、裁判となるはずです。しかし、ヘリ墜落の件といい……。残念ながら、今のクアルン王国の法律は、新しい権力者の手に委ねられていると見るべきでしょう」

「ちょっと待つてよ、ヤイーシュ！ 新しい権力者つて……シャムス！」

舞がヤイーシュの言葉に噛み付こうとしたとき、シャムスが床に倒れこんだ。とうとう、神経が持たなかつたらしい。

彼女たちが話をしているのは、王宮内の舞に『えられた部屋の一部室。

気を利かせて外に待機している女官たちを呼び、シャムスを奥の寝室で寝かせてもらうように頼む。

「私も陛下の死を信じてなどいません。ですが、篡奪者が存在する

「」とは紛れもない事実！ ならば、戦つのみです「

ヤイーシュの青い瞳は怒りに燃え、血走っていた。

沈着に見える彼だが、実はかなりホットな性格なのかもしない。そつ思つと、舞はカツと頭に昇つていた血がスーと下がつていく。

「戦つて。ねえヤイーシュ、ちょっと落ち着き

『具体的な策はあるのか？』

舞の言葉を横から奪つたのは、部屋の隅に控えていた笹原公平。その声を耳にした瞬間、舞はドキンとする。

そんなことを気にしている場合ぢやないのだが、彼の声はあまりにもリナル国王に似すぎていて、胸が高鳴るのだ。

『まずは陛下の生死を確認せねばなりません。そのためにも、なんとしても国に戻らねば』

『しかし、ヤイーシュ。お前は身分証すらあるまい。帰国するなり、拘束される可能性もある』

「……ねえ、ちょっと、わたしの話も……」

『そのようなこと 我がアル＝バドル一族が黙つてはおりません！ 無論、正攻法で入るつもりは』

『ならば私に考えがある。見よ。これが私の手にある以上、長老会議にも文句は言わせぬ！』

「ちょっと… 人を無視して話さないで……え？」

笹原が取り出したのは

「それってアルが持つてたジャンビーア？ なんで……じつしてあなたが持つてるわけ！？」

それは、ヤイーシュと決闘したときや、元軍務大臣の部下たちに

襲われたとき、ミシユアル国王が手に戦つた“王太子の剣”であつた。

## (1-7) 解決策は結婚

「書簡に書かれてあつたことは一つ。なんとしてもこの国に入り、ヤイーシュと協力して正妃殿下を守るようだ。そして、レイ国王陛下にお預けした品物を受け取り、クアルン王国の慣例に従え、と」

笛原が淡々と話した内容は、舞にとつて『ミシュアル国王の死亡』報道』より衝撃を与えた。

まず、ミシュアル国王がレイ国王に預けた品物というのが“王太子の剣”。ハーリファ王家に代々伝わり、次の王に選ばれた者のみ手にすることができる。

舞はこのとき、心臓をギュウと掴まれた気がした。

（弟に王位を譲ること？ それって……アルは最初から危険を承知で帰国したわけ？）

でも、笛原が続けた言葉は、舞の想像を二、三段飛び越えた内容だった。

「誓つて言つが、私は“王太子の剣”を受け取るつもりはない。これは、彼の息子に引き継ぐためだ」

「は？ 息子つて」

「あなたの中に宿つているかも知れない男子に決まっている」「宿つているかも……つて、そんなのわかんないわよ！」

舞は一瞬で真っ赤になる。

可能性を考えたらゼロという時期じゃない。でも、遅れている、とこつわけでもない。自覚も症状もまったくないのに、妊娠を期待

されてもハツキリ言つて困る。

「そつであれば望ましいといふことだ。あなたには直ちに検査を受けていただく。この国で可能ですね？」　レイ陛下

「もちろんだ。しかし……」

舞がハツとして振り向くと、そこにレイ国王とティナがいた。

普段と変わらないレイ国王に比べ、ティナは顔面蒼白であった。ビスクドールのような白い肌が、さらに透けて見えるほど。今にも倒れてしまいそうで、舞のほうが心配になる。

「我が国でも検査は可能だ。しかし、この時期の検査で性別まで知るのは不可能ではないかな？」

レイ国王の言葉に、笠原は答える。

「承知しております。今は、妃殿下の「」懷妊を確認することが何より重要。可能性であつても、「」誕生までは男子として推測され、立派な後継王子として認められます。私はなんとしても、アルの息子を次期国王にしなければならない！　それが、私の成すべきことですから」

「しかし……」

そこに口を挟んだのはヤイーシュだ。

「……その場合、危険を孕んだクアルン王国に妃殿下をお連れしなくてはなりません。国の医療機関で「」懷妊を確認せよと、長老会議のお歴々は求めるでしょう」

「正直者だな、ヤイーシュ」

そう言つと笠原は片頬を歪めた。

ヤイーシュはムツとしたが、反論は飲み込んだようだ。

笠原はそれを見て、

「妊娠初期にて空路での帰国は難しい。次期国王の命を危険に晒すつもりか　そう言えど、あの連中も黙るだろ？」「

「なるほど！ さすがアーディル様」  
妙に感心した風情のヤイーシュに、舞はイラツとする。  
彼女が口を開けようとしたそのとき 。

「貴方がたは、失礼だとは思わないのですかー？」

男たちを前に叫んだのはティナだつた。

「マイ……いえ、アーディル様が悲しみを堪えて、こうして気丈に振舞つていらつしゃいますのに。まだ、確かな情報が届いたわけでもないんですよー。それなのに、次期国王だなんて……」

涙ぐみながらも、怒りに満ちた声である。

だが、どうやらこの笹原は神経の太さもミシュアル国王と似たり寄つたりらしい。

「失礼ですが……正妃殿下より、王后陛下のほうがお心が乱れている様子」

「だから、なんですか？」

「これは国家の一大事なのです。恐れながら、王后陛下には別室にてご休憩いただいたほうが……」

「一大事なら尚のことー。大事なお体であるアーディル様のお心に、負担をかけないように気づかうのが臣下の務めではありますか？」

貴方がたはご自分の名誉と立場ばかり気になさつて、妃殿下を敬つていらないではないの？ 恥を知りなさいー！」

これにはさすがの笹原も口を噤んだ。

その態度に舞は少しビックリする。これがもしミシュアル国王なら、『それがどうした！』と言い返すだらつ。でも、笹原は言わない。きっと、彼の中にはクアルン王国の王子としての使命と、日本人としての思いが交錯しているのだらう。

次に口を開いたのはレイ国王だつた。

「確かに。」少しつた席にアーライシャ殿を立ち会わせるのは、いかが早計ではないかな？ 一日や一日、時間を空けて然るべきだ。ティナ、アーライシャ殿を奥の部屋に案内する。レイ国王の言葉にティナはうなずき、鼻を啜りながら舞の肩にそつと手を置いた。

「……行きましょう、マイ」

ティナは優しい。

彼女ならきっと、ショックでしばらく何も考えたくない、と思つただろう。でも、舞は違つた。

「……ティナ……ありがとうございます。」めんねむ。

舞は肩に添えられたティナの手を外すと、笠原に向き直る。

「わたしの気持ちを言つ前に、ひとつ聞いておきたいんだけど。『クアルン王国の慣例に従つ』って、いったいどういう意味？」舞は打ちのめされた表情は一切見せず、胸を張り、顔を上げて彼に尋ねた。

「それは……」

「人前で言えないようなこと？」

舞の言葉に棘があると思ったのだろう。笠原も真っ直ぐ舞をみつめて答える。

「そんなことはない。……アルの死が動かしがたい事実だと長老会議が認め、あなたの懷妊が判明した場合、私はあなたと結婚する」

その発言にはヤイーシュ以外の全員が息を飲んだ。

未亡人になつた兄弟の妻を引き受けるといつのは、王室に限つたことではない。クアルン王国内ではよくある話だつた。

残された妻に子供がいない場合、妻は実家に帰されることが多い。例外は戻る家がない場合。そのときは、夫の独身の兄弟が娶るか、新しい嫁ぎ先を探してやるのが慣例となつてゐる。

だが、子供がいる場合は変わつてくる。

クアルン王国において、男子は妻の子供ではなく、夫の一族の子供として扱われる。妻が婚家を離れる場合は、連れて出ることは叶わない。女子はその限りではないが、立場が王女であれば……連れて出ることはまず不可能だらう。

今回の場合、結婚年数も浅いことから、子供がいなければ舞は日本に帰される可能性が高い。

一方、王位だが……。

次男である笹原は王位継承権を放棄し、外国籍を取得している。しかし、クアルン王国の王族に関する法律により、彼は国籍と王子の地位を捨てることができなかつた。そのため、特例により一重国籍が認められている立場だ。放棄は彼の希望であり、法的に復権は可能だつた。

とはいへ、現時点では正統なミシユアル国王の後継者は三男ラシード王子だろう。

そこで問題になつてくるのが“舞が妊娠しているかも知れない男子”的存在。

正統性を主張するなら、その男子が王位継承順位第一位となる。ラシード王子が未婚なら、彼が兄の正妃を娶り、王位を継承する。そして、男子が生まれたらその子が次の王位に、女子であつたら、ラシード王子と舞の間に男子が生まれるのを待つ。といふことになるのだが……。

ラシード王子にはライラという第一夫人がいる。前王の正妃を第

二夫人として娶ることは許されない。舞には同じ地位を与えることはいけないからだ。ライラと離婚し、新たに王として必要な正妃を娶る、という形になるが……反目感情を煽り、問題が大きくなることは火を見るより明らかだつた。

きつとミシュー・アル国王も同じことを考え、笠原に白羽の矢を立てるのだろう。

独身の彼ならたいした面倒もなく、舞を第一夫人にできる。彼自身が王位に就くもよし。摂政の立場で舞と息子を支え、やがて、息子が王位継承可能な年齢に達したと判断されたら、速やかに譲り渡すであろうと信頼したに違いない。

そして笠原も兄の期待に応えようと

「非常に不本意だが……。こうなつた以上、私はアルの願いを叶えるために全力を尽くすつもりだ。あなたもそのおつもりで」

しかし次の瞬間、舞の堪忍袋の緒はブチンと切れた。

## (1-7) 解決策は結婚（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

先日はアンケートにご協力いただきまして、ありがとうございます。  
た。

結果はこちからご覧いただけます <http://enq-makeller.com/efcsumur>

引き続きよろしくお願い致します（^ ^）～

## (18) 勇氣をほんの少し

いい加減、本人を無視して話を進めようとする彼らに向かい、舞は、ダン！ と足を踏み鳴らした。腰に手を置き、胸を張つて男たちを見回す。

「お断りよ！ 妊娠してもしてなくとも、男だらうが女だらうが、わたしはあなたと結婚なんてしません！ わたしの夫はアルだけなんだからつ。お疲れ様でした。ニューヨークでも東京でも、あなたのいる場所に帰つてけよつだい！」

舞の返答にさすがの笹原もムツとしたらしく。

「大きな口を叩くが、私が駆けつけなければ、あなたはダーウードに殺されていたのではないか？」

「だつたら何？ アルが戻つてくるつて言つたんだから、絶対に戻つてくる。わたしに何かあつたら、ゼーんぶ、アルのせいなんだからねつ！」

「そのアルの頼みで私はここにいるんだぞ」

笹原はミシュアル国王と同じ琥珀色の瞳で舞を見下ろした。

声は似ている。瞳の色も同じだ。でも、ミシュアル国王とは明らかに違う。

ミシュアル国王にみつめられると、吸い込まれるように囚われ、無意識のうちに言いなりになつてしまつ。でも、笹原の瞳にその不思議な力はなかつた。

（きっとそれが“恋”なんだろうな……）

舞はあらためて笠原を見上げ、迷いを振り切るよつと云つ。

「だから、あなたがアルの頼みでわたしを守るつていうなら、『守らせてあげる』。でも、決めるのはわたしよー。はつきり言つておくわ。アルは死んでないから、あなたと結婚するようなことにはなりません！ それと、アルが戻つてくるまで妊娠の検査も受けないから。以上！」

舞の宣言に笠原をはじめ、レイ国王やティナまで息を飲んでいる。そんな中、ヤイーシュが恐る恐るといった感じで口を開いた。

「アーライシャ様。検査は早めに受けられてもよろしいのでは？ 陛下がご無事なら、そのことをお知りになられたら喜ばれると思つのですが……」

「受けないわ。戻つてからでも充分だもの」

キッパリと言い切る舞を見て、何を言つても無駄だと語つたのだろう。ヤイーシュはそれ以上何も言わなかつた。

しかし、ヤイーシュと入れ替わるように笠原は我に返り、口を開いた。

「なんて強情なんだ。あなたは自分の置かれた立場がわかつているのか？」

「知らないわよ！ 勝手に話を進めてるのはそつちでしょ？ だつたらわかるように説明してよー！」

それはそれで尤もだ、と思ったのかもしれない。笠原はゆっくりと説明しはじめた。

舞は正式な婚姻を終え、日本の国籍を抜けて、一時ラフマーン国籍となり、現在はクアルン国籍になっている。……はずだった。だが、ラフマーンのスルタンとのやり取りはすべてミシュアル国王あつてのこと。それにはサディーク王子の立ち位置も大きく関わ

つていた。

サディーク王子は……早く言つてしまえば、ラフマーンの王室で一番権力を持たない王子なのだ。王太子の次男、そして二十七歳という年齢。普通なら何らかの地位を与えられ、政治的権力を有する年齢である。しかし、彼は個人的な理由から一切の肩書きを持たず、国政にもなんら関わっていない。しかも、このままいくと来年には王子の身分すら奪われる寸前であった。

そうなると、余計に舞の立場は微妙だ。

ミシユアル国王がいなくなれば、正妃としての資格なし、と判断されかねない状況で……。

「いいわよ。クアルン国籍を認めないつていつなら、もう一度日本に戻るから」

舞はそう返したが……。

笹原は大げさなほど、深いため息をついた。

「事はそう簡単にはいかない。国際的には王妃の立場にあるあなたを、日本が受け入れるかどうかは微妙だ。思い出してくれ、母上の希望やアルの思いはさておき、日本側があなたとクアルン王国の王子との婚約を薦めた理由がなんだつたか」

舞はハツとした。

たしか『産油国であるクアルンと友好条約を結ぶ必要があった』とか『国際問題』とか、ミシユアル国王が舞を迎えて来たとき、父が口にしていた気がする。もう何年も前に思えるが、三ヶ月も経つていなきことに驚きだ。

「そして、あなたが懷妊していたら……事態はそりにややこしくなる」

最悪、子供がいなければ表向きは円満に解決ができるという。舞が正妃の立場を主張してクアルンに残るうとすれば別だが、おそらく婚姻を取り消して日本に帰国、ということになるだろう、笹

原はそう語った。

問題は懷妊していた場合である。

婚姻を無効にしても、国王の男子であれば母親の身分に関わらず後継者となってしまう。ようするに、舞から正妃の身分を奪つても無駄なのだ。ミシコアル国王が外国人女性に生ませた息子であつても、王子は王子。

と、なると……舞の懷妊が判明したら、まず命が狙われることは間違いない。しかも、女子が生まれても将来的にどんな形で利用されるかわからないので、執拗に狙われ続けるだろう。

さらには、他国の内政干渉を望まないため、舞と子供がクアルン国外に出ることは認められない。おそらく、日本をはじめ諸外国は原油問題でクアルンとの軋轢を避けようと、舞と子供の存在を無視するだろう、と。

舞が妊娠していたら、日本にも戻れず、どの国も受け入れてくれず、クアルンの王宮にも居場所はない。といつ、まさに大ピンチであつた。

「 その前に、先手を打つてあなたの立場を明確にする必要がある。子供がいなければ、日本で日常生活が送れるようだ。懷妊が明らかになれば、アルの子供のために全力を尽くそうと。どうしてそれが理解できない！」

笹原の言いたいことはわかつた。彼が兄のために自由を放棄してクアルンに戻る覚悟をしていることも。だが……。

「 助けてくれたことは感謝してる。でも、落ちつくのはそっちじゃないの？」

「 何？」

「 何回も言つようだけど、アルは死んでない。そりや、わたし가襲われることを心配してあなたを寄越してくれたんだろうけど……。

“王太子の剣”だって保険みたいなもんだと思う。アルは裏を搔かれたり、騙されたり、そう簡単に罠にはまるような人じゃないわよ  
「 笹原は啞然として舞を見ている。

先手必勝も結構だが、急いでは事を仕損ずるともいう。

ミシユアル国王はどんな不利な条件だって乗り越えて誓いを守つてくれた。これまで、さんざん先走つては余計に迷惑をかけてきた気がする。

（だから今度は……アルを信じる。無駄に悲しんだり、怒つたり、動き回つたりしない！）

舞は心を決めるとレイ国王を振り返つた。

「わたしがここに居ることで、アズウォルドに迷惑をかけるなら、出て行きます」

すると笹原は初めて声を荒げた。

「何を馬鹿なつ！ この国を出て、ひとりでどこに行こうと言つるだ！」日本にも……

「ちょっと、うるさいつてばー、わたし独りくらうつうとでもなるんだから」

「コソコソ隠れ住むつもつか！？ それこそ、アルはそんなことを

……

「 笹原さんて非公式にこの国に来てるんだよね？ クアルンの第一王子つてのは、自分で返上してるつて聞いたけど

舞の質問に笹原は怪訝そうな顔で答える。

「ああ、そうだが。それがいつたい……」

「だったら、この場でわたしに命令できる人つていなはづよね？」

舞は国賓。レイ国王やティナとは対等な立場である。退去の要請はできるが、命令はできなかつた。

ましてや、パスポート上はただの日本国民にすぎない笹原や、キヤラハン名義で不法入国中のヤイーシュが、一国の王妃である舞に命令するなどとんでもないことだ。

黙り込む笹原を尻目に、舞は言葉を繋ぐ。

「レイ国王陛下。お許しいただけるなら、わたしはセルリアン島に戻り、アルが迎えに来るのを待ちたいと思います」

## (19) 愛しきをフレイバック

『如何なる問題が起じれば、國を逃げ出するような王に王たる資格はない』

そう言つてミシュアルが帰国してから、すでに丸五日が経過していた。

クアルン王國の政府は他国の問い合わせに対し、ざらか足並みのそろわない回答を繰り返している。

『新国王選定中』

ハーリファ王室の長老会議だけが、そんなコメントを出していた。もちろん舞にも、カイサル元国王の名前で帰國要請が届いたのだ。だがそれは、あくまで“要請”。なぜ“命令”ではないのか、笠原やヤイーシュにもわからないといつ。

舞は、『王命により、アズウォルド王國に留まります』とだけ返事をした。

それに対する答えはまだ戻つてきていない。

「レイ。まだ、シーケ・ミシュアルのことは……」

「確たるもののが何もつかめない。クアルンは大国で、もともと当然のように情報統制が行われている国だからね。ただ、国民の半数は“ミシュアル国王死亡”的報道に信憑性はない、と思つているようだ」

レイの言葉にティナは少しだけ明るい表情をした。

「そうなの？ よかつた。早速、そのことをマイに伝えるわ

「ああ。そしてあげるとい」

レイは微笑んだ。

「アーライシャ殿は相変わらず？」

「ええ、泣き言は一切言わないの。それどころか……今日も、リゾート・SPAの館内にある温泉プールに、女性従業員をみんな集めて遊んだくらいよ。いつも、楽しそうに笑つて……私のほうが泣きそう」

「苦しみは吐き出したほうが楽になるんだが……」

レイの咳きにティナは首を振つた。

「ダメね。マイはとても意思が強くて、一度決めたら何があつても譲る気はないみたい。でも、たとえ気休めでも電話で伝えてくるわね」

そう言つてティナはレイの執務室から出て行つた。

舞がセルリアン島の国立リゾート・SPAに戻り、一日が経つ。1Jの王宮で、舞はレイに向かつて言つた。

『アルは必ず戻ると言いました。それまで、おとなしく待つように、と。だから、もう少しだけ……1Jの国に、いさせていただきますか？』

『もちろん、ミシュアルが迎えにくるまで、ここにいていただかなくては。それは、私と彼の約束ですから』

舞はレイの心遣いに、笑顔を見せながら感謝を口にした。

国民は新しい国王に期待している。だが、それもあと数日が限度だろう。国王が姿を見せず、死亡説が流れ、王室が新国王を発表したら……。

そうなれば、ミシュアルが生きて戻つても、国政の混乱は避けられない。

ただでさえアラブ諸国で暴動の起こつてているこの時期だ。反日組織ではなく、王政反対派がテロに走れば、クアルンはとんでもない

「」となるだれい。

（向をやつてゐる。まさか、本当に……）

そのとき、ドアがノックされると同時に開いた。  
駆け込んできたのは補佐官のサトウである。

「どうした、サトウ。お前がそんな慌てて「  
「は、はい。それが……とんでもない、連絡が入りまして。その、  
陛下の指示を……」

レイは息を吐くと低い声で命じた。

「シーケ・ミシユアルの生死が判明したんだな。話せ」

～\*～\*～\*～\*～

「妃殿下、少し風が出てまいりました。ヴィラに戻られてはどうで  
しょう」

それはクロエの声だった。

ビーチパラソルの下、舞はデッキチエアに座り込んだままボンヤ  
リと海を見ていた。

遠浅なのでかなりの位置まで歩いていける。ミシユアル国王と手  
を繋いで歩いたのが昨日のことのようだ。

彼は『一、二、三、或いはもっと早く』舞のもとに戻つてくると約  
束した。それがもう五日。ひとりができる遊びはほとんどやった。  
もう、ひとりには飽き飽きしている。

( なんで迎えにこないのよ…… )

シャムスも舞についてセルリアン島に戻つてきていった。だが、一度折れた心はなかなか回復しないようで、シャムスはベッドから起き上がりなげずに入る。

『家族のためには、ターヒルさまでの結婚を無効にしてもらい、戻るのが一番だとわかつています。でも、もし田那さまのお子がお腹にいたら……。私は家族を捨てても、子供を守ります』

ムスリムの掟も、クアルンの常識も知らない舞とは違い、シャムスは王室に仕える家系の人間だ。

ターヒルが冤罪とはいえ反逆罪で裁かれたら、彼の一族は王宮を追われるだろう。シャムスも同様だ。そしてシャムスの一家は、肩身の狭い思いをすることになる。

でも、シャムスとターヒルの結婚が無効なら……。もし妊娠していたら……それを願つてシャムスは頑張りつとした。でも、その可能性はないと、昨日判明したのである。

『申し訳ありません、アーライシャ様。私はこの先、何を支えに生きればよいのでしょうか……』

舞の顔を見るたびに、そう言つて泣き伏してしまつ。

クアルンにも戻れない。かといって、アズウォルドにもいつまでもいられない。舞は日本に家族がいるが、自分はひとりぼっちになつてしまつた、と絶望的な顔をする。

『いや、わたしだつて日本には帰れないし……』

なんて気弱なことを言つと、さらに落ち込むので、

『ござつて時にはアズウォルドを出て行つたつてことにしてもらつて、どつかの島に日系人として住まわせてもらつから平氣よ。シャムスは肌の色が濃いから、東南アジア系で通用するつて。アルがターヒルを連れて、迎えにきてくれるまで頑張ろつー。』

舞はせつせとシャムスを励ました。

そんなシャムスに舞は感謝している。  
彼女が身も世もなく泣いてくれるから、舞は笑つていられるのだ。  
もし、そうでなかつたら……。

「あの……アーリシャ妃殿下」

「あ、うん。もう少しここにいる。スコールがきてもパラソルの下なら平氣でしょ？ 水着だから濡れてもかまわないし……。こーんなにのんびりできるのも、アルが帰つてくるまでだからね」

舞がそう答えると、クロエは黙つて頭を下げ、ヴィラに戻つていつた。

なんとなく“泣いていいよ”って目で見られると、意地でも泣くもんか、と思つてしまつ。

（わたくしでひよつとして性格悪いかも……）

舞はスックと立ち上がると、パラソルの下から出て海に向かつて叫んだ。

「アルの馬鹿ーつ！！ 王妃の肩書き放り出して、日本に帰っちゃうぞーつ！ もつといいオトコ見つけて、再婚しちゃうんだからねーつ！ アル……アル……戻つ」

グッと涙がこみ上げてきた瞬間

バケツをひっくり返したようなスコールが舞の頭上に降り注いだ。

(「、これじゃ、泣くに泣けないってば……」)

いつかのコテージで降り続いた雨とは違い、普通のスコールは二十分くらいですぐに止む。

そのときにはもう涙は引つ込んでいて、泣く代わりに舞は空を仰いで叫んだ。

「こんなときに、雨なんか降りたらないでよねっ！ 神様のばつかやわいわーーつー！」

刹那

もの凄い衝撃と音が、舞の耳に飛び込んできた。

(「な、なに？ 神様の仕返し？ それともクアルンから攻めてきた？」)

それはヘリの音だつた。舞の後方から飛んできたらしい。スコールの音に紛れてすぐ近くにくるまで全く気づかなかつた。

白い機体、扉の部分には紺碧のアズウォルド国旗。それは紛れもなくアズウォルドの王室ヘリだ。

目にした瞬間、舞の胸は激しく鼓動を刻む。

(まさか……アルが戻つてくれた？)

ビーチパラソルから少し離れた砂浜にヘリは着陸する。

そして唐突にドアが開き、姿を見せたのは レイ国王だつた。

彼は焦つた様子で、舞に何か言いたそうにしている。

期待はあつという間に消え去り、舞の心は谷底へと突き落とされ

……。

そのとき、レイ国王を突き飛ばす勢いで、誰かがヘリから飛び出してきた。

ヘリのプロペラは回つたままだ。風が砂塵を巻き上げ、背後の海を消し去った。そこに、金色の砂漠の幻影が浮かぶ。その中を、白いトーブをはためかせ、舞に向かって駆け寄る男がひとり。まるで映画のワンシーンのように……。

それは、いつかの公園と重なり、舞は搾り出すよつた声を出した。

「……アル……」

(20) あなたの顔で顔で顔で顔(R(記書を)

後半に性描写があります、R1-5でお願いします。

舞はトップ姿のミシュアル国王に向かつて走り寄る。  
次の瞬間。

「馬鹿者！ なんという格好で」  
「アルの馬鹿つ！ すぐに帰るつて。一々三日つて言つたくせに  
！ もう五日よ。嘘つき…」

水着姿の舞を咎めようとしたミシュアル国王に向かつて、舞は思  
い切り怒鳴つた。精一杯抑え込んできた感情が、堰を切つて噴き上  
げてくる。

立場も何もかも忘れ、舞は叫びながら彼の胸を叩き続けた。

「馬鹿、馬鹿、馬鹿ーっ！！ アルの馬鹿つ。一度と信じない。だ  
いつ嫌いなんだから」

暴れる舞をミシュアル国王は押さえ込むつに抱きしめる。

「すまぬ。だが、私はお前に会いたかった」

そのたつた一言で、舞が懸命に作り上げた壁は一気に突き崩され  
た。

堪えてきた涙が溢れ出し、もう止められない。

「アル……ひとりにしないで。どこも行かないで。死んじゃヤダ  
……わたし。わたしは」

「不在中のことはレイから聞いた。よくぞ、私を信じて動かすにい

てくれた。妃であるお前を誇りに思つ

熱い砂の匂いがした。ミシュアル国王の匂いと、命の証である鼓動を聞きながら……。舞はやつと張りつめた心の糸を切り、意識を落とすことができたのである。

～\*～\*～\*～\*～

次に目を開けたとき、舞はベッドの中にいた。

（え？ ひょっとして、アルが帰ってきたの？……夢オチ？）

真っ青になる舞の耳に、規則正しい呼吸音が聞こえ……。上を見ると、そこにミシュアル国王の顔があつた。舞は大きさなほどホッと息を吐き、夫に抱きつく。

この一晩間、ちゃんと寝ているつもりだった。平気なつもりだったのに……。舞は浅い眠りを繰り返していただけで、体も心も本当の意味で眠つていなかつたのだ。だから、ミシュアル国王の顔を見た途端、糸の切れた人形みたいに、すべての活動が停止した。

（でも……なんで死亡って言われたの？ 叫き起こして聞いたら怒るよね？）

とんでもないことを考えながら、舞はミシュアル国王の裸の胸をゆっくりと撫でてみる。ちょっとピクッと動くたび、『ああ、生きているんだな』『と思い、それだけで嬉しくなるのだ。そのとき、唐突に彼の胸に置いた手が掴まれた。

「舞、田を覚ました途端、何の悪ふざけだ！？」

「あ……アル、起きてたんだ」

「それは私のセリフだ。辛い思いをさせたと聞き、今夜はゆっくり休ませようと思つたのだが……」

「辛いっていうか……。わたしは平気よ。でも、シャムスが……ターヒルは？ ターヒルはどうなつたのつ！？」

舞はハツとして大きな声をあげる。

思えば、ターヒルのことをするつかり忘れていた。

「もちろん無事だ」

「よかつた。じゃ、シャムスに教えて……」

そう言つて起き上がろうとした舞の体を、ミシユアル国王が引き止める。

「舞。お前が気を失つて何時間経つたと思つている？ ターヒルは今、シャムスの傍についている。邪魔をするつもりか？」

言われて見れば……。

最初に舞たちが使つていたのとはべつのヴィーラだが、間取りはほぼ一緒だ。外はかなり暗くなつていて、ひょっとしたら、夜中かもしれない。

「すぐに帰国する予定であつたが、お前を眠らせてやりたいと思い、一日延長した。今はもう深夜だ」

かなり眠つていたことを知り、舞は愕然とする。

「「」、「」めんなさい。ところで、アルは平気なの？ 怪我とかしてない？」

ヘリが墜落したとかなんとか。しっかり聞かなかつたが、そんなコースだつたよくな……。

「私は傷ひとつない。ターヒルは抵抗したらしく怪我を負つたが、命には別状ない。一連の事件で一番の怪我人はヤイーシュであるうつな」

「あの……ダーウードのこと、聞いた？」

舞は上目遣いに尋ねてみる。

なんといつても先代国王からの側近だ。その彼が舞の命を狙つていたと知れば、かなりショックだろう。

「ダーウードのアラブ純血主義は聞いていた。だが、父上に引退をすすめられたとき、率先して私の側近を希望したらしい。父上は、そんなダーウードを信じたのであるうな」

もともとクアルン王国は、クアルン人こそアラブの中で最上の民族、という純血主義だった。だが、ハーリファ王家により、その考えは薄れていったという。同族内の婚姻を繰り返すより、他部族からの花嫁を迎えたほうが血が濁らない。優秀で逞しい男子が生まれやすいと考えられたからだ。

そんな純血主義者にとって、国王の正妃だけは……といつのが最後の砦になっていた。

舞が本当にラフマーンの王女ならともかく。彼女が日本の一般人女性であることは誰もが知っている。ミシユアル国王が王太子になつたとき、ダーウードは再三、先代国王に意見したという。

『どうか、婚約解消を。あるいは、先にクアルン人女性を第一夫人として娶るよう、ご命令を!』

ミシユアル国王の話を聞き、ショックなのは彼ではなく、先代国王なのかもしれない、と思い直した。

舞はついでにクアルンで起こったことを聞こつ、と思い……。

「ねえ、アル……」

「言わすともわかつておる」

やう言つと、ミシュアル国王は優しく舞のまぶたにキスをした。

(さすがアル！　言わなくてもわかつてるんだ)

舞がそう思つて、事情を話してくれるのを待つていると……いつまで経つてもキスが止まらない。頬から頬、そして顎を伝て胸に下りていく。

そのとき、舞は気がついた。なぜか、全裸で寝かされていふことに

「ちょ、ちょっと待つて、アル……なに、してるの？」

「寂しかつたであります？」五日も一人寝をさせてしまつた

「そ、そんなこと……や、ん」

……してゐる場合じやないでしょ。と言いたいのに、ミシュアル

国王はノンストップで舞の身体に触れてくる。

「わ、わたし、ダークーデに殺されそうになつたんだよ」

「もちろん、聞いておる。怪我がないか、しつかり吟味する必要があるな」

そんなことを言いながら、ミシュアル国王のキスはどんどん下に向かう。

(ア、アルつてば、本気なの？　それとも……わたしをからかつて  
るだけ？)

キスはとうとう、最終地点まで到達した。

ミシュアル国王の大きな手が太ももに触れ、温かい舌が大事な場所を口づける。

「や……ちよ、アル。や、やあん！」

クアルンで何が起じたのか。なんで国王死亡なんてニュースが流れたのか。でもって、笠原はどうなったのか。舞のアラビア語のヒアリングが間違つてなければ、ダーウードの言つた言葉。

『ミシューアル国王のせいで婚約者を失いながら』

アレにどんな意味があるのか。聞きたいことは山のようにある。どう考えてもん気にエツチなことをしてくる場合ぢやない、と思うのだが……。

「私はお前に会つため、お前を抱くために戻つてきた。舞、お前を正妃の座から引きずり下ろそうとする者は、力づくで排除する」

薄闇の中、琥珀色の瞳が煌いた。

「舞……私が欲しいと言え。お前の中に私を受け入れてくれ。この行為こそが命の証なのだから……」

そんなミシューアル国王の願いに、『いや』なんて言えるはずがない。

「アル、きて……お願い。生きてるつて教えて。本当に、生きて帰つてきたんだつて」

「もちろんだ」

ふたりは夜が明けるまで、互いの命を確認しあつたのだった。

(20) むなつの腕で翼をひたひたR (後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

後半部分の性描写、サイト版に比べて少し削ります( ^ ^ - )  
なうう様基準なので、ご容赦ください。

それから、web拍手に「H妃をトーク」をヒヤしてあります。  
よかつたひ…

あと2話でラストとなります。

最後までよろしくお付き合ってくださいませ( ^ ^ ) -

(2-1) いつまでもあなたと

「……アルって本当にスゴイよねえ」  
舞はしみじみって感じで口にする。

「なんだ。今さら何を言っておる」

「それは、まあ、そうなんだけど」

「どうした、舞。まさか……まだ足りぬのか？」

「そ、そんなわけないでしょーつ！ 腰がフラフラで座つてゐるのも辛いから、アルにもたれてるつていうのにっ」

舞は真剣に叫んだ。

窓から朝の陽射しが射し込みはじめた。天蓋のカーテン越しとはいえ、それくらいはちゃんとわかる。

いい加減、少しばは休ませて欲しい。というのが本音だ。

なんといっても今日の午後には帰国が決まつてゐる。機内には豪華なベッドがあるので、寝よつと思えば一くらでも寝られるが……。

(機内だと元気になつて迫つてくる可能性大だもん。でも、今からもう一回！ なんてことは言わないよね？)

舞が戦々恐々としている、

「残念だが……」

ミシュアル国王が沈んだ声で言い始めた。

(まあ、さすがのアルもこの短時間じゃ五回が限界よね。丸一日だつたらもつとイケそうだけど)

舞が心の中でうなづいたとき、

「三十分ほど休憩が必要だ。そのあとは、必ずやお前を満足させよ  
う。」

なんて自信満々に宣言する。

「アル……悪いけど、あと三十分じゃ、わたしの腰が復活しない！  
次のエッチは帰国までオアズケだからね。言つとおりにしてくれ  
ないなら、わたしはアズウォルドに残る！」

「わかった。クアルンまで待とう」

途端に、しゅんとなるミシュアル国王だった。

～\*～\*～\*～\*～

「え？　じゃあ、ヘリって落ちてないの？」

「あたり前だ。ヘリが墜落していれば、さすがに無傷では戻れんだ  
う」

ミシュアル国王の大きな胸を背もたれにして、舞はクアルンで起  
こつた出来事を聞いていた。

「本当にお父様もお母様も、ラシードたちも無事なのよね？」

「静養中の父上たちなら、何が起こつたのかも知らぬだろう。ライ  
ラの母、サマン殿も同様だ。そもそも、リドワーン自身が何も知ら  
ずに動いていたのだからな。ただし、今回の件で長老会議の半数は  
メンバーが入れ替わることになつたが……」

あえて『主犯』を上げるならダーウードだった。

彼をはじめとする、クアルン王族の純血主義を復活させたい面々  
が、画策していたという。共犯とは言ひがたいが、水面下で彼らの  
火を煽つていたのが長老会議における純血主義のメンバー。

最初の火種は日本人の血をひく王子の誕生からはじまる。しかし、

それが確実に燃えはじめたのは、やはりミシユアル国王が王太子に就いたときだろうか。そして、即位するだけならまだしも、日本人正妃を迎えて……。

彼らの不満は一気に爆発した。

クアルンの王に流れる血は、純粋なアラブ人のものでなければならぬ！ ダーウードをはじめとする彼らの主張はそうなる。

しかし、王族として油田の利権にあやかる長老会議のメンバーは、ミシユアル国王に別の不満を持っていた。

ミシユアル国王は油田利益の国民還元政策を打ち出していた。だが、頭の古い王族は自らの利権に群がり、自身の取り分が減ると反対しているのだ。

クアルンは国民の半数が二十歳以下という若い国。今は様々な規制をされているが、いずれインターネットも若い国民を中心に入り込んでくるだろう。 国際社会に通用する人間を育てる。教育が国家の未来を担う そんなスローガンのもと、ミシユアル国王は新規改革に取り組んでいた。

（へえ）。アルってエッチなだけじゃなくて、眞面目に国王として頑張ってるんだ……）

などといつ不謹慎な感想を舞は抱きつつ……。

「リドワーンが私に一心を持つている。そんなことをダーウードに伝えたらしい。ハーリファ王室から日本の血を一掃するチャンスだと。私がこのハネムーン中に反日組織を一網打尽にする計画を立てていたのに便乗した、というべきか」

それも舞には初耳だった。

例の、デパート前で舞に特殊塗料入りの瓶を投げつけた男。あの連中が反日組織らしい。

連中が王宮にも入り込んでいる、という情報を受け、ミシユアル国王は今回のハネムーンを利用して掃討作戦に出たという。

「私が単独で帰国する事態を見越して、警備の厳重なアズウォルドでハネムーンを過ごすことにしたのだ。レイにも、お前を守ってくれるよう頼んだ」

「じゃあ、弟の笠原さんを呼んだのは？　ダーウードを怪しんでいたから？」「いや……。残念ながら、我が国外務省職員のことは警戒していたが、側近のことは信頼していた。ダーウードを、とこより、彼を薦めた父上を信頼していたからだが

ミシユアル国王は悔しそうに言つた。

ルシア地方で静養中の前国王夫妻は、よつやく肩の荷を下ろすことができて、穏やかな日々を過ごしていた。首都から届く定期報告の確認も側近任せ。前国王は決められた場所にサインをするだけ……。ダーウードの部下として長年勤めてくれた側近らは、前国王は全幅の信頼を寄せていた。

何も知らず、ミシユアル国王は不在中の裁定を王弟ラシード王子ではなく、前国王に任せてしまつたのだ。そのため、彼らはほとんどない権力を手にすることになつてしまつ。

その一方で、長老会議はリドワーン王子も焚きつけた。

『前国王はリドワーン王子を後継者にと考えていた。ヌール妃の策略でミシユアル国王が誕生したが、それでも前国王は最年長の孫であるリドワーン王子の手腕に期待しておられる。ラシード王子の補佐を任せたのが何よりの証拠』

リドワーン王子はミシュアル国王を恨んでいて、前国王を味方につけたいと考えていた。ミシュアル国王を追い落とすつもりなどないが、前国王の口添えがあれば彼の希望が叶うかもしない。

長老会議の後押しもあり、彼はそのために“前国王の命令を忠実に遂行” しただけだつた。

「無論、多少は怪しんでいたのだろうが……。奴は優秀だが、篡奪してまで王位を欲するような気質ではないからな」

「でも……だつたら、リドワーン王子つて何がしたかつたわけ？」

「……」

それは第三夫人の一件だつた。

なんと彼は第三夫人に迎える予定だつた十六歳の少女と、本氣で愛し合つていたらしい。彼女は王子の宮殿に勤める女官見習いだつた。王子は彼女の愛を得るため、多額の慰謝料を払つて第一、第二夫人と離婚したのだ。彼女の両親も感激して、王子の求婚を受け入れた。

しかし、離婚理由に不妊を挙げられた夫人たちが激怒。当時のミシュアル王太子に直訴した。

「そんなこと……つて言つたら悪いけど。それで、わたしつてば殺されかけたわけ？」

人の恋路を邪魔したミシュアル国王のせいで命を狙われたのかと思うと、舞は力が抜けてくる。

「だから、そうではない！ リドワーンはリドワーンで十六歳の女官見習いを妻にするために奔走し、王室の純血主義復活を願うダーウードたちの計画と重なつただけなのだ。それを意図的に重ねたのが長老会議の面々だが……」

当初、舞を狙うだけのダーウードたちだが、彼らの行動はし  
だいにエスカレートした。

前国王命令、を出せば思つままに動くリドワーン王。ミシユアル国王の力を削ぐために、ターヒルに逮捕状を出したまではよかつた。それを餌に国王を舞から引き離せる。

ところが、アメリカ人の母を持つヤイーシュがシーケを名乗ることに、不満を持つ者がいたのだ。そして、命を狙ってしまった。やり過ぎたせいでヤイーシュの不審を買い、彼を逃がしてしまった。

そして ヘリ墜落、ミシユアル国王死亡の一報。

ダーウードをはじめ、純血主義の権化ともいづべき数人は大喜びしたらしい。でも、ほとんどの人間が責せめた。なぜなら、国王暗殺など、誰も計画していなかつたことで……。

「反日組織はあの時点で壊滅していた。別の組織が動き出したなら、狙いはお前ではない、と思つたのだ。だが、万一を考えヤイーシュを残した」

「じゃ、姫原さんは？ それに“王太子の剣”を預けたのはなんですか？」

「保険だ。私は国王として国家の未来を考える義務がある。後継者なきまま死ぬわけにはいかない。リドワーンが敵なら、シドは取り込まれている可能性が高い。国王としてアーディルに一任する証に、『王太子の剣』を委ねた」

ヘリはミシユアル国王自身が操縦して、ルシーア地方の森に不時着させたらしい。そこで待たせていた部下と合流して、ヘリを炎上させた。

そのまま宮殿に乗り込み、『国王死亡』の報に慌てまくっていた前国王の側近たちを一網打尽にして、長老会議で反ミシュアル王国派をあぶり出した。

長老会議の連中は犯罪に加担した証拠がないので逮捕はできないらしいが……。

「リドワーンには第三夫人を娶る許可を出した。今は私に忠誠を誓い、長老会議の連中を尋問している。ターヒルは逮捕状そのものが無効と判明し、すぐに解放されたのだ。ライラたちが無事とわかり、シドも役目に戻った」

「言つのは簡単だけれど、それを水面下で実行したのはさぞかし大変だったと思う。

でも、舞はこれだけは言わずにはいられなかつた。

「わたしが殺されそうになつたとき、アルが助けてくれるつて思つたのに」

「……何より恐ろしかつたのが、ミサイルで国王専用機を狙われたら、ということだった。お前を同行しなかつた理由だ。許してくれ」

後ろからギュッと抱きしめられ、舞の中に安堵感が広がる。

「あ……それと、これだけは忘れないで。もし、アルに何かあつても、絶対にあの笠原さんとは再婚しないからねっ！」

「ティルが気に入らなかつたのか？ しかし、シドでは」

「そうじゃなくて。わたしは……アル以外のお嫁さんにはならないつて言つてるの……だから、お爺さんとお婆さんになるまで、死んじゃダメよ」

ミシュアル国王はまんざらでもない笑顔を見せ、

「よからず。そのためには、早めに王子を作る必要があるな……」

なんて思わずふりな視線を送つてくる。

舞は大慌てで、

「ダ、ダメだつてば。第一、まだ三十分も経つてないし」「

「クアルンまで待てというのだろう? わかつてある」「

「……専用機の中だつたら……」

舞の妥協案にミシユアル国王の顔がパツと輝いた。

(なんか……夫人が四人で……別の意味があるんじや)

とんでもない想像にちょっとばかり青くなる舞であった。

(2-1) いつまでもあなたと（後書き）

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

このクアルンでのお話をアル視点で書き始めたり…

きっと果てしなくロマンスから遠ざかってこゝでしじょう（苦笑）（

今でもすでに…）

ということで、アルに説明していただきました（^ ^ - - -）

次回で最終回となります。

よかつたら、最後までお付き合いくださこませヨ（――）三

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6540u/>

---

紺碧の海 金色の砂漠

2011年11月29日17時53分発行